

国分東遺跡(第1・3次)・沖ノ坂遺跡 発掘調査報告

2005(平成17)年3月

三重県埋蔵文化財センター

巻頭カラー図版 1



国分東遺跡完掘状況（北から）



国分東遺跡完掘状況（東から）



国分東遺跡完掘状況（北から）

序

三重県鈴鹿市には、周知されている遺跡が約1,300か所以上あります。このことは、古代から人々が居住し、歴史と文化を築いてきた証拠だと思います。

今回、発掘調査しました国分東遺跡と沖ノ坂遺跡は、鈴鹿川左岸の台地上に広がっている遺跡です。この遺跡の西方には伊勢国分寺などが所在しており、これと密接に関連のある遺跡であろうと考えられています。今回の調査で奈良時代から鎌倉時代の昔の人々が暮らした足跡の一端を解明することができたと思います。

私共は、発掘調査によって得ることができた貴重な文化財を祖先の残した歴史遺産として保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上と発展の基礎として活用し、公開していかねばなりません。

今回は、主要地方道鈴鹿四日市環状線道路整備事業に伴い、国分東遺跡及び沖ノ坂遺跡の一部が現状変されることになり、記録保存を図ることになりました。これを契機に、記録保存された本報告書が鈴鹿市における郷土史研究並びに三重県の歴史研究の一助となるとともに、埋蔵文化財保護の啓蒙にお役立ていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に当たりましてご協力を賜りました鈴鹿市国分町の皆様方をはじめ地元の関係者、及び三重県県土整備部道路整備課、北勢県民局鈴鹿建設部、鈴鹿市教育委員会などの関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成17年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 吉水康夫

例　　言

- 1 本書は、三重県鈴鹿市国分町に所在する国分東（こくぶひがし）遺跡・沖ノ坂（おきのさか）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、次の体制により実施した。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
第1次調査	主 事 服部芳人・越賀弘幸・船越重伸 研修員 田中伸之・増田博
第3次調査	技 師 萩原義彦 研修員 松見直茂
調査作業受託 (株)中部日本鉱業	
- 3 本書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第1課が行った。遺構・遺物の写真是、服部芳人・萩原義彦が撮影した。執筆・編集は、服部芳人・萩原義彦・松見直茂が行った。
- 4 本書が対象とした実調査面積は、第1次調査が4,620m²（国分東遺跡4,390m²・沖ノ坂遺跡230m²）、第3次調査が約800m²である。総面積にして5,420m²である。
- 5 本書が対象とした現地調査期間は、第1次調査が平成6年7月4日から同年12月2日で、第3次調査が平成13年12月3日から平成14年2月8日である。
- 6 図版における方位は、国土調査法による第VI系座標を基準とし、方位は座標北を用いた。なお磁針方位は、6度20分西偏しており、真北方位は、0度18分西偏している。
- 7 本文で示す遺構表示略記号は、下記の通りである。

S A : 構ないし柱列	S B : 掘立柱建物	S D : 溝
S H : 堅穴住居	S K : 土坑	S X : 墓
		P : 柱穴
- 8 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』(20版 日本色研事業株式会社 1997年)に準拠した。
- 9 本書が扱う発掘調査の原因事業は、鈴鹿四日市環状線整備事業である。
- 10 発掘調査の経費は三重県県土整備部が負担した。
- 11 当発掘調査による図面・写真等の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 前言	1
1 調査契機	1
2 調査方法	1
3 調査経過	1
4 調査日誌	2
5 文化財保護法等による通知	3
第Ⅱ章 位置と環境	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査成果（遺構）	8
1 国分東遺跡	8
2 沖ノ坂遺跡	24
第Ⅳ章 調査成果（遺物）	40
第Ⅴ章 まとめ	64
1 奈良時代	64
①堅穴住居について	64
2 平安時代	64
①掘立柱建物の変遷について	64
3 鎌倉時代	64
①遺構について	68
②遺物について	68

挿図目次

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 第1図 遺跡位置図 | 第2図 遺跡地形図 |
| 第3図 調査区位置図 | 第4図 国分東遺跡A地区平面図（1/100） |
| 第5図 S H 3実測図（1/40） | 第6図 S K 50実測図（1/40） |
| 第7図 S B 201実測図（1/100） | 第8図 S B 203実測図（1/100） |
| 第9図 S B 204実測図（1/100） | 第10図 S B 206実測図（1/100） |
| 第11図 S B 208・209・210実測図（1/100） | 第12図 S B 205実測図（1/100） |
| 第13図 S B 211実測図（1/100） | 第14図 S B 213実測図（1/100） |
| 第15図 D 25・Pit 1実測図（1/50） | 第16図 S B 214実測図（1/100） |
| 第17図 S B 216実測図（1/100） | 第18図 S B 218・S A 217実測図（1/100） |
| 第19図 S B 220・222・223実測図（1/100） | 第20図 S K 19実測図（1/40） |
| 第21図 S K 15実測図（1/20） | 第22図 C 7・Pit 1実測図（1/20） |
| 第23図 S K 55実測図（1/80） | 第24図 C 12・Pit 1実測図（1/10） |
| 第25図 E 43・Pit 2実測図（1/20） | 第26図 S D 65実測図（1/40） |
| 第27図 S B 202実測図（1/100） | 第28図 S K 6実測図（1/40） |
| 第29図 S B 207実測図（1/100） | 第30図 S B 219実測図（1/100） |
| 第31図 S B 212実測図（1/100） | 第32図 S B 222・S A 227実測図（1/100） |
| 第33図 S B 224実測図（1/100） | 第34図 S B 227実測図（1/100） |
| 第35図 S K 72実測図（1/40） | 第36図 S K 57実測図（1/20） |
| 第37図 S K 58実測図（1/40） | 第38図 S D 1実測図（1/100） |
| 第39図 S D 67実測図（1/50） | 第40図 S K 41・S D 39実測図（1/50） |
| 第41図 S D 45実測図（1/40） | 第42図 S X 38実測図（1/80） |
| 第43図 S K 56実測図（1/40） | 第44図 S D 78実測図（1/40） |
| 第45図 S X 93実測図（1/40） | 第46図 S X 96実測図（1/20） |
| 第47図 F地区調査区断面図（1/100） | 第48図 S H 1実測図（1/50） |
| 第49図 S H 2実測図（1/50） | 第50図 S H 13実測図（1/50） |
| 第51図 S B 233実測図（1/100） | 第52図 S B 228実測図（1/100） |
| 第53図 S B 229実測図（1/100） | 第54図 S B 230・231実測図（1/100） |
| 第55図 S B 232実測図（1/100） | 第56図 S K 6実測図（1/20） |
| 第57図 S K 15実測図（1/20） | 第58図 沖ノ坂遺跡遺構平面図（1/100） |
| 第59図 出土遺物実測図（1） | 第60図 出土遺物実測図（2） |
| 第61図 出土遺物実測図（3） | 第62図 出土遺物実測図（4） |
| 第63図 出土遺物実測図（5） | 第64図 出土遺物実測図（6） |
| 第65図 出土遺物実測図（7） | 第66図 出土遺物実測図（8） |
| 第67図 出土遺物実測図（9） | 第68図 出土遺物実測図（10） |
| 第69図 出土遺物実測図（11） | 第70図 出土遺物実測図（12） |
| 第71図 掘立柱建物変遷図（1/800） | 第72図 掘立柱建物変遷図（1/800） |
| 第73図 掘立柱建物変遷図（1/800） | |
| 別添付図 国分東遺跡遺構平面図（1/400） | |

表 目 次

第1表 遺跡一覧表	第2表 遺構一覧表（1）
第3表 遺構一覧表（2）	第4表 遺構一覧表（3）
第5表 掘立柱建物・柵一覧表（1）	第6表 掘立柱建物・柵一覧表（2）
第7表 遺物観察表（1）	第8表 遺物観察表（2）
第9表 遺物観察表（3）	第10表 遺物観察表（4）
第11表 遺物観察表（5）	第12表 遺物観察表（6）
第13表 遺物観察表（7）	第14表 遺物観察表（8）
第15表 遺物観察表（9）	

図 版 目 次

巻頭カラー図版 1 国分東遺跡完掘状況（北から）	国分東遺跡完掘状況（東から）
巻頭カラー図版 2 国分東遺跡完掘状況（北から）	
図版 1 A地区完掘状況（南から）	A地区完掘状況（北から）
図版 2 沖ノ坂遺跡調査区完掘状況（南から）	沖ノ坂遺跡調査区完掘状況（北から）
図版 3 A地区SH3遺物出土状況（東から）	A地区SH3遺物出土状況（北東から）
図版 4 A地区SH3完掘状況（東から）	A地区SH3完掘状況（北東から）
図版 5 A地区SH3窓遺物出土状況（北から）	A地区SH3窓遺物出土状況（北から）
図版 6 SB201完掘状況（北から）	SB203完掘状況（東から）
図版 7 B地区SD1完掘状況（東から）	B地区C7Pit1遺物出土状況（東から）
B地区SK15遺物出土状況（北から）	B地区SK6遺物出土状況（南から）
SB204完掘状況（南から）	
図版 8 B地区C12Pit1遺物出土状況（南から）	B地区SK19遺物出土状況（南から）
図版 9 B地区SB202完掘状況（南から）	B地区完掘状況（北から）
図版10 B地区完掘状況（南から）	C地区完掘状況（北から）
図版11 C地区SB208・209・210完掘状況（北から）	
C地区SK32完掘状況（南から）	C地区SK57遺物出土状況（北から）
C地区SK41完掘状況（南から）	C地区D25Pit1遺物出土状況（南から）
図版12 C地区SK50遺物出土状況（南から）	D地区SD65完掘状況（東から）
図版13 D地区SB216完掘状況（南から）	D地区完掘状況（南から）
図版14 E地区SB218完掘状況（南から）	E地区SB221～224完掘状況（南から）
図版15 E地区SB214完掘状況（南から）	E地区SB214内SK56完掘状況（東から）
図版16 E地区E43Pit2遺物出土状況（西から）	
C地区SK56土層断面（南から）	E地区SD78土層断面（東から）
D地区SD67完掘状況（東から）	E地区SX96遺物出土状況（西から）
図版17 E地区完掘状況（南西から）	E地区完掘状況（北から）

- 図版18 F地区完掘状況（北から） F地区完掘状況（南から）
- 図版19 F地区S H 1完掘状況（南から） F地区S H 13完掘状況（東から）
- 図版20 F地区S H 2完掘状況（西から） F地区S B 232完掘状況（北から）
- 図版21 F地区S B 228完掘状況（北西から） F地区S B 228完掘状況（南から）
- 図版22 F地区S B 217完掘状況（東から） F地区S K 15遺物出土状況（南西から）
- 図版23 出土遺物（1・4・19・20・22・26・39・40・41・49・53・54・55・56）
- 図版24 出土遺物（69・70・71・72～81・83・84・95・102・106・110・111・112・113・114・131・143・144・145）
- 図版25 出土遺物（157・160・161・163・164・166・167・170・174・175・186）
- 図版26 出土遺物（188・189・195・196・197・216・223・224・225・232・233・235）
- 図版27 出土遺物（177・197・240・247・248・249・250・251・252・253）
- 図版28 出土遺物（26・94・271・272・276・278・305・307・308・309）
- 図版29 出土遺物（120・121・122・138・173・206・290・300・301・322・323・324・325・254・326）

I 前 言

1 調査契機

三重県埋蔵文化財センターでは、国及び県にかかる各種公共事業に関して、各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。こうした中で、三重県土木部道路建設課から、四日市鈴鹿環状線国補道路改良工事事業計画の照会を受け、事業予定地内の遺跡分布調査を実施した。その結果、国分東遺跡及び沖ノ坂遺跡が含まれることが判明した。そのため、詳細な遺跡の実態を解明するために平成4・5年度の2ヶ年にわたりて試掘調査を実施した。試掘調査の結果、国分東遺跡では4,870m²、沖ノ坂遺跡では230m²について発掘調査が必要と判断した。この取り扱いについては、その保護に努めるように当該部局と埋蔵文化財センターにおいて協議が重ねられたが現状保存が困難なため、発掘調査を実施し、記録保存することになった。なお、第3次発掘調査範囲は、試掘調査は行われていない。

2 調査体制

第1次調査は、平成6年7月4日から開始し、同年12月2日に全て終了した。最終の調査面積は、沖ノ坂遺跡は、230m²、国分東遺跡は4,620m²である。発掘調査の体制は、直営方式である。

第3次調査は、平成13年12月3日から開始した。12月3日から重機による表土掘削、7日から作業員による人力掘削にとりかかった。なお作業受託を(株)中部日本鉱業に委託した。

第1次調査は、夏場を挟む調査であったため、遺構検出において検出面が非常に乾き水が必要であつた。しかし、遺跡周辺においては、水を確保する場所がなく鈴鹿川の川水や集落からの生活排水を汲みに行き調査に利用するという状況であった。さらに今年は、連日40度を越す猛暑であり、発掘作業そのものも困難な時期であった。

第3次調査は、第1次調査と異なり冬場であり降雪や鈴鹿山系から吹く鈴鹿おろしの冷風下で行った。前回と違い降雪によって凍った検出面、乾くこ

とのない検出面、非常に寒い時期で困難を極めた。

しかしながら、発掘調査には地元の方をはじめ、たくさんの方々に参加していただいた。調査が滞りなく終了できたのも従事していただいた方々のご協力の賜物である。ここにご芳名を記して感謝する。

[第1次調査]

伊藤和代 伊藤玉子 宇佐美藤子 打田麗子
大鶴絹枝 片岡満寿子 川北昭二 北川さかえ
熊倉ヨシ子 黒田まさ子 桑原うた子 古山美佐枝
坂倉義也 坂本しげ子 坂本やすの 清水はる
鈴木美恵子 田中重治 辻 宏 萩森俊男
広田フヤ子 堀之内一哉 牧村正巳 松永初子
松永光治 松村幸雄 南 正美 南 美徳
宮口政子 森下コシヅ 吉田淳子 (敬称略)

[第3次調査]

石崎文夫 桐生秀逸 烏田志孝 永戸宗武
永戸つや子 永戸清 永戸尚子 永戸久子
鈴木信子 濱戸勝子 永戸三代 永戸しづ子
麻生利一 永戸七十子 河北 修 永戸 孝
永戸昭儀 西山勝雄 藤本恒夫 (敬称略)

3 調査経過

<調査日誌から>

[第1次調査]

平成6年7月1日 現地協議・道具搬入。
7月4日 表土除去。
7月7日 沖ノ坂遺跡作業開始。
7月11日 国分東遺跡A地区作業開始。沖ノ坂遺跡
平板実測(泉雄二・越賀弘幸)。
7月13日 S H 3 検出・実測。
7月14日 国分東遺跡B地区作業開始。
7月15日 国分東遺跡A地区平板測量(浜口元・
服部芳人)。
7月22日 A地区S D 1 実測。
7月26日 鈴鹿市立千代崎中学校郷土史クラブ体験
発掘。
8月2日 E - 6・SK 6 実測。
8月5日 SK 15・SK 19 実測。

- 8月9日 C-12・Pit12実測。
- 8月10日 国分東遺跡B地区写真撮影。
- 8月18日 国分東遺跡C地区作業開始。C-23(包含層)区から軒丸瓦出土。
- 8月23日 F-17・SK40検出
- 8月24日 S B208検出(5間×2間・東西庇付き)
- 8月25日 S X38検出。
- 9月1日 S D44掘削終了。
- 9月5日 E-24・Pit1磨製石斧出土。
- 9月8日 D-25・Pit1綠釉碗出土。
- 9月12日 S B208・SK57写真撮影。
- 9月14日 現地協議。
- 9月21日 SK50・56・57・58実測。
- 10月4日 国分東遺跡D地区作業開始。
- 10月7日 B・C地区航空測量。
- 10月13日 国分東遺跡E地区作業開始。
- 10月18日 B・C地区現地説明会。
- 10月31日 調査第1課職員視察。
- 11月1日 E地区拡張。
- 11月4日 SK72・S D78実測。
- 11月8日 S D67実測。
- 11月15日 S X96実測。
- 11月16日 国分東遺跡E地区写真撮影。
- 11月22日 D・E地区航空測量。
- 11月28日 道具・電話撤収。
- 12月2日 引渡し・現地調査終了。
- [第3次調査]
- 平成13年12月3日(月) 重機による表土掘削。
- 12月4日(火) 表土除去及び地区設定。
- 12月5日(水) 地区設定及び略図作成。
- 12月6日(木) 土量計算。
- 12月7日(金) 作業員投入。調査区側溝掘削。
- 12月10日(月) 調査区側溝掘削・包含層掘削。
- 12月11・12日(火・水) 包含層掘削。
- 12月13日(木) 雨のため作業中止。
- 12月17日(月) 包含層掘削・遺構検出。
- 12月18日(火) 遺構検出、竪穴住居及び柱穴多数、溝数本を確認。
- 12月19日(水) 略図作成、遺構掘削にとりかかる。
- 12月20日(木) 溝や柱穴等遺構掘削。
- 12月25～27日(火～木) 遺構検出及び遺構掘削。
- 12月28日(金) 午前中まで前日の作業の継続、午後から年末に備えて調査区内の整理整頓。
- 平成14年1月7～11日(月～金) 遺構検出及び遺構掘削。
- 1月15日(火) 先週からの継続作業。
- 1月16日(水) 雨のため作業中止。
- 1月17・18(木・金) 遺構掘削。
- 1月21日(月) 雨のため作業中止。
- 1月22日(火) 調査区内の水抜き作業。
- 1月23・24日(水・木) 遺構掘削。ほぼ終了。
- 1月28日(月) 降雪、水抜き作業及び遺構清掃。
- 1月29・30日(火・水) 遺構清掃。
- 1月31日(木) 写真撮影。
- 2月1日(金) 実測のための割り付け。
- 2月4～7日(月～木) 実測及びレベル入れ。
- 2月8日(金) 片付け及び資材撤収。

4 調査方法

第1次調査の国分東遺跡では、道路計画が遺跡範囲の中央東寄りをほぼ南北に継ぎ、総延長は約400mに及ぶ。その間には、調査区に直交する農道、排水溝などが走り、また未買取地があるなど、調査区を分断せざるを得なかつた。南から、A・B・C・D・Eの5地区を設定しA→B→C→D→Eの順で調査を行つた。調査面積は、A地区470m²、B地区1,000m²、C地区1,000m²、D地区800m²、E地区1,120m²である。この内、B～E地区にかけては、航空写真測量によって遺構全体の図化を行つた。この航空写真測量については道路工事計画の都合上2回にわたり行い、B・C地区を10月7日に、D・E地区を11月22日に実施した。第3次調査は、A・B地区との間であり平成6年度の時点では未買取地であり、平成13年度において発掘調査を実施した。この部分をF地区として取り扱う。

なお、調査区は前述の様に南北に細長く設定され、しかもやや西に弧を描きながら北上すること、調査区によつては年度を越えて調査しているため、すべての地区を通して基準となる地区設定を行うことができなかつた。よつて調査における地区割りは、地区毎に4×4mのグリッドを設定し、東西方向をア

ルファベット（西から東にかけてA・B・C・—）、南北方向を数字（1・2・3・—）で表示した。そして、包含層上面まで重機によって表土除去を行い、その後包含層及び遺構を人力で掘削した。また、3m×3mのメッシュによる調査区平面図及び調査区土層断面図の実測は、1／20で行った。個別詳細図の実測は、1／10で行った。なお、3mメッシュ及び4mメッシュは、任意の東西方向・南北方向で割り付けを行った。基準点は、後から付した。

なお発掘調査における次数では、第1次調査及び第3次調査を行う間に鈴鹿市教育委員会が平成9年度に第2次調査を行い^⑤、奈良時代から平安時代の掘立柱建物・土坑・溝などの遺構を確認している。とりわけ掘立柱建物は、掘形が80～100cmに及ぶものが検出されている。遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦が出土しており第1次及び第2次と非常に似通っている。よって、調査次数は、県・市の区分によるものでなく、ここでは道路における回数をもって付している。

また、第1次調査では、A及びB地区の間がF地区ということもあって、A地区、B地区それぞれ遺構番号を1から付した。また年度が異なったためF地区も1から付した。これらは、担当者が年度によって異なったためである。なお、掘立柱建物及び柵は第1・3次を通して201から付した。

5 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。ただ、文化財保護法は、平成12年度において改正されており平成6年度及び平成13年度間で法の条文が異なった表記を行う場合もある。

〔国分東遺跡〕

- ・ 法に基づく文化財保護法第98条の2第1項（文化庁長官宛）
平成6年6月1日付教埋第246号
- ・ 法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）
平成13年9月13日付道整第191号
- ・ 法第58条の2第1項（県教育長宛）
平成13年12月4日付教埋第267号

・ 遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（鈴鹿警察署長宛）

平成14年3月5日付教生第8-16号（スポーツ・生涯学習課長通知）

〔沖ノ坂遺跡〕

・ 法に基づく文化財保護法第98条の2第1項（文化庁長官宛）

平成6年6月8日付教埋第244号
(服部芳人・萩原義彦)

(註)

⑤ 『三重県埋蔵文化財年報 平成9年度』(三重県埋蔵文化財センター 1998年)

II 位置と環境

1 地理的環境

国分東遺跡（1）及び沖ノ坂遺跡（2）は、三重県鈴鹿市国分町字孫作・井田・東浦・沖ノ坂等に所在している。鈴鹿市は、三重県内において北勢地域と呼ばれる地域に位置し、行政的にみて北側は四日市市、西側は亀山市、南側は河芸町に接し、東側は伊勢湾に面している。国分町は鈴鹿市の中でも北寄りに位置しており、四日市市には隣接している。当遺跡は、鈴鹿山系に源を発する鈴鹿川によって形成された段丘上で標高約40～45mである。この段丘上から鈴鹿川右岸地域が眺望できる絶好の地である。

2 歴史的環境

鈴鹿市は、伊勢国府、伊勢國分寺をはじめとして多岐にわたる非常に多くの遺跡を抱えている。ましてや当遺跡周辺は遺跡の超過密地帯であり、全ての遺跡を詳細に述べることは難しい。よって、国分東遺跡及び沖ノ坂遺跡を中心に時代順に追っておおまかに概観していきたい。

鈴鹿川左岸の段丘上には、旧石器時代からの遺跡が展開している。ナイフ形石器が採集されている茶山遺跡（3）、西ノ岡A遺跡（4）、北植松遺跡（5）がある。なかでも西ノ岡A遺跡では、20点以上ものナイフ形石器が採集されている。鈴鹿川左岸の支流によって開析された各台地上は、旧石器時代の遺跡密集地域と言えそうである。^①

縄文時代に入つては、有茎尖頭器が採集されている境谷遺跡（6）、添遺跡（7）などがある。^② 早期では、東庄内A遺跡（8）^③がある。中期以降では、

発掘調査が行われた北一色遺跡（9）^④、起A遺跡（10）^⑤がある。

弥生時代においては、海岸部に近い地域に拡散し、点在している。とりわけ過去に発掘調査が行われた上箕田遺跡（11）^⑥では弥生時代前期から後期までの遺物が出土しており、非常に良好な資料である。また、大木ノ輪遺跡（12）^⑦、天ノ宮遺跡（13）^⑧においても前期土器が出土している。中期は、発掘調査によって判明している遺跡数が多い。東名阪自動車道に伴う調査によって方形周溝墓を確認した東庄内B遺跡^⑨をはじめとして一反通遺跡（14）^⑩、添遺跡・中尾山遺跡（15）^⑪、扇広遺跡（16）^⑫などがある。とりわけ昭和63年度の一反通遺跡の発掘調査では、弥生時代後期の土器をはじめとして突線鉢式銅鑼片が出土している。中期以降の遺跡が急激に増加していることが発掘調査の成果によって窺える。古墳時代において、この地域は非常に繁栄した。とりわけ鈴鹿川には多くの支流があり、流れ込む支流によって開析された段丘上位面に非常に多くの古墳が造営されており、それらを造営するだけの強固な基盤があったとみられる。

鈴鹿川上流域の亀山市域には、有名な木ノ下古墳（全長30m）^⑬や山下古墳（全長39m）^⑭、井尻古墳（全長47m）^⑮などの前方後円墳が所在している。

鈴鹿川中流域の右岸に所在するものには、八野古墳群（17）^⑯・西ノ野古墳群（18）^⑰・保子里古墳群（19）^⑱などがある。八野古墳群は、16基の群集墳であるが一部が昭和31・47年に発掘調査されている。西ノ野古墳群は、現在13基残っている。過去に

1	国分東遺跡	10	起A遺跡	19	保子里古墳群	28	狐塚遺跡
2	沖ノ坂遺跡	11	上箕田遺跡	20	白鳥塚古墳群	29	国分北遺跡
3	茶山遺跡	12	大木ノ輪遺跡	21	富士山古墳群	30	木田城跡
4	西ノ岡A遺跡	13	天ノ宮遺跡	22	寺田山古墳群	31	国府城跡
5	北植松遺跡	14	一反通遺跡	23	高岡山古墳群	32	高岡城跡
6	境谷遺跡	15	中尾山遺跡	24	伊勢國分寺	33	椎山中世墓
7	添遺跡	16	扇広遺跡	25	伊勢國分尼寺	34	高岡中世墓
8	東庄内A遺跡	17	八野古墳群	26	長者屋敷遺跡		
9	北一色遺跡	18	西ノ野古墳群	27	大鹿庵寺		

第1表 遺跡一覧表

は100基以上存在していたが、昭和45年に三重大學によって発掘調査が行われている。なかでも前方後円墳である1号墳が「王塚古墳」と呼ばれている。また、全長66mの前方後円墳である愛宕山古墳も所在する。保子里古墳群は、円墳・前方後円墳・方墳・双円墳といったようにバラエティに富んでおり、全国的に数少ない双円墳が1号墳である。

鈴鹿川左岸域には、白鳥塚古墳群(20)^⑨がある。1号墳は、県内最大級の円墳である。2号墳は、前方後円墳であったが今は、消滅してない。

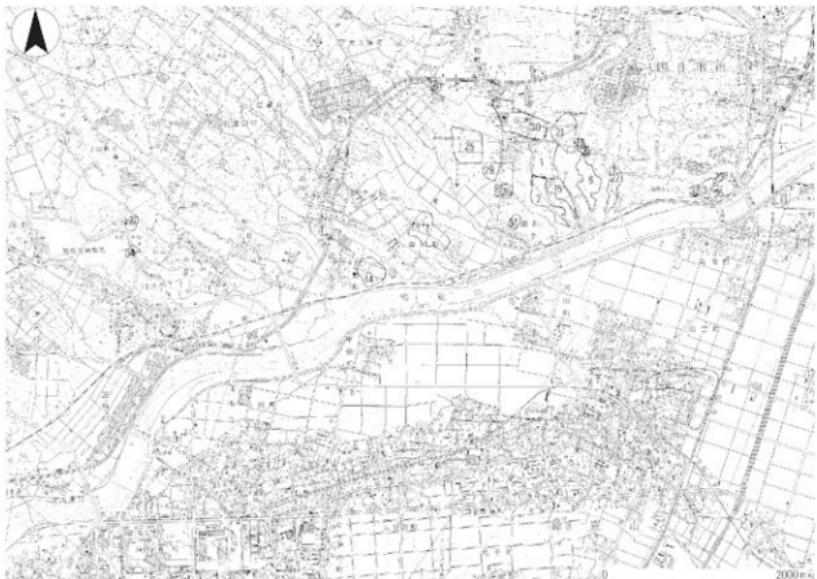
鈴鹿川下流域の左岸に所在するもので国分東遺跡・沖ノ坂遺跡のすぐ近傍においては、富士山古墳群(21)^⑩、寺田山古墳群(22)^⑪、高岡山古墳群(23)^⑫がある。富士山古墳群の1号墳は、全長50mの前方後円墳である。他の古墳は、一部が発掘調査されており、須恵器、埴輪などが出土している。

奈良から平安時代においては、伊勢国府^⑬や伊勢国分寺(25)^⑭、伊勢国分尼寺(26)^⑮が造営される。伊勢国府跡や伊勢国分寺跡は、鈴鹿市教育委員会によって継続的に学術調査が行われ、徐々に内容が判

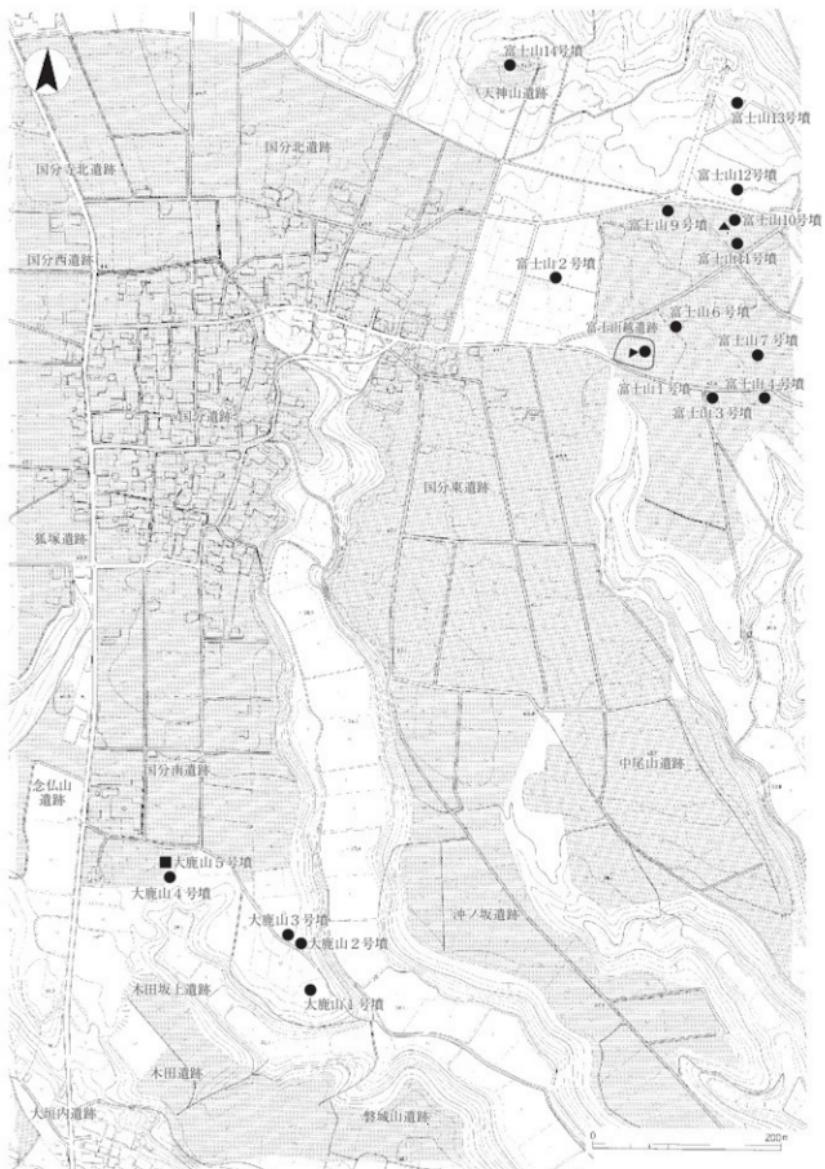
明している。伊勢国府跡は、鈴鹿市広瀬町に所在する長者屋敷遺跡(27)^⑯とみられている。鈴鹿市国府町における国府推定地には、平安時代以降に移転した可能性も含まれている。伊勢国分寺跡は、国分東遺跡のほぼ西側に位置したとみられ、ほぼ180m四方の伽藍と想定されている。国分尼寺は国分寺の東側に位置し、これらに併行するように南浦(大鹿)庵寺(28)^⑰が確認されている。

また、平成6・7年度に発掘調査が行われた狐塚遺跡(29)^⑱では、規則的に配置された掘立柱建物が11棟、構跡も確認されており河曲郡衙の正倉庫ではないかと推測されている。さらに、国分東遺跡の北側に位置する国分北遺跡(30)^⑲では平成11・15年度において発掘調査が行われており、道路跡とみられる遺構を確認している。古代の官道である「東海道」は、現在の鈴鹿市木田町、国分町を通り、四日市市采女町に至るルートが想定されており、古代においても重要な地域であったに違いなかろう。^⑳

中世においては、空堀や土塁が残っている城跡が多く認められる。近城では、木田城跡(31)^㉑や国



第1図 遺跡位置図 (1/50,000) 「この地図は国土地理院発行の「鈴鹿」「四日市西部」(1/25,000)を掲載したものである。」



第2図 遺跡地形図 (1/5,000)

府城跡（32）^⑩、高岡城跡（33）^⑪がある。また、一方では、発掘調査が昭和52年から昭和53年に行われ、古瀬戸四耳壺、常滑三筋壺などの蔵骨器や青白磁合子、五輪塔が出土した椎山中世墓（34）^⑫、高岡山中世墓（35）^⑬が造営されている。しかしながら、城館跡を含め集落跡などの発掘調査例が少なく、やや不明瞭な状況も窺える。（松見直茂・萩原義彦）

（註）

- ① 岡田登「北勢地方の旧石器時代遺跡」『四日市市史研究 第3号』（四日市市 1990年）
- ② 大場範久「第一章 地土のあけぼの」『鈴鹿市史第1巻』（鈴鹿市 1980年）
- ③ ①と同じ
- ④ 小玉道明・谷本鉄次・山沢義貴「東庄内A遺跡」「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」（三重県教育委員会 1970年）
- ⑤ 真田幸成「北一色遺跡発掘調査概要報告」（1968年）
- ⑥ 山下雅春・山田猛「起A遺跡」「昭和57年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告」（三重県教育委員会 1983年）
- ⑦ 仲見秀雄他「上箕田弥生式道路第一次調査報告」（鈴鹿市教育委員会 1961年） 大場範久・真田幸成・仲見秀雄「上箕田弥生式遺跡第二次調査報告」（鈴鹿市教育委員会 1970年）
- ⑧ 早川裕巳「大木ノ輪遺跡」「昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告」（三重県教育委員会 1980年）
- ⑨ 増田安生「天ノ宮遺跡」「昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告」（三重県教育委員会 1981年）
- ⑩ 小玉道明・谷本鉄次・山沢義貴「東庄内B遺跡」「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」（三重県教育委員会 1970年）
- ⑪ 「三重県埋蔵文化財年報」（三重県 1988年）
- ⑫ 「三重県埋蔵文化財年報1」（三重県埋蔵文化財センター 1990年）
- ⑬ 「三重県埋蔵文化財年報2」（三重県埋蔵文化財センター 1991年）
- ⑭ 「三重県埋蔵文化財年報2」（三重県埋蔵文化財センター 1991年）
- ⑮ ①と同じ
- ⑯ ①と同じ
- ⑰ ①と同じ
- ⑱ ①と同じ
- ⑲ ①と同じ
- ⑳ ①と同じ
- ㉑ ①と同じ
- ㉒ ①と同じ
- ㉓ ①と同じ
- ㉔ ①と同じ
- ㉕ ①と同じ
- ㉖ ①と同じ
- ㉗ ①と同じ
- ㉘ 「伊勢国分寺跡・伊勢国府跡」（鈴鹿市教育委員会 1994年）
- ㉙ ②と同じ
- ㉚ ②と同じ
- ㉛ ②と同じ
- ㉜ ②と同じ
- ㉝ 「伊勢国分寺跡－第25次発掘調査現地説明会資料－」（鈴鹿市考古博物館 2001年）
- ㉞ 「三重県埋蔵文化財センター年報7」（三重県埋蔵文化財センター 1996年）
- ㉟ 角正淳子「国分北遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 2000年）
- ㉟ 藤岡謙二郎編「古代日本の交通路I」（大明堂 1978年） 藤岡謙二郎「都市と交通路の歴史地理学的研究」（大明堂 1960年）
- ㉟ 仲見秀雄他「三重の中世城館」（三重県教育委員会 1976年）
- ㉟ ㉟と同じ
- ㉟ ㉟と同じ
- ㉟ 大場範久・伊藤克幸「椎山中世墓」「三重用水加佐登調整池開係道路調査報告」（三重県 1977年）



第3図 調査区位置図 (1/3,000)

III 調査成果(遺構)

1 国分東遺跡

国分東遺跡は、行政上は鈴鹿市国分町字孫作・井田・東浦に所在する。鈴鹿川左岸、標高約40～45mの河岸段丘上に位置し、南に向かって緩やかに傾斜する。現況は水田・畠及び宅地である。沖ノ坂遺跡の北方に広がる東西約250m、南北約350mで約87,500m²の広大な面積の遺跡である。

調査区は、前述のように南北間で約400m程あるが、基本層序は概ね沖ノ坂遺跡と同じで第1層暗灰褐色土(耕作土)、第2層淡黃灰色土(底土)、第3層明黄褐色粘土疊混じり(地山)である。ただしD地区からE地区及びF地区にかけては、包含層の暗黃褐色粘土が存在する。第1層および第2層の厚みは平均約30cm程度と浅いわりには、遺構の残存は良く柱穴の中には50～60cmの深さのものもある。

検出した遺構は、全ての調査区で奈良時代の堅穴住居6棟・土坑6基、平安時代の掘立柱建物22棟・構4条・土坑2基、鎌倉時代の掘立柱建物8棟・土坑23基(建物に伴う南東隅土坑を含む)・溝53条・中世墓5基などである。ただし、地区によっては遺構の密度が高く、重複の度合いが著しいために、厳密な判断が困難であった。以下、おおまかに各時代ごとに概略する。

奈良時代の遺構は、A地区からC地区及びF地区にかけて堅穴住居、土坑などの遺構を検出したが、D地区から北側ではこの時期に該当する遺構はみられない。全体的に希薄な状況である。

平安時代の遺構は、掘立柱建物22棟・構4条・溝3条・土坑23基などを検出した。特に掘立柱建物の時期については、出土遺物が少なく図示できるものは限られるが、概ね前期から中期にかけてのものである。時期判断はし難いが、建物の棟方向・建物間の距離・建物の重なりなどから大きく3時期に分けることが可能である。各地区ほとんどにおいて数多く遺構を検出することができることから、当遺跡の主な時代であるとみられる。

鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物8棟・土坑23基・溝53条・中世墓5基を検出した。検出した掘立柱建

物には、建物の東南隅に土坑を有している。ある程度、各地区に点在しており、一定の規模をもって集落が営まれていたとみられる。

① A～E地区

(1) 奈良時代

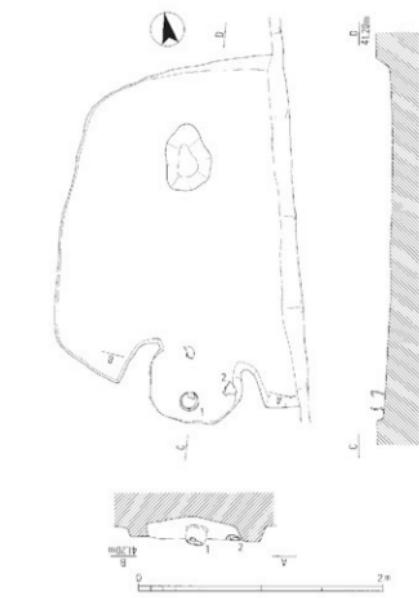
S H 3 (第5図) A地区中央で検出した堅穴住居である。この堅穴住居の東半分が調査区外に及んでいるため、東西の規模は、不明である。平面形は隅丸方形で、南北長29m、東西長20m以上である。検出面から深さは15cm程度である。壁周溝はなく、主柱穴は確認できなかった。中央北側で径40～50cm、深さ8cmの楕円形土坑を検出したが、遺物が含まれず貯藏穴であるとは断定できない。削平により堅穴住居全体の残存はあまり良くないが、南壁でカマドを検出した。カマドの両袖が、中央に向かいやや内擣して張り出す。現状での袖部最大幅は約1mで、右袖長は約50cm、左袖長は約40cmである。素材は黄褐色粘質土で築成され、両側面・奥壁・底部は火を受けて赤褐色を呈する。中央のやや奥に土師器の壺が、底部を欠いてはいるが、倒立した状態で出土した。転落したものか、支脚に用いられたものか、意図的に伏せられ置かれたものかは不明である。この様なカマド内部から土器が出土した例は、名張市の壇・柏原遺跡のS B12にある。この例は、高杯を2個体伏せた状態での出土で、時期も古墳時代と当遺跡の例とは異なる。その他、カマド内から出土した遺物には土師器壺(2)・皿(3)、堅穴住居全体からの出土遺物も須恵器杯身(4)・土師器壺(1)と少ない。

S H 23 B地区中央東よりで検出した堅穴住居である。後世の溝S D21や柱穴と重なり、残存の深さも検出面から約10cm程度と浅い。平面形は、南北方向32.5m、東西方向3mの四角形を呈する。主柱穴は確認できず、カマド・壁周溝・貯藏穴はない。出土遺物も土師器壺細片、須恵器細片にとどまる。堅穴住居として報告するが、やや疑問は残る。

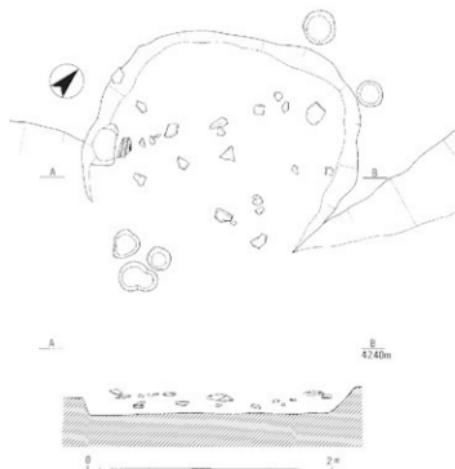
S K 47 C地区中央北よりで検出した土坑であ



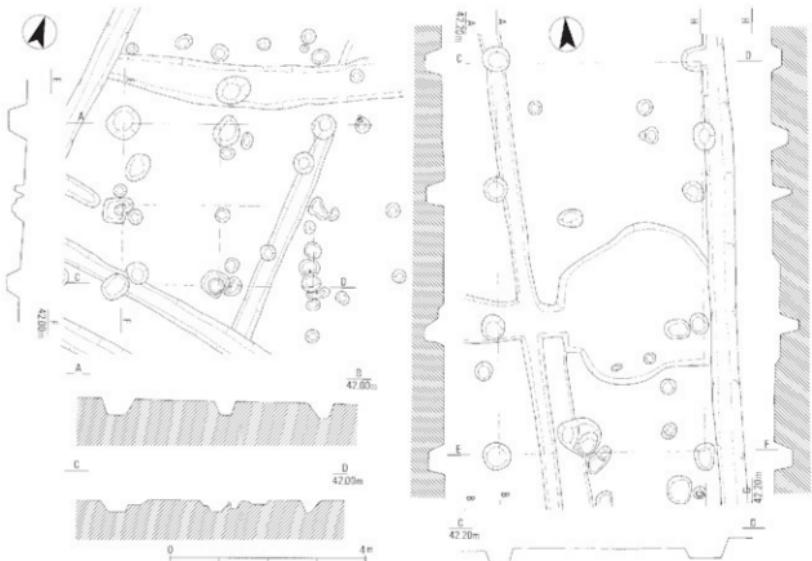
第4図 国分東遺跡A地区平面図 (1/100)



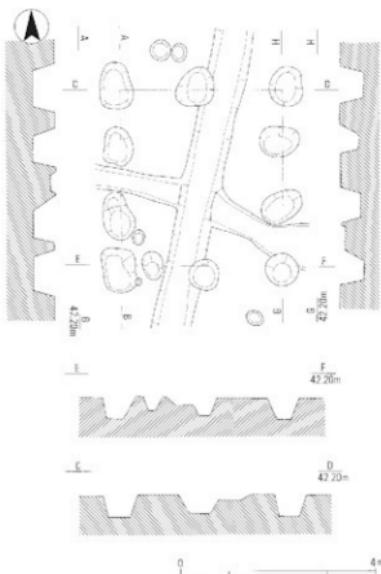
第5図 SH 3実測図 (1/40)



第6図 SK 50実測図 (1/40)



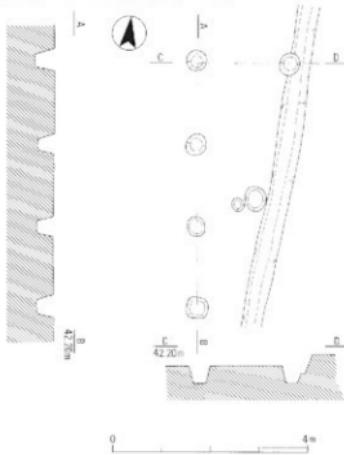
第7図 SB 201実測図 (1/100)



第8図 SB 203実測図 (1/100)



第9図 SB 204実測図 (1/100)



第10図 SB 206実測図 (1/100)

る。S D54に北側を半分以上切られ、検出面からも10cmと残りは悪い。平面形は、南北3.3m、東西2.25mの楕円形であるが、2つの土坑が重なっている可能性も考えられる。出土遺物には、土師器壺（11～13）・椀（14）・皿（15）、須恵器杯蓋（16・17）・杯身（18～22）などがある。

S K50（第6図） C地区ほぼ中央で検出した土坑である。平面形は、南北2.25m、東西2mの四角形を呈し、南側はS D44に切られる。深さは北側で30cmあり、南に向かい傾斜する。出土遺物には、土師器皿（5）・ミニチュア土器（6）、須恵器杯蓋（7）・杯身（8）などがある。

S K51 S K50の西で検出した土坑である。平面形は、南北2.5m、東西3mの四角形を呈する。検出面から15cm程しか残っておらず、出土遺物も土師器椀（9・10）にとどまる。柱穴・焼土・壁周溝など確認できず土坑として報告するが、堅穴住居の可能性も考えられる。

（2）平安時代

S B201（第7図） B地区の南で検出した掘立柱建物である。この建物は、2間×2間の東西棟である。桁行3.9m、梁行3.3m、柱間は、桁行1.95mの等間である。柱掘形については、側柱は40～50cmの隅丸方形であるが、東柱は円形でやや小さめである。総柱建物である。出土遺物はない。

S B203（第8図） B地区の中央北側で検出した掘立柱建物である。この建物は、3間×2間の南北棟である。桁行3.6m、梁行3.3m、柱間は、桁行1.2mの等間、梁行1.65mの等間である。柱掘形は隅丸方形で、約70cmと大きい。西側柱筋の掘形は南北に細長く、抜き取られた可能性がある。また、桁行の柱間が1.2mと他の掘立柱建物と比べ短く、倉庫的な建物の可能性がある。桁行方向は、N 6° WでS B205・S B206と同じで、関連性が考えられる。出土遺物はないが、建物の時期は10世紀前半とみられる。

S B204（第9図） S B203の東で検出された掘立柱建物である。この建物は、3間×2間の南北棟である。桁行8.1m、梁行4.2m、柱間は、桁行2.7mの等間と広く、梁行は2.1mの等間である。柱掘形

は円形で、径40～50cm、深さ40cmである。梁行の北側中央の柱は検出されなかった。出土遺物はないが、建物の時期は10世紀代とみられる。

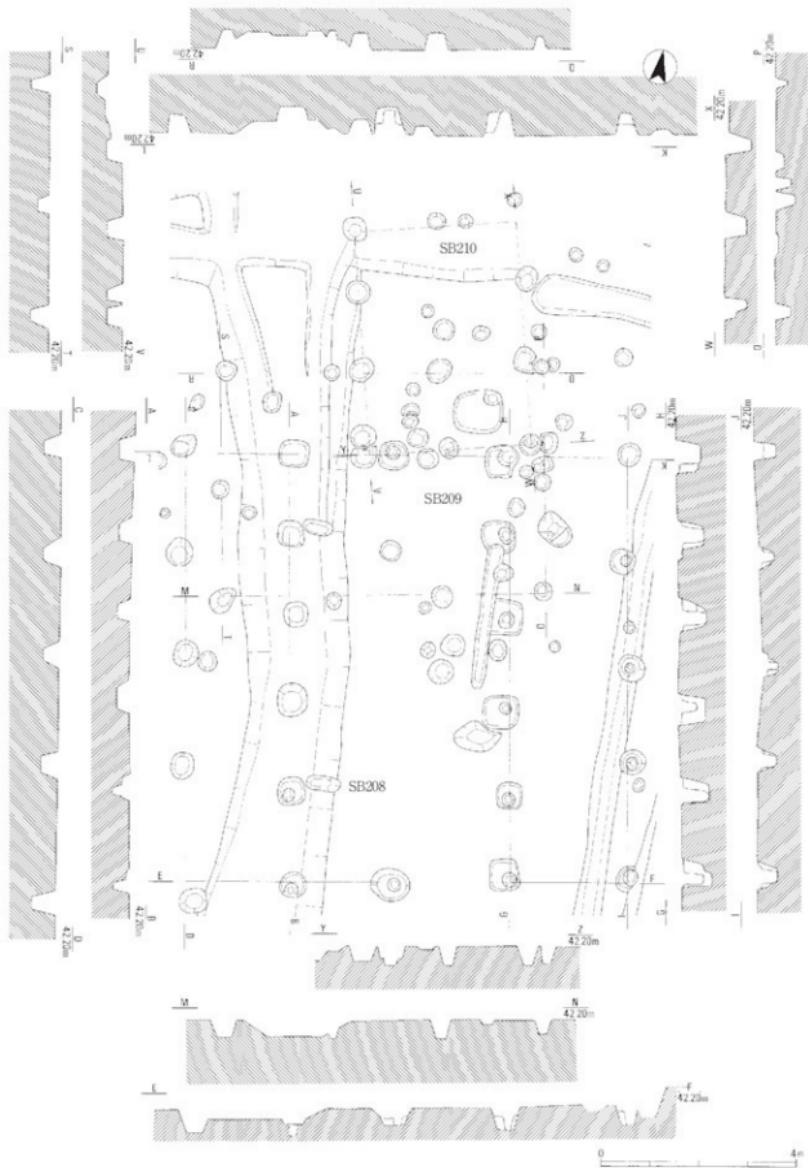
S B205（第12図） S B204の南で検出された掘立柱建物であるが、東側の半分以上が調査区外に及ぶため、全体の規模は分からず。南北棟と思われるが、3間分確認した。柱間は、桁行1.95mの等間である。棟方向は、S B203同様N 6° Wである。出土遺物には、灰釉陶器椀（23）がある。建物の時期は10世紀前半とみられる。

S B206（第10図） S B204北で検出された掘立柱建物であるが、S B205と同じく東半分が調査区外に及ぶため、全体の規模は分からず。南北に3間検出した。南北棟であれば、桁行4.95mで柱間1.65mの等間である。径40cmの円形の柱掘形で、深さは40cmである。棟方向はS B203同様N 6° Wで、出土遺物はない。建物の時期は、10世紀前半とみられる。

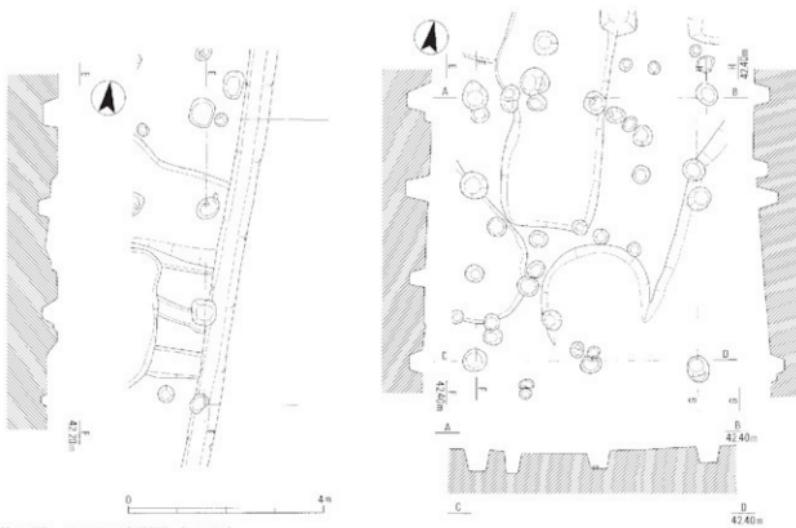
S B208（第11図） C地区の南で検出した掘立柱建物である。この建物は身舎が5間×2間の南北棟で、東西両面に庇を持つ。この遺跡では、最大の面積を持つ建物である。身舎部分の桁行は8.7m、梁行は4.5mである。桁行の柱間は北から、1.65m+1.65m+1.8m+1.8m+1.8mで、梁行の柱間は西から2.1m+2.4mである。柱掘形は隅丸の方形を呈し、60～70cmと大きく、柱痕跡を確認できたものも多い。この身舎の西側に2.1m、東側に2.4m張り出した庇を伴うが、共に4間である。庇の柱掘形は円形で、40～50cmと身舎よりは小さい。しかも、4隅の柱は、梁行線上よりやや外側に飛び出す位置に存在する。棟方向はN 11° Wで出土遺物は細片で少ないが、建物の時期は9世紀前半とみられる。

S B209（第11図） S B208の北に重なる形で検出した掘立柱建物である。この建物は、3間×2間の東西棟である。棟方向はE 12° Nである。桁行6.6m、梁行4.5m、柱間は、桁行2.25m+2.25m+2.1m、梁行2.25mの等間である。柱掘形は、円形で、深さは30～40cmである。S B208との柱の切り合いは無いが、S B208よりも新しいと考えられる。建物の時期は、9世紀前半とみられる。

S B210（第11図） S B208の北に接する位置で

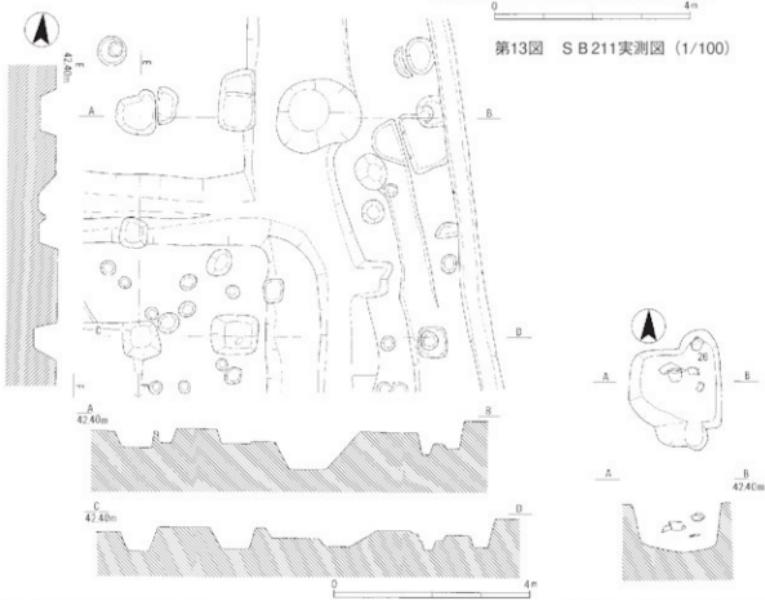


第11図 SB208・209・210実測図 (1/100)



第12図 SB205実測図 (1/100)

第13図 SB211実測図 (1/100)



第14図 SB213実測図 (1/100)

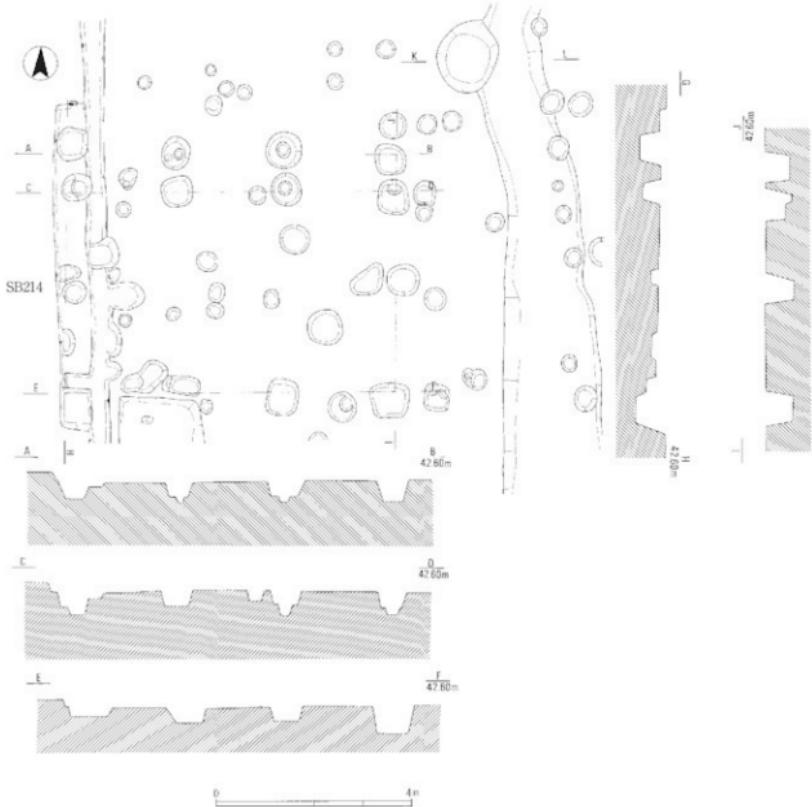
第15図 D25-Pit 1 実測図 (1/50)

検出した掘立柱建物である。この建物は、3間×2間の南北棟である。棟方向はN16°Wである。桁行4.5m、梁行3.3m、柱間は、桁行1.2m+1.65m+1.65m、梁行1.65mの等間である。北東隅の柱は検出できなかったが、柱掘形は円形で径40cm、深さ30cmである。出土遺物には、土器器窓(24)がある。建物の時期は9世紀前半とみられる。

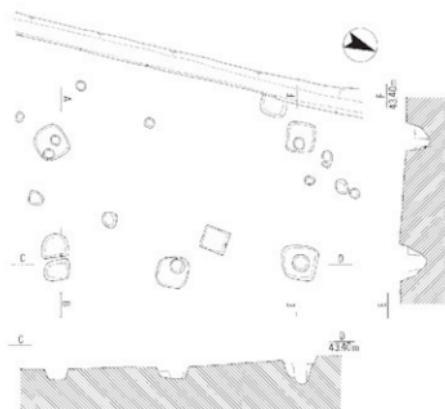
S B211 (第13図) C地区中央で検出した掘立柱建物である。この建物は、3間×2間の南北棟で、棟方向はS B208同様N11°Wである。しかも、S B208の身舎部分と柱筋を揃える。桁行5.4m、梁行4.5m、柱間は桁行1.8mの等間、梁行2.25mの等間であ

る。一部検出が出来なかつた柱もあるが、柱掘形は円形で径40cm、深さ40cmである。出土遺物はないが、建物の時期は9世紀前半とみられる。

S B213 (第14図) S B211の北で検出した掘立柱建物である。この建物の東側が調査区外になるため、全体に規模は不明である。3間以上×2間の東西棟であろう。柱間は、桁行2.25mの等間、梁行1.95mの等間である。柱掘形は、隅丸の方形で70～80cmと大きく、深さは60cm程度である。北西隅の柱穴からは、綠釉陶器稜椎(26)が出土した。(第60図) 柱の一部は、SD45・SK57によって切られ検出できなかつたが柱痕跡が確認できるものもあ



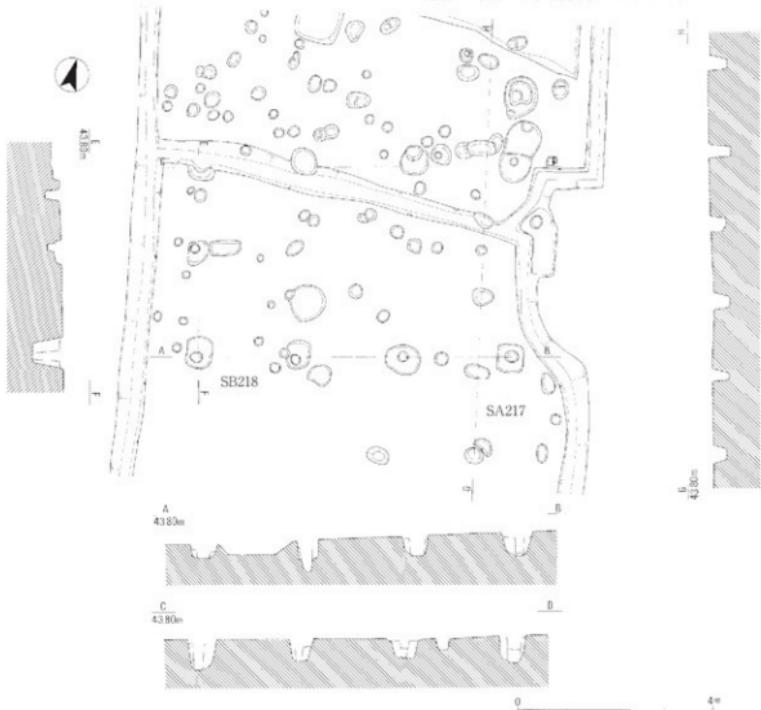
第16図 SB214実測図 (1/100)



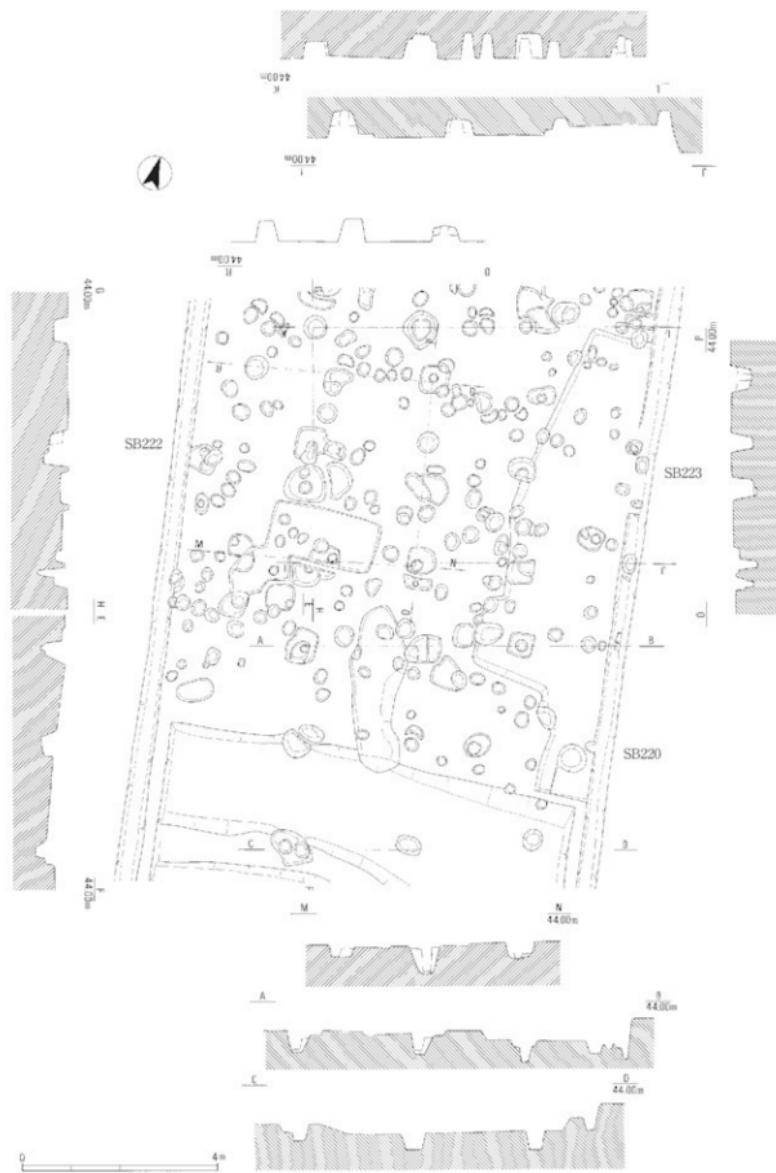
第17図 SB216実測図 (1/100)

る。棟方向は、E 3° Nで北を意識した建物である。出土遺物には、他に土錐(25)などがある。建物の時期は、9世紀後半とみられる。

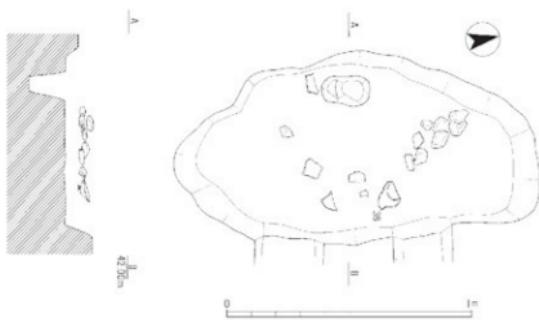
S B214 (第16図) S B213北西で検出した掘立柱建物である。この建物は調査区を西に拡張したため、3間×2間の東西棟である。桁行6.75m、梁行4.35mの身舎に、北庇を伴う建物の可能性も考えられるが、そうすると幅が55cmの張り出しとなりやや無理を生じる。梁行の柱間を2.4mの等間として、第16図断面図のC-Dで断ち割った柱列については、別の建物を考えたほうが良いのかもしれない。また、建て直した可能性もあり得よう。いずれにせよ、東側の柱筋とS B213の西側柱筋はほぼ一直線で、棟方向もE 3° Nと同じなど、関係は深いと考えられる。出土遺物には、灰釉陶器(27・28)などがある。建物の時期は9世紀後半とみられる。



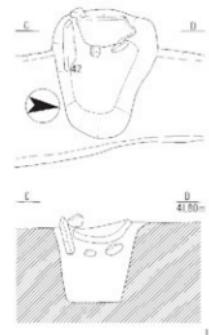
第18図 SB218・SA217実測図 (1/100)



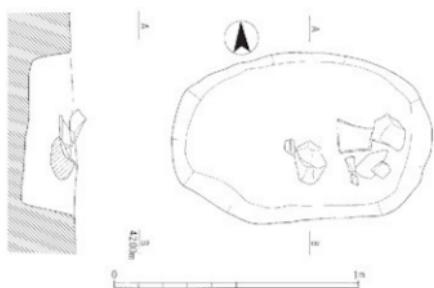
第19図 SB 220・222・223実測図 (1/100)



第20図 SK 19実測図 (1/40)



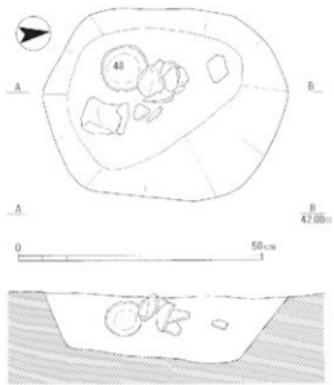
第22図 C 7-Pit 1実測図 (1/20)



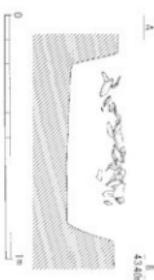
第21図 SK 15実測図 (1/20)



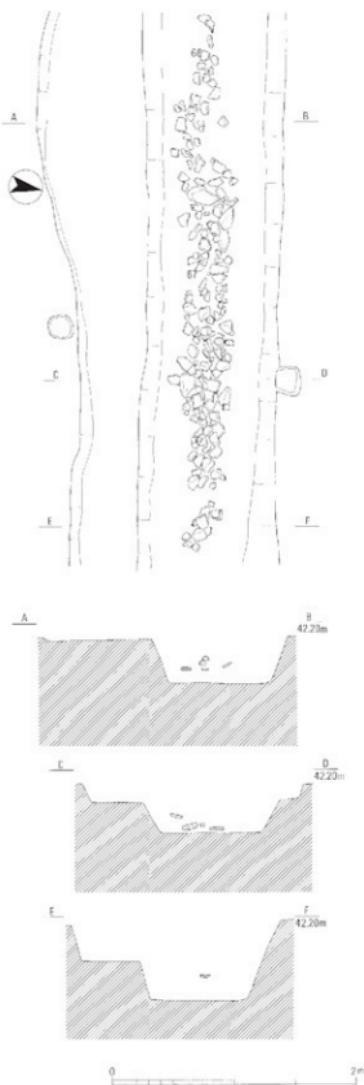
第23図 SK 55実測図 (1/80)



第24図 C 12-Pit 1実測図 (1/10)



第25図 E 43-Pit 2実測図 (1/20)



第26図 S D 65実測図 (1/40)

S B216 (第17図) D地区中央より北で検出した掘立柱建物である。この建物の西側が調査区外になるため、全体の規模は不明であるが、2間以上×2間の東西棟と思われる。柱掘形は隅丸の方形で、柱間は梁行、桁行ともに24mの等間である。棟方向はE21° Nで出土遺物はない。建物の時期は、9世紀後半であろう。

S B218 (第18図) E地区の南で検出した掘立柱建物である。建物の東側は調査区外になる。3間以上×2間の東西棟である。柱間は、桁行21mの等間、梁行1.95mの等間である。柱掘形は隅丸の方形で50～60cm、深さは40～50cm、柱痕跡を確認できたものもある。棟方向は、E16° Nである。出土遺物はないが建物の時期は、9世紀前半であろう。

S B220 (第19図) S B218北側で検出した掘立柱建物である。建物の東側は調査区外になる。南側桁行の柱列は、S D69と重なるが残りがよく、柱は確認できた。3間以上×2間の東西棟である。柱間は、桁行2.25m、梁行2.1mの等間である。隅丸方形の柱掘形で60cmと大きい。棟方向はE20° N、出土遺物には、軒平瓦(29)がある。建物の時期は9世紀後半とみられる。

S B221 (第19図) E地区中央南で検出した掘立柱建物である。このあたりから、柱穴が多く確認され、鎌倉時代の掘立柱建物と重複が著しい。建物の西側が調査区外になるため、全体の規模は不明であるが、東西棟であろう。2間以上×2間を確認した。柱間は、桁行1.8m、梁行1.95mの等間である。棟方向はE15° NでS B218とはほぼ一致し、関係が強いものと思われる。出土遺物には、土師器皿(30)がある。建物の時期は、9世紀前半とみられる。

S B223 (第19図) S B220の北側で検出した掘立柱建物である。建物東側は調査区外である。3間以上×2間の東西棟であろう。柱間は、桁行2.1m、梁行2.4mの等間である。出土遺物は、土師器皿(31)がある。棟方向はS B220と同じE20° Nで、西側梁行柱列がほぼ揃う。S B221と重なる柱は少ないが、切り合い関係からはS B223の方が新しい。建物の時期は9世紀後半とみられる。

S A215 D地区の南端で検出した構である。柱間21mの等間で、4間分検出した。建物として考

えるには、対になる柱穴がなく、横と判断した。方位はN 15° Eで北側160尺（48m）には同一方向のS B218が存在する。

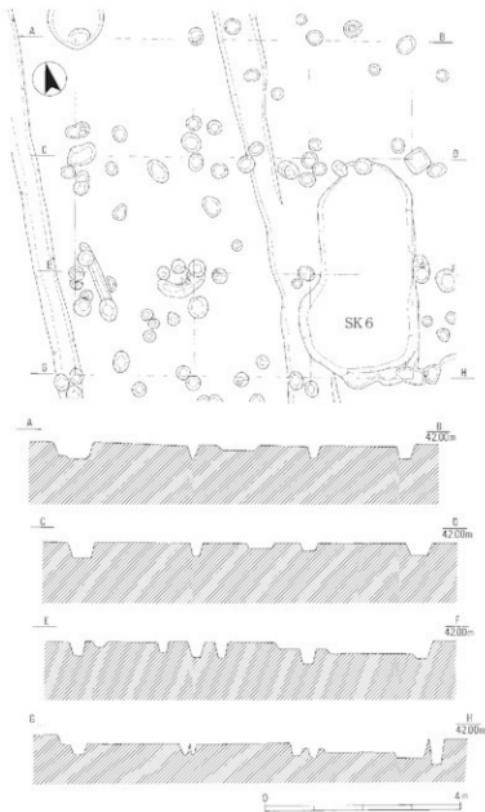
S D 9 B地区中央南で検出した。幅50～80cm、検出面から10cm程度の浅い溝である。調査区の東側で、南に弧を描きながら細くなる。土師器掩片が、少量出土したに過ぎないが、溝の方向がS B203・S B205などと平行であることから、この時期のものと判断した。

S D 10 B地区的中央南側、S D 9が南へ弧を描く部分で検出した。切り合い関係では、S D 9より新しい。幅40cm、深さ10cmで、長さ2mを検出

した。出土遺物には灰釉陶器（57）、清郷型鍋（53～56）がある。溝の時期は10世紀後半以降とみられる。

S D 28 C地区的南側で検出した溝である。規模は、幅約25m、深さ約15cmの東西方向である。この溝のほぼ中央で、南北方向のS D33に切られる。S B208と平行し方向が一致しており同時期の可能性が高い。S B208の南柱筋との距離が20尺（6m）であることから、この時期と判断した。

S D 65（第26図） D地区の中程で検出した溝である。規模は幅0.95～2.1m、深さ0.57～0.62mである。S B214と平行し方向が一致しており、SD



第27図 S B202実測図（1/100）

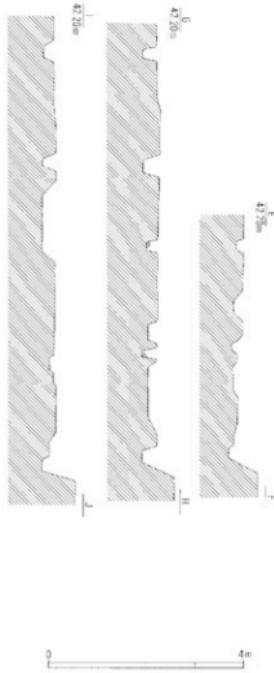


第28図 SK 6実測図（1/40）

64との距離は、12mあり40尺とみられる。遺物は、須恵器杯身（63）、須恵器壺（64）、灰釉陶器椀（65）、平瓦（66・67）が出土している。9世紀後半から10世紀初頭とみられる。

S K 15 (第21図) B地区中央西よりで検出した。長径1.0m、短径0.6mの長円形を呈し、検出面から25cmの深さである。壁面は、ほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。東西方向の土坑で遺物は東側に多い。人頭大より小さめの石や、灰釉陶器壺（32）が出土した。遺構の時期は、9世紀前半とみられる。

S K 19 (第20図) B地区中央東よりで検出した。南北に細長い楕円形の土坑で、長径3.0m、短径1.7m、検出面から25cmの深さである。壁面は、ほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。S K 15側にかたまり、その他須恵器壺（34～36）、灰釉陶器椀（33）が出土した。遺構の時期は、9世紀前半とみられる。



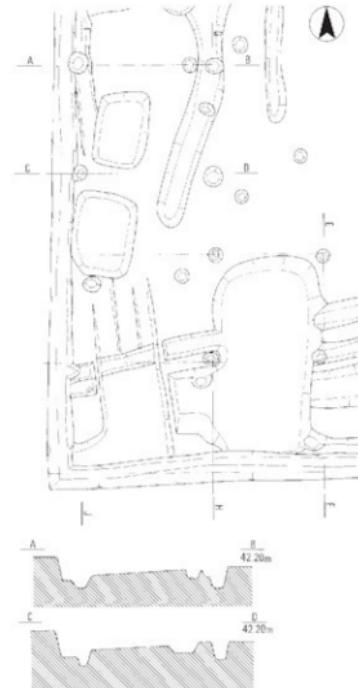
第29図 S B207実測図 (1/100)

S K 55 (第23図) C地区中央北よりで検出した。土坑の東側は調査区外になるが、南北1.25m、東西1.5mの楕円形を呈し、深さ0.08mである。出土遺物には、土師器片、須恵器壺片、灰釉陶器（37）、黒色土器椀（38）がある。

E - 43区 Pit 2 (第25図) E地区の南、S B219に接する位置で検出した。径0.78～0.86m、深さ0.2mである。土師器杯（43～45）、土師器皿（46～48）、黒色土器（49）、土師器壺（50～52）が出土している。

(3) 鎌倉時代

S B202 (第27図) B地区のはば中央で検出した掘立柱建物である。この建物は3間×3間の總柱建物で、南東隅にS K 6を伴う。いわゆる南東隅土坑を伴う掘立柱建物である。このような建物の多く

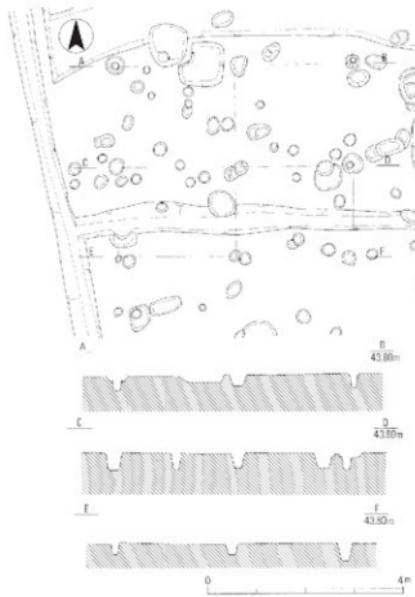


は4間×3間か4間×4間の規模が県内では多く確認されている。この建物も4間×3間の可能性が考えられる。東西棟として考えられると桁行、梁行ともに69m、柱間は桁行が西から24m+2.4m+21m、梁行は北から24m+24m+21mとなる。柱掘形は円形で、径30~40cm、深さは検出面から30cmである。棟方向はE13°S、根石は確認できない。SK6は、南東隅の1間×2間にすっぽりとおさまり、埋土は柱穴と同じ暗褐色粘質土である。断面は、壁が斜めに掘り込まれ、緩やかに丸みを帯びた逆台形状を呈する。深さは、検出面より約30cmである。このSK6からは、拳大の石をはじめ、山茶椀(83~93)、山皿(72~82)、土器部壺(69~71)、綠釉陶器(94)など多数出土した。完形品も多く、13世紀前半のものが大半である。

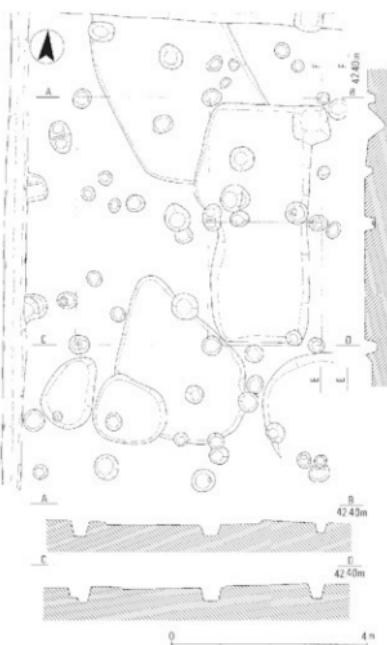
S B207 (第29図) C地区の南西隅で検出した掘立柱建物である。この建物は西側の大半が調査区

外になるため、全体の規模は不明である。南北方向に3間分、東西方向に1間分検出した。南東隅にSK32があり、この建物に伴うものと考えると、土坑が1間分東に張り出す形態になる。南北方向の柱間は、北から225m+1.65m+225m、東西方向の柱間は27m、1間分の張り出しは225mである。柱穴は円形で、径30cm、根石を持つものもある。SK32の底には、拳大より小さめの石が敷き詰められた様な状態で、埋土からは山茶椀(96~102)、山皿(95)などが出土した。棟方向は、N 0°である。

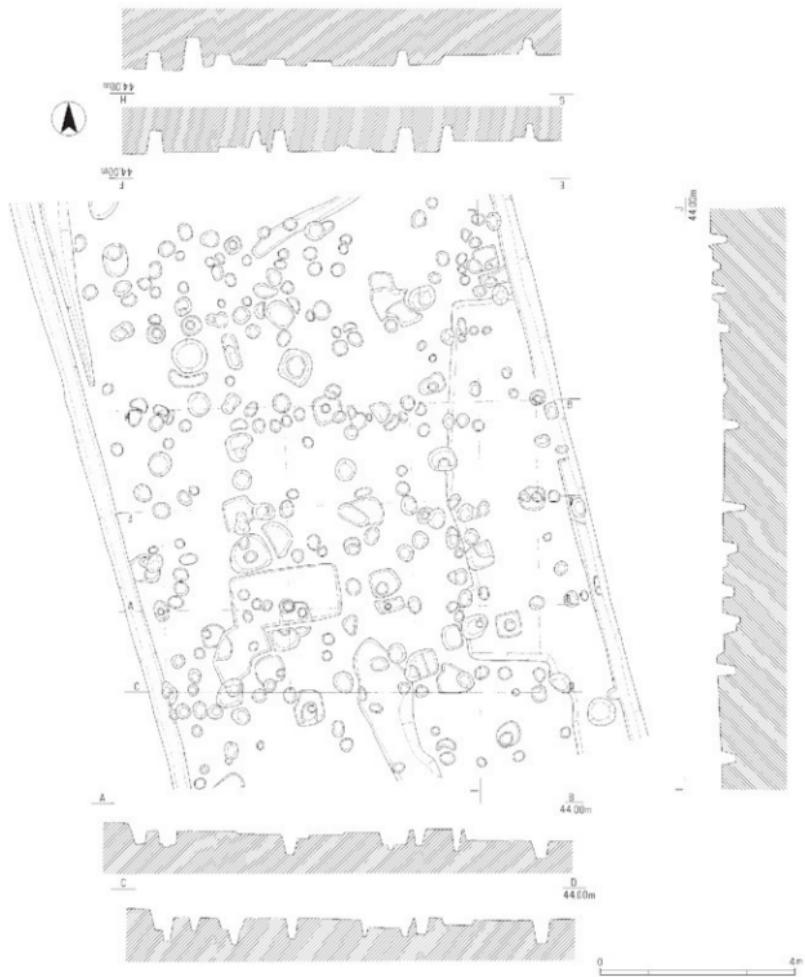
S B212 (第31図) C地区中央西よりで検出した掘立柱建物である。この建物は2間×2間を確認したが、西側は調査区外となり、全体の規模は不明である。建物内の東側にSK48があるが、この建物の北側がSD54によって切られており、1間以上伸びるものと考えると南東隅の土坑となる。南北方向の柱間は、225mの等間、東西方向の柱間は西から27



第30図 S B219実測図 (1/100)



第31図 S B212実測図 (1/100)



第32図 S B 222・S A 227実測図 (1/100)



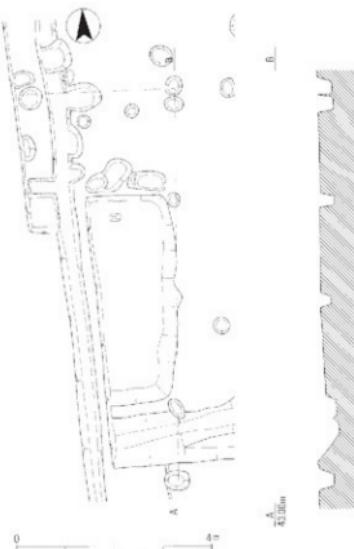
第33図 S B 224実測図 (1/100)

m + 2.25mである。棟方向はN 5° W、柱穴は円形で径30cm、柱穴から磨製石斧（308）が出土しているが混入であろう。SK 48より山茶楓、土師器細片が出土しており、13世紀初頭と思われる。

S B 219 (第30図) E地区の南で検出した掘立柱建物である。この建物は、2間×2間の東西棟の総柱建物である。桁行4.8m、梁行3.9m、柱間は、桁行2.4mの等間、梁行は北から2.1m+1.8mである。棟方向は、E 2° Nで、柱穴は円形、径30cmである。出土遺物には、山茶楓がある。

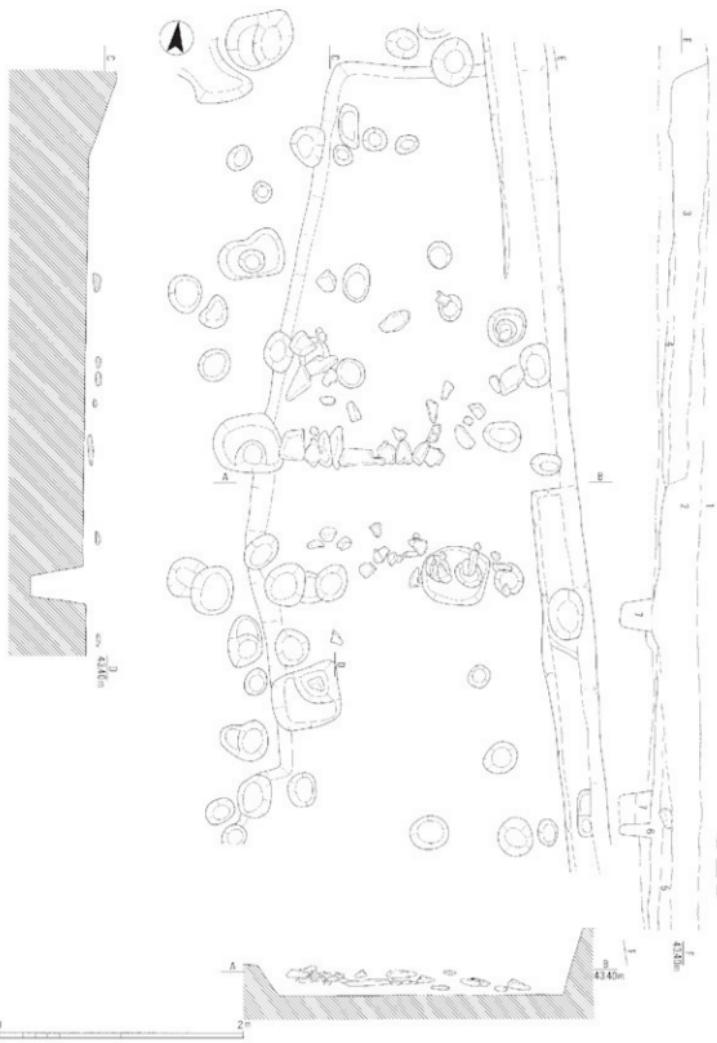
S B 222 (第32図) S B 219の北側で検出した掘立柱建物である。この建物は3間×3間の東西棟の掘立柱建物である。桁行7.65m、梁行5.85m、柱間は、桁行2.25mの等間、梁行は北から2.1m+2.1m+1.65mである。柱穴は、径30cmの円形で、根石を持つものもある。出土遺物には、山茶楓、山臘、土師器皿などが出土した。棟方向は、E 0°である。

S B 224 (第33図) S B 222の北側で重なる形で検出した掘立柱建物である。この建物は5間×3間の東西棟で、総柱建物である。桁行7.95m、梁行6.3



第34図 S B 227実測図 (1/100)

- 1 耕作土（暗灰粘質土）
- 2 暗褐粘質土
- 3 暗黃褐粘質土
- 4 暗灰青粘質土
- 5 淡灰褐粘質土
- 6 黃褐粘質土



第35図 SK 72実測図 (1/40)

m、柱間は、桁行北から1.35m + 1.65m + 1.65m + 1.65m + 1.65m、梁行21mの等間である。柱穴は30～40cmの円形で棟方向はN 3° Wである。出土遺物には、山茶椀、土師器皿などが出土した。

S A225 S B222東側の1間のはば中央を貫く位置で、南北に6間分検出した溝である。柱穴は20～30cmと小さく、柱間は北から、1.6m + 1.95m + 1.8m + 1.65m + 1.65m + 1.8mと不揃いである。建物の可能性もあるが、柱列として報告する。方向はN 2° Eである。

S A226 E地区中央北よりで検出した溝である。南北に4間分確認したが、東に伸びる建物の可能性も考えられる。柱間は1.8mの等間で、方向N 1° Eである。

S D 1 A地区中央、S H 3の南で検出した溝である。規模は幅40～100cm、検出面から10～25cmの深さである。東西方向の溝である。出土遺物には山茶椀片などがある。

S D 4 S D 1の南3mの位置で、平行に走る溝

である。幅80～100cm、検出面から5～10cmの深さである。出土遺物には、陶器片、土師器細片などがある。

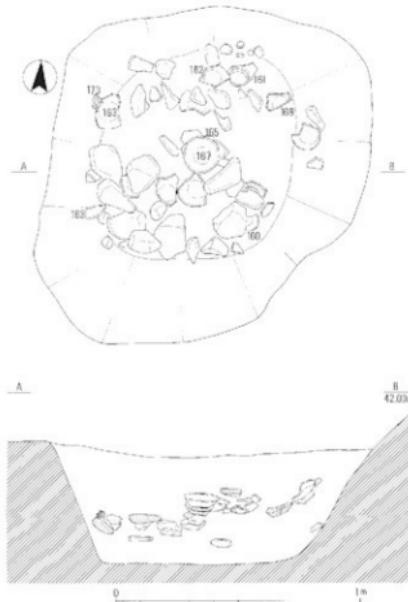
S D 1 (第38図) B地区の南端で検出した溝である。規模は幅2.6～4.2mの東西方向である。検出面から20cm程度の深さである。遺物には、山茶椀、土師器など多くのものが溝の東側で出土している。瓦も数点出土したが混入であろう。

S D 2 S D 1の北側へ6mの位置でそれに平行して走る溝である。規模は幅60～90cm、埋土は暗灰色粘質土である。出土遺物には、山茶椀片がある。

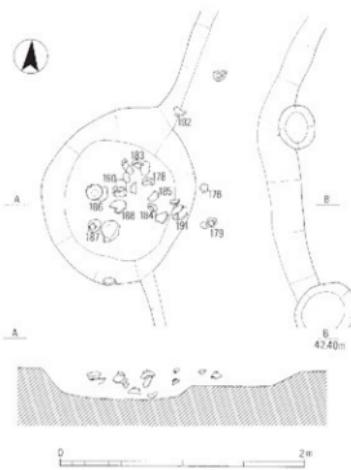
S D 3 S D 2の北側へ8mの位置でそれに平行して走る溝である。規模は幅30～40cmである。出土遺物には、山茶椀片がある。S D 1・S D 2・S D 3は、掘立柱建物S B202と向きを揃えることから、区画溝的なものであろう。 (服部芳人)

② F地区

(1) 奈良時代



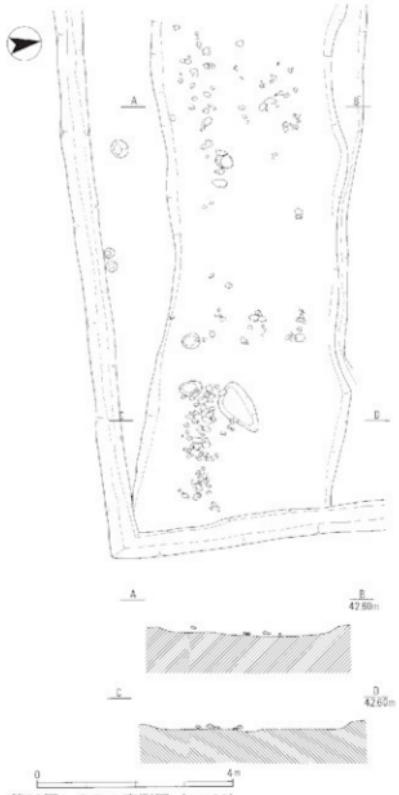
第36図 S K57実測図 (1/20)



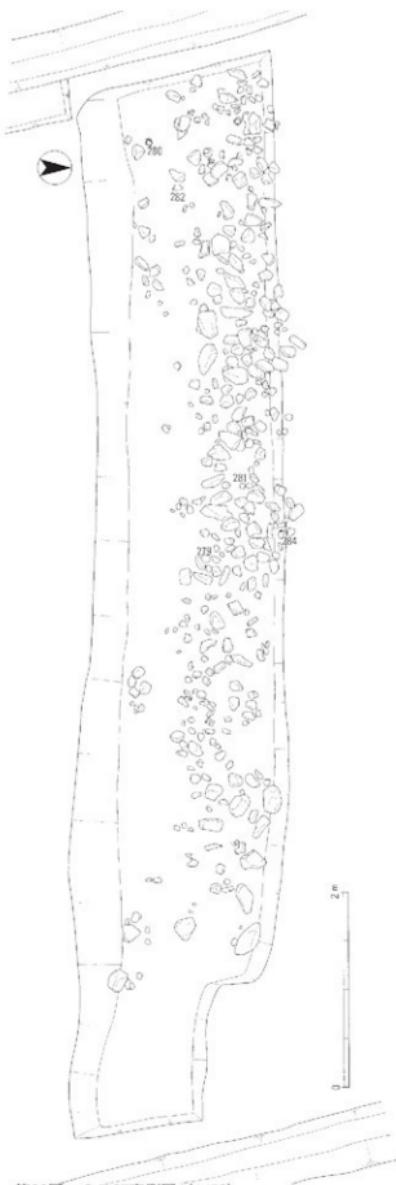
第37図 S K58実測図 (1/40)

S H 1 (第48図) 調査区のほぼ南側において検出した堅穴住居である。平面形は隅丸方形で、南北3.29m、東西3.5mである。検出面から深さは0.02～0.12m程度である。壁周溝はなく、主柱穴は確認できなかった。南西隅にある土坑（S K 6）は、後世の遺構であってこの堅穴住居のものでない。削平によって堅穴住居全体の残存はあまり良くなく、カマドも確認できなかった。しかしながら遺物は、少ないながらも土師器瓶か鍋の把手部分（327）とみられるものがある。おそらくこの堅穴住居の時期は、8世紀代とみてよいのではなかろうか。

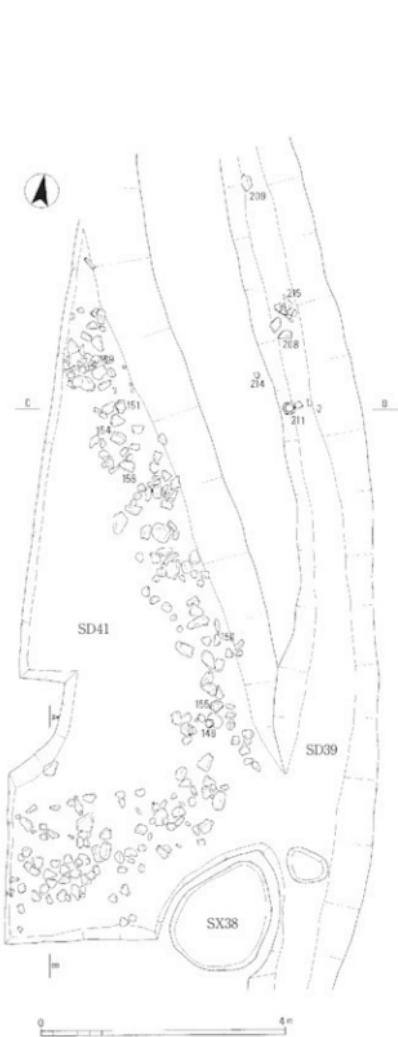
S H 2 (第49図) C15～C16区において検出した堅穴住居である。平面形は隅丸方形で、長辺3.29



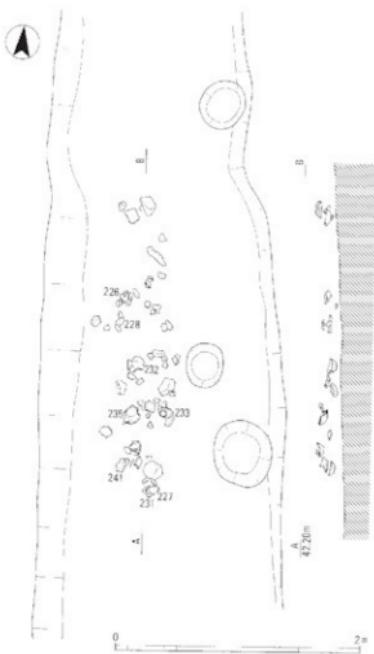
第38図 SD 1 実測図 (1/100)



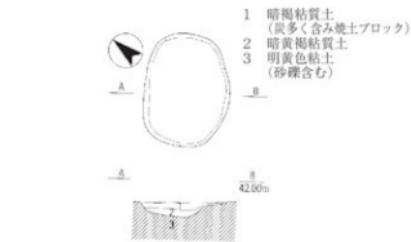
第39図 SD 67 実測図 (1/50)



第40図 S K41・S D39実測図 (1/80)

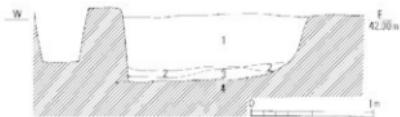


第41図 S D45実測図 (1/40)



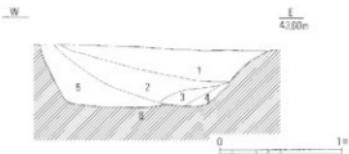
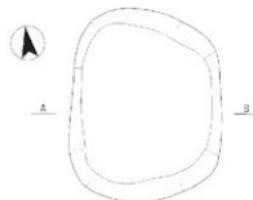
第42図 S X38実測図 (1/80)





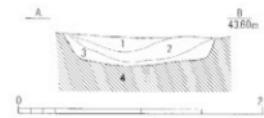
第43図 S K56実測図 (1/40)

- 1 暗褐粘質土
- 2 暗灰粘質砂
- 3 暗里灰粘質土
- 4 暗黄褐粘質土



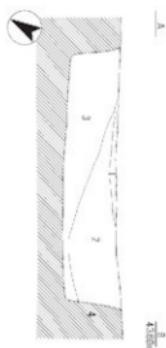
第44図 S D78実測図 (1/40)

- 1 淡褐色粘質土
- 2 淡黄褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 淡黄褐色粘質土
- 5 青褐色粘質土
- 6 明赤黄色粘土

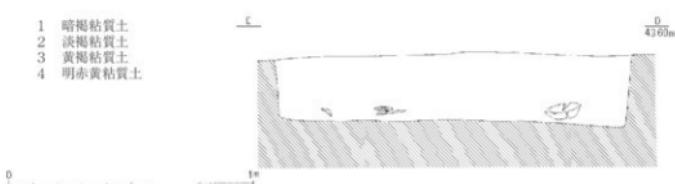
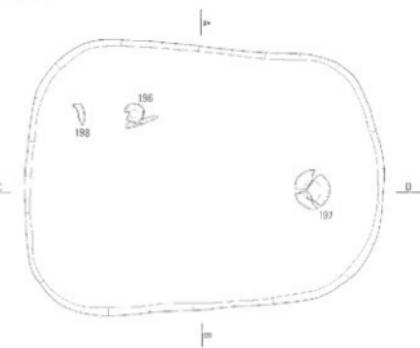


第45図 S X93実測図 (1/40)

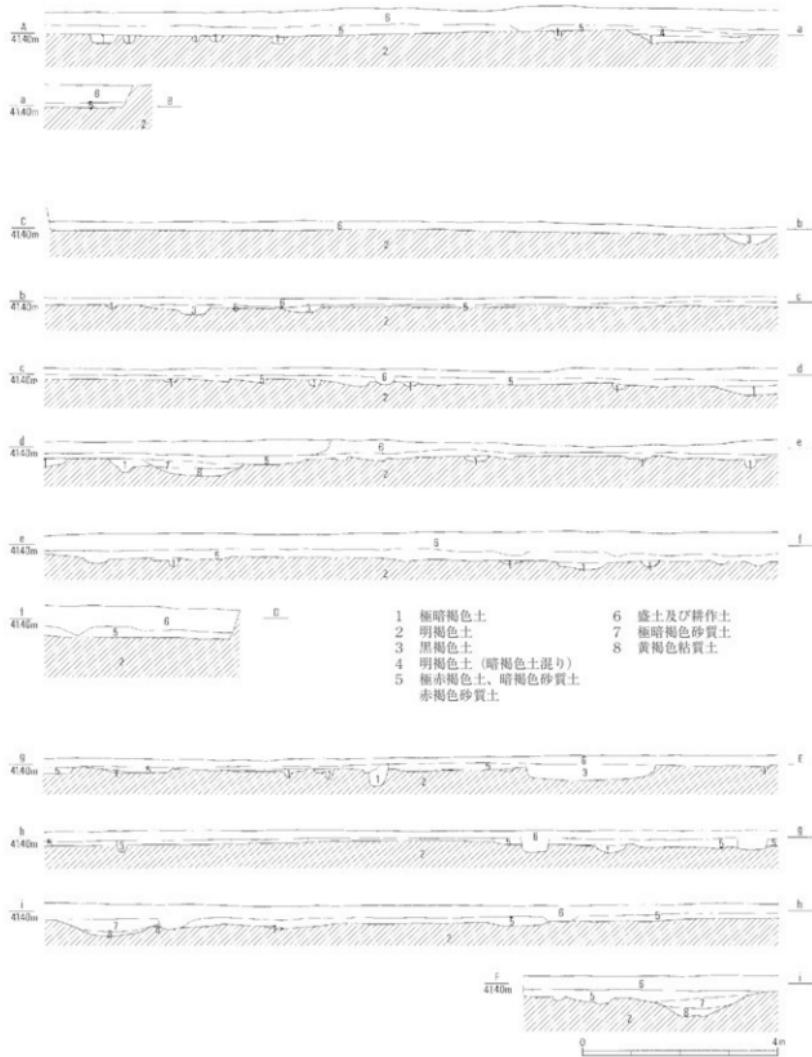
- 1 暗褐粘質土
- 2 淡褐粘質土
- 3 黄褐粘質土
- 4 明赤黄粘質土



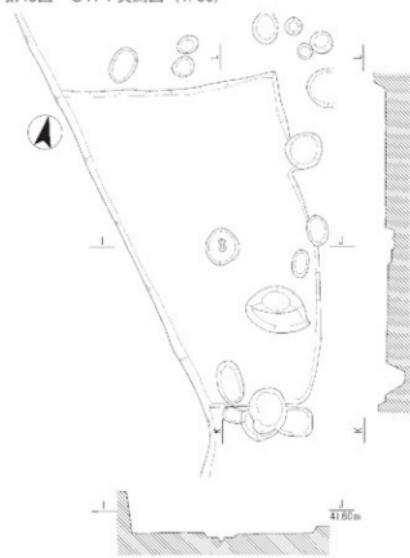
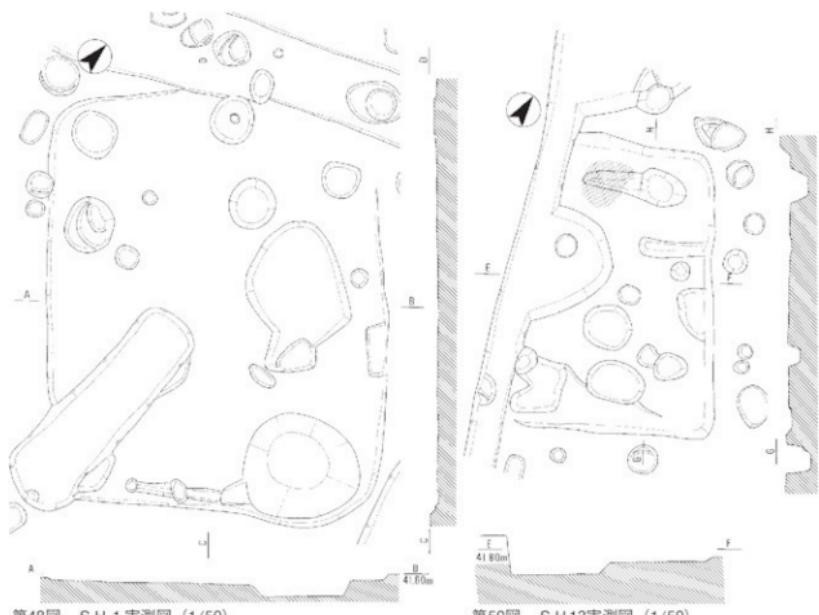
- 1 暗褐粘質土
- 2 淡褐粘質土
- 3 黄褐粘質土
- 4 明赤黄粘質土



第46図 S X96実測図 (1/20)



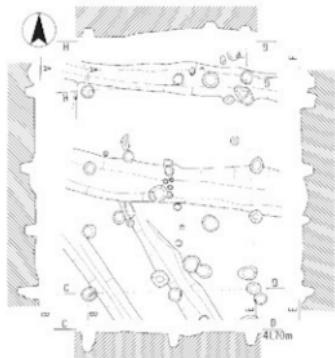
第47図 F地区調査区断面図 (1/100)



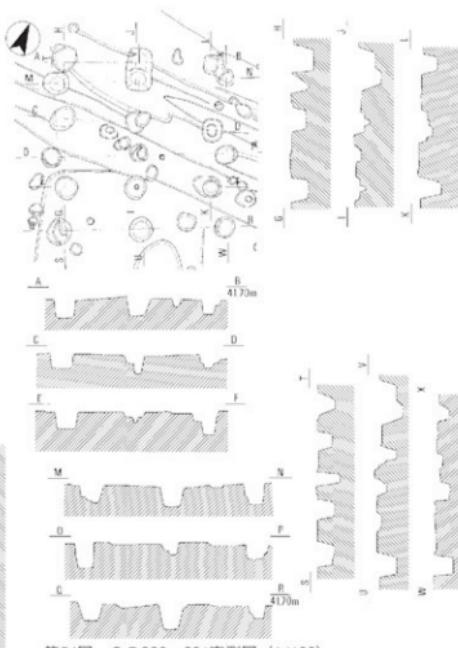
m、短辺2.22m、深さ0.07～0.2mである。カマドや壁周溝等の施設は、確認できなかった。削平により堅穴住居全体の残存はあまり良くない。出土遺物は、土師器甕(328-329)、須恵器杯身(330)、壺(331)がある。堅穴住居の時期は、SH 1と同様に8世紀代とみられる。

SK 9 SH 13のはば北側、B 2区に位置する土坑である。ここでは、土坑として捉えたが堅穴住居の可能性も充分ある。規模は、長径2.9m、短径1.52m以上、深さ0.16～0.21mである。遺物には、須恵器杯蓋(332)、土師器甕(333)が出土している。この土坑の時期は、8世紀後半頃とみられる。

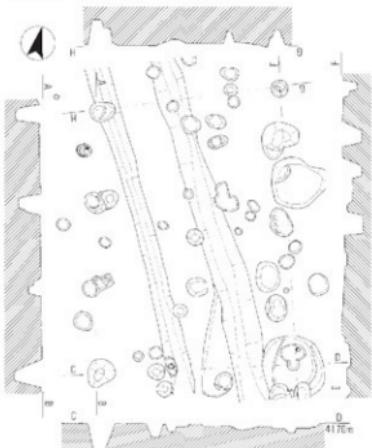
SH 13 (第50図) 調査区北西にB 2～B 3区に位置する堅穴住居である。発掘調査時は、土坑としてSK番号を付した。平面形は隅丸方形とみられ、長辺3.06m、短辺2.06m以上である。深さは、検出面から0.05～0.11m程度である。壁周溝はなく、主柱穴は確認できなかった。削平により堅穴住居全体の残存はあまり良くない。遺物は、土師器甕(335)、



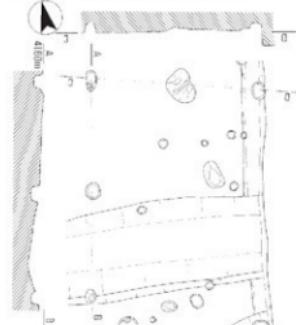
第51図 SB 233実測図 (1/100)



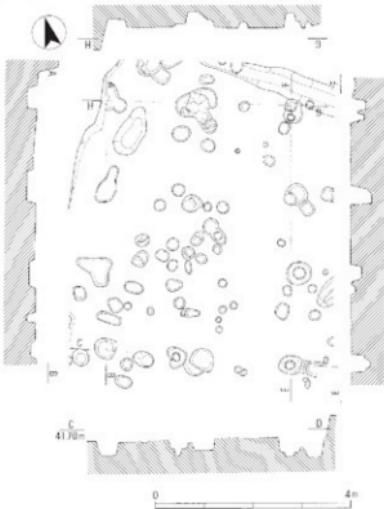
第54図 SB 230・231実測図 (1/100)



第52図 SB 228実測図 (1/100)



第53図 SB 229実測図 (1/100)



第55図 SB 232実測図 (1/100)

須恵器無頸壺（336）が出土している。堅穴住居の時期は、おおよそ8世紀後半頃とみられる。

S K 18 調査区D 9区において検出した土坑である。規模は、長径1.19m、短径1.18m、深さ0.08mである。出土遺物には、土師器皿（337）がある。

S D 11 調査区B 5～E 5区において検出した溝である。規模は、幅1.32～1.76m、深さ0.11～0.16mである。出土遺物には、須恵器壺（338）がある。

S D 12 調査区D 4～E 4区において検出した溝である。規模は、幅0.48～0.94m、深さ0.16～0.2mである。出土遺物には、須恵器壺（339）がある。

（2）平安時代

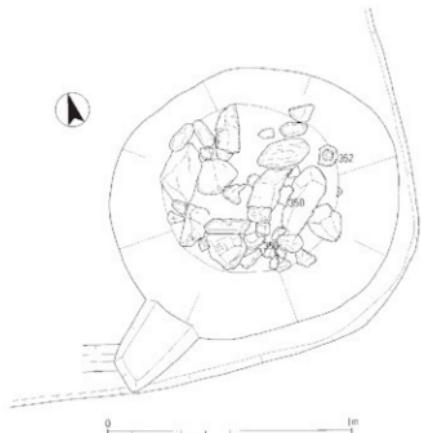
S B 233（第51図） 調査区やや北側において確認した掘立柱建物である。規模は、桁行4.1m、梁行3.4mを測る。掘立柱建物は桁行3間、梁行2間の南北棟の側柱建物である。建物の方位は、N 0°である。柱間寸法は、桁行が1.25m + 1.25m + 1.6m、梁行が1.7mの等間である。掘立柱建物の面積は、13.94m²である。從って建物の推定復元規模は、桁行4.1m（13尺5寸）、梁行3.4m（11尺5寸）となる。柱穴からの遺物は、細片である。掘立柱建物の時期は、9世紀後半頃であろう。

S B 228（第52図） 調査区中程において確認した掘立柱建物である。規模は、桁行5.4m、梁行3.7m

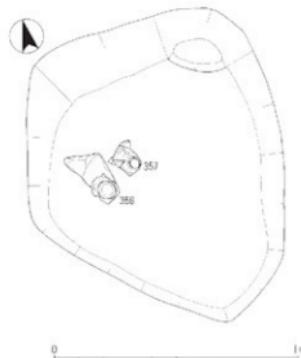
を測る。掘立柱建物は桁行3間、梁行2間の南北棟の側柱建物である。建物の方位は、N 17° Eである。柱間寸法は、桁行が1.85mの等間、梁行が1.85mの等間である。掘立柱建物の面積は、19.98m²である。從って建物の推定復元規模は、桁行5.4m（18尺）、梁行3.7m（12尺5寸）となる。出土遺物は、灰釉陶器碗（345）、土師質土師器碗（344）が出土している。掘立柱建物の時期は、10世紀後半頃とみられる。

S B 229（第53図） 調査区のやや中程東側の区外に伸びる掘立柱建物である。規模は、桁行3.4m以上、梁行4.5mを測る。掘立柱建物は桁行2間以上、梁行2間の東西棟の側柱建物である。建物の方位は、N 13° Wである。柱間寸法は、桁行が1.75mの等間、梁行が2.2m + 2.3mである。掘立柱建物の面積は、15.3m²以上である。從って建物の推定復元規模は、梁行4.5m（15尺）となる。出土遺物は細片のため、実測に耐えられないが掘立柱建物の時期は、9世紀後半頃とみられる。

S B 230（第54図） 調査区やや南側において確認した掘立柱建物である。規模は、桁行2.6m、梁行3.3mを測る。掘立柱建物は桁行2間、梁行2間の東西棟の総柱建物である。建物の方位は、N 24° Wである。柱間寸法は、桁行が1.3mの等間、梁行が1.5mの等間である。掘立柱建物の面積は、7.8m²



第56図 SK 6実測図 (1/20)



第57図 SK 15実測図 (1/20)

である。従って建物の推定復元規模は、桁行26m(8尺5寸)、梁行3m(10尺)となる。出土遺物は細片のため、実測に耐えられないが掘立柱建物の時期は、9世紀後半頃とみられる。

S B231 (第54図) S B230とはほぼ重複するよう位置する掘立柱建物である。規模は、桁行3m、梁行3.4mを測る。掘立柱建物は桁行2間、梁行2間の東西棟の純柱建物である。建物の方位は、N24°Wである。掘立柱建物の面積は、10.2m²とS B230よりは、広い。柱間寸法は、桁行が1.5mの等間、梁行が1.7mの等間である。従って建物の推定復元規模は、桁行3m(10尺)、梁行3.4m(11尺5寸)となる。出土遺物は細片のため、実測に耐えられないが掘立柱建物の時期は、9世紀後半頃とみられる。S B230との新旧関係は、一部重複があったものの判断できなかった。

S B232 (第55図) 調査区南側において確認した掘立柱建物である。規模は、桁行5.1m、梁行3.8mを測る。掘立柱建物は桁行3間、梁行2間の南北棟の偏柱建物である。建物の方位は、N17°Wである。柱間寸法は、桁行が1.8m+1.8m+1.5m、梁行が2.0m+1.8mである。掘立柱建物の面積は、19.38m²である。従って建物の推定復元規模は、桁行5.1m(17尺)、梁行3.8m(12尺5寸)となる。出土遺物は細片のため、実測に耐えられないが掘立柱建物の時期は、9世紀後半頃とみられる。

(3) 鎌倉時代

S B217 調査区F地区北端で、B地区にまたが

る掘立柱建物である。規模は、桁行11.45m、梁行4.3m以上を測る。掘立柱建物は桁行5間、梁行3間以上の東西棟である。建物の方位は、N17Wである。掘立柱建物の面積は、約49.235m²以上であろう。柱間寸法は、桁行が2.1m+2.65m+2.2m+2.2mである。遺物は、土師器鍋(348)、山茶碗(349)が出土しており、掘立柱建物の時期は凡そ12世紀中葉と降と考えられる。

南東においてS K10が含まれておりこの掘立柱建物に付随する土坑とみられる。

S K6 (第56図) 調査区D14～E14区において検出した土坑である。規模は、長径1.19m、短径1.08m、深さ0.45mである。出土遺物には、土師器鍋(350)、山茶碗(351～353)がある。

S K10 調査区D1～E1区において検出した土坑である。規模は、長径2.86m、短径1.64m、深さ0.1～0.12mである。出土遺物には、山茶碗(354～355)がある。

S K15 (第57図) 調査区D6区において検出した土坑である。規模は、長径1.29m、短径1.06m、深さ0.09～0.19mである。出土遺物には、土師器碗(356)・陶器壺(357)がある。

S D5 調査区B13～E13区において検出した溝である。規模は、幅1.85～1.94m、深さ0.25mである。出土遺物には、山茶碗(358・359)がある。

S D14 調査区B6～E6区において検出した溝である。規模は、幅0.75～0.84m、深さ0.09～0.13mである。出土遺物には、山茶碗(360)がある。

(萩原義彦)

2 沖ノ坂遺跡

沖ノ坂遺跡は、鈴鹿市国分町字沖ノ坂に所在する。鈴鹿川左岸、標高約38mの台地上に位置し、現況は水田である。今回の調査は、周知の沖ノ坂遺跡範囲の北辺部分にある。調査は、平成6年7月7日及び8日の2日間に行った。調査区は南北約27m、東西約16mの三角形状であり、調査面積は約230m²である。(第58図)

基本層序は、第1層暗灰褐色土（耕作土）、第2層淡黄灰色土（床土）、第3層明黄褐色粘土疊混じり（地山）である。包含層ではなく、第1層及び第2層の20～30cmを除去するとすぐに地山となる。検出した遺構は、溝3条・不明土坑1基にとどまる。溝からは、土師器細片・陶器細片が出土したが、時期を決定することはできない。また、不明土坑については、遺物の出土もなく埋土は、暗褐色粘土に明黄褐色粘土疊混じりの地山の土が混入するなど、現代の擾乱の可能性がある。

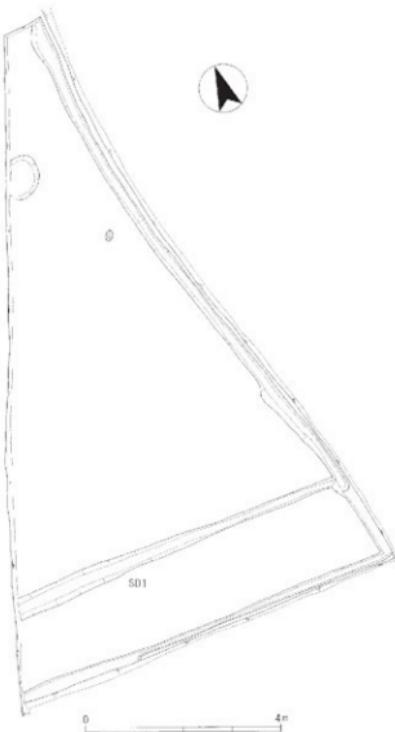
当調査区の南東約250mの地点で、平成2年度鈴鹿市教育委員会^①が、一般廃棄物最終処理場建設に伴って発掘調査を行っている。この調査では、弥生時代中期から後期にかけての堅穴住居が13棟をはじめ古墳時代から奈良時代の遺構が見つかっている。

今回の調査では、顕著な遺構・遺物と共に確認できず、沖ノ坂遺跡の中心からは外れているものと思われる。

(服部芳人)

(註)

- ①『三重県埋蔵文化財センター年報2』(三重県埋蔵文化財センター 1991年)



第58図 沖ノ坂遺跡遺構平面図 (1/100)

遺構名	地区名	小地区名	面積	方位	出土遺物	時期	備考
S D 1	A地区	D 49~F 49	約0.4~1m、長さ86m、深さ0.01~0.25m	E 20° S	山茶楓	縄文時代	
S X 2	A地区	C 46	長11m、幅0.65m、深さ0.1m	-	なし	?	
S H 3	A地区	E 50~D 50	南北2.9m、東西2m以上、深さ0.15m	-	須恵器杯身・裏片	奈良時代	
S D 4	A地区	D 49~F 49	約0.8~1m、長さ10m、深さ0.05~0.1m	E 20° S	常滑甕・瓦・土器器羽衣	縄文時代	S D 1と同一方向・南3m
S D 1	B地区	C 1~F 2	約2.6~4.2m、長さ14.2m、深さ0.2m	-	土器器少量、須恵器少量・瓦(丸・平)・山茶楓	縄文時代	
S D 2	B地区	C 2~F 2	幅0.6~0.9m、深さ50.1~62m	-	山茶楓	縄文時代	S D 5をさる
S D 3	B地区	C 3~F 3	幅0.3~0.4m、深さ0.15m	-	須恵器要片・山茶楓・瓦(平)	縄文時代	S D 2に平行
S K 4	B地区	E 1	長径1.2m、短径0.9m、深さ0.3m	-	瓦片	?	
S D 5	B地区	E 3~F 3	幅0.3~0.4m、深さ0.1m	-	土器器片	?	
S K 6	B地区	D 6~E 6	長径4m、短径2.3m、深さ0.2m	-	土器器要・鏡・山茶楓・山皿・瓦片・絞輪陶器	縄文時代	S B 202の南東隣土坑
S K 7	B地区	D 5	長径1.3m、短径0.9m、深さ0.9m	-	南伊勢系土器器鏡・土器器要片・山茶楓片	縄文時代	
S K 8	B地区	D 5	長径1.4m、短径1m、深さ0.08m	-	土器器要片・山茶楓	縄文時代	S K 7より古い
S D 9	B地区	C 4~F 4	幅0.5~0.8m、深さ0.08~0.1m	-	土器器片	?	調査区東側で南側に弧を描く
S D 10	B地区	D 5	幅0.4m、長さ2m、深さ0.1m	-	土器器片・山茶楓・瓦(平)・清掃鉢	縄文時代	
S D 11	B地区	C 5~C 7	幅0.03~0.8m	-	土器器少量、須恵器少量	?	
S D 12	B地区	F 6	幅0.4m、長さ1m、深さ0.3m	-	土器器片少量・須恵器片少量・山茶楓	縄文時代	
S D 13	B地区	E 3~E 12	幅0.03~1m、長さ3.25m、深さ0.02~0.1m	-	土器器少量・須恵器片少量・山茶楓少量	縄文時代	
S D 14	B地区	C 5~D 12	幅0.02~0.06m、長さ31m、深さ0.03~0.04m	-	土器器少量・須恵器片少量・山茶楓少量・瓦(平)	縄文時代	
S K 15	B地区	F 8	長径1m、短径0.6m、深さ0.23m	-	土器器要片・椀片・灰釉陶器・瓦片	平安時代	
S K 16	B地区	F 8	長径1m、短径1m、深さ0.3m	-	瓦片	?	
S D 17	B地区	C 8~F 9	幅1.7~3m、長さ13m、深さ0.25m	-	土器器少量・須恵器杯蓋片・陶器片・山茶楓少量・瓦(平)	縄文時代	S D 1とほぼ同じ幅・方向で同時
S D 18	B地区	C 8~D 9	幅0.3m、長さ9.5m、深さ0.15~0.3m	-	土器器少量・須恵器片・陶器片・瓦片	縄文時代	
S K 19	B地区	C 7~C 8	長径3m、短径1.7m、深さ0.24m	-	土器器少量・須恵器要・瓦片・灰釉陶器・山茶楓	縄文時代	
S K 20	B地区	C 8~D 9	長径3m、短径1.75m、深さ0.22m	-	-	?	
S D 21	B地区	C 9~F 10	幅1~1.1m、深さ0.03~0.12m	-	なし	?	S D 3・S B 202と同じ方向・同距離
S D 22	B地区	D 8~E 8	幅0.25~0.3m・長さ4.15m、深さ0.03~0.07m	-	土器器少量	?	
S H 23	B地区	C 9~C 10	長径3.25m、短径3m、深さ0.1m	-	土器器要片・須恵器細片	奈良時代	
S D 24	B地区	F 9~F 11	幅0.25~0.8m、長さ8.85m、深さ0.05~0.07m	-	なし	?	
S D 25	B地区	F 11~F 12	幅0.4~0.45m、長さ5.5m、深さ0.05~0.07m	-	山茶楓少量	縄文時代	
S D 26	B地区	C 13~F 12	幅0.25~2.5m、長さ15.5m、深さ0.11~0.14m	-	土器器少量・山茶楓少量・瓦(平・軒瓦)	縄文時代	
S D 27	B地区	C 13~F 13	幅0.9~1.2m、長さ8.2m、深さ0.06~0.15m	-	土器器少量・山茶楓少量・瓦片	縄文時代	
S D 28	C地区	C 16~F 16	幅0.25~2.8m、長さ14.75m、深さ0.14~0.22m	-	土器器少量・須恵器少量・瓦・山茶楓・灰釉陶器	縄文時代	
S D 29	C地区	C 15~F 15	幅0.25~0.35m、長さ9.8m、深さ0.05~0.07m	-	土器器少量・須恵器少量・瓦・山茶楓	縄文時代	
S D 30	C地区	C 16~C 21	幅0.55m、長さ11.5m、深さ0.15~0.26m	-	土器器少量・瓦片・山茶楓少量	縄文時代	
S D 31	C地区	F 15~F 16	幅0.32~0.48m、長さ3.7m、深さ0.06~0.13m	-	山皿	縄文時代	
S K 32	C地区	E 15~F 16	長径4m、短径2m、深さ0.29m	-	土器器少量・須恵器少量・山茶楓・山皿・瓦片	縄文時代	
S D 33	C地区	E 15~D 21	幅2.5m、長さ22m、深さ0.17~0.18m	-	土器器少量・瓦片・山茶楓・練鉢・青磁	縄文時代	
S K 34	C地区	D 15~E 15	長径1.5m、短径0.75m、深さ0.19m	-	須恵器片・山茶楓	縄文時代	
S D 35	C地区	C 16~D 17	幅0.75~1.1m、長さ3.5m、深さ0.15~0.17m	-	瓦少量	?	
S D 36	C地区	C 17~D 17	幅0.5~0.7m、長さ2.75m、深さ0.07~0.09m	-	山茶楓	縄文時代	
S K 37	C地区	F 16~F 17	長径1.75m、短径1.25m、深さ0.28m	-	土器器少量・山茶楓少量・山皿	縄文時代	
S X 38	C地区	F 18	長径1m、短径0.95m、深さ0.17m	-	山茶楓	縄文時代	
S D 39	C地区	F 17~F 20	幅0.45~0.55m、深さ0.05~0.11m	-	南伊勢系土器器鏡・土器器皿・山茶楓・瓦片	縄文時代	

第2表 遺構一覧表（1）

S K40	C 地区	F17	長伴16m、短伴11m、深さ0.34m	-	土師器少量、山茶椀・山皿、砥石	鎌倉時代
S K41	C 地区	F18~F20	長伴7.5m、短伴21m、深さ0.34m	-	土師器少量、山茶椀・山皿、縹跡・瓦片・青磁	鎌倉時代
S X42	C 地区	D20	長伴1m、短伴0.85m、深さ0.13m	-	なし	?
S D43	C 地区	B21~D21	幅0.5~0.8m、長さ4.65m、深さ0.1~0.16m	-	土師器少量、瓦片・山茶椀少量	鎌倉時代
S D44	C 地区	B21~F22	幅3~4.9m、長さ14.25m、深さ0.15~0.31m	-	土師器茶葉・羽茎・瓦片・山茶 椀・青磁	鎌倉時代
S D45	C 地区	C23~D29	幅1.1~2.75m、長さ27.5m、深さ0.12~0.38m	-	土師器少量、高杯・盤・椀・南伊勢系土師器鍋・丸皿・山茶椀・灰陶・白磁・陶器	鎌倉時代
S D46	C 地区	C22~C24	幅0.55~1.2m、長さ14.5m、深さ0.11~0.15m	-	土師器少量、南伊勢系土師器鍋・丸皿・山茶椀	鎌倉時代
S K47	C 地区	E24~F25	長伴3.3m、短伴2.25m、深さ0.1m	-	土師器・櫛・碗・須恵器杯茎・杯身・瓦片・羽茎・山茶椀	奈良時代
S K48	C 地区	F23~E24	長伴4.85m、短伴2m、深さ0.17m	-	土師器少量、須恵器少量・瓦片・山茶椀	鎌倉時代
S K49	C 地区	F23	長伴0.96m、短伴0.85m、深さ0.11m	-	土師器少量、須恵器少量・瓦片	?
S K50	C 地区	D23~E23	長伴2.25m、短伴2m、深さ0.3m	-	土師器杯・ミニチュア土器・須恵器杯・杯蓋・瓦片	奈良時代
S K51	C 地区	E23	長伴3m、短伴2.5m、深さ0.15m	-	土師器碗	奈良時代
S K52	C 地区	E22~E23	長伴15m、短伴0.75m、深さ0.25m	-	丸片	整穴住居の可能性もある。
S D53	C 地区	E24~F24	幅0.3m、長さ1.8m、深さ0.07m	-	土師器少量	?
S D54	C 地区	D25~F25	幅1.35~2.35m、長さ0.95m、深さ0.32~0.37m	-	南伊勢系土師器鍋・須恵器杯身・杯身・丸皿・山茶椀・青磁	鎌倉時代
S K55	C 地区	C25	長伴1.5m、短伴1.25m、深さ0.08m	-	土師器少量・須恵器要片・瓦片・灰陶・盤・黑色器	平安時代
S K56	C 地区	F25~F26	長伴4.25m、短伴1.25m、深さ0.55m	-	土師器碗・山茶椀・青磁・山皿・圓盤・縹跡・丸皿	鎌倉時代
S K57	C 地区	C25~D25	長伴17.5m、短伴15m、深さ0.55m	-	山茶椀・山皿・青白磁合子・瓦片	鎌倉時代
S K58	C 地区	D28	長伴1.25m、短伴0.9m、深さ0.3m	-	土師器・南伊勢系土師器鍋・山茶椀・瓦片・陶器・山皿	鎌倉時代
S D59	D 地区	C30~F30	幅0.75~1.3m、長さ10m、深さ0.1~0.25m	-	瓦片・山茶椀	鎌倉時代
S D60	D 地区	E30~F30	幅0.7m、長さ0.06m、深さ0.07m	-	土師器少量・山茶椀・瓦片	鎌倉時代
S K61	D 地区	E31	長伴11m、短伴1m、深さ0.18m	-	山茶椀少量	鎌倉時代
S D62	D 地区	D30~D31	幅0.5~1m、長さ0.05m、深さ0.06~0.08m	-	瓦片	?
S D63	D 地区	D30~D31	幅0.8~1m、長さ0.05m、深さ0.1~0.12m	-	山茶椀	鎌倉時代
S D64	D 地区	C31~E32	幅1.5~2.3m、長さ0.06m、深さ0.08~0.1m	-	瓦片・山茶椀・すり鉢	鎌倉時代
S D65	D 地区	C33~F33	幅0.95~2.1m、長さ10m、深さ0.057~0.062m	-	土師器・南伊勢系土師器鍋・須恵器・杯身・瓦片・山茶椀	鎌倉時代
S D66	D 地区	C38~D38	幅1.25~2m、長さ5m、深さ0.18m	-	山茶椀・山皿・玉・瓦片	鎌倉時代
S D67	D 地区	D40~F40	幅1.5~1.6m、長さ5m、深さ0.25~0.32m	-	須恵器要・山茶椀・砥跡・瓦片	鎌倉時代
S K68	D 地区	C37~C38	長伴1.6m、短伴0.7m、深さ0.04m	-	常滑器・山茶椀	鎌倉時代
S D69	E 地区	C43~F44	幅2.3~2.6m、長さ8.8m、深さ0.31~0.33m	-	土師器碗・瓶・瓦片・青白磁合子・美濃燒器・山茶椀	鎌倉時代
S D70	E 地区	C43~E 43	幅0.5~0.7m、長さ8.7m、深さ0.15~0.22m	-	土師器少量・瓦片・山茶椀・陶器	鎌倉時代
S D71	E 地区	D43	幅1.1m、深さ0.18m	-	土師器少量・瓦片・山茶椀・南伊勢系土師器鍋	鎌倉時代 SD70~71同一道構
S K72	E 地区	C44~D46	長伴8.8m、短伴3m、深さ0.23m	-	土師器少量・須恵器杯身・山茶椀・縹跡・青磁・瓦片	鎌倉時代
S X73	E 地区	D45~E 45	長伴22m、短伴11.5m、深さ0.1m	-	土師器少量・山茶椀・瓦片	鎌倉時代
S D74	E 地区	-	-	-	-	SD70~71同一道構
S K75	E 地区	E45	長伴11.5m、短伴1m、深さ0.14m	-	土師器少量・須恵器要片	奈良時代
S D76	E 地区	D44~E 45	幅1.2m、長さ3.5m、深さ0.25m	-	瓦片・山茶椀	鎌倉時代
S D77	E 地区	D49~E 49	幅0.45~0.6m、長さ7.2m、深さ0.07~0.09m	-	土師器少量・山茶椀少量・山皿	鎌倉時代
S D78	E 地区	C56~E 52	幅1.8~1.85m、長さ0.42m、深さ0.48~0.52m	-	土師器羽茎・山茶椀・大目茶碗・瓦片・砥石・青磁・火舍	鎌倉時代
S K79	E 地区	E48	長伴1m、短伴0.65m、深さ0.16m	-	なし	?
S D80	E 地区	D47~D 48	幅0.2~0.27m、長さ0.9m、深さ0.05~0.06m	-	土師器少量	?
S D81	E 地区	C48~D 48	幅0.25~0.85m、長さ3.25m、深さ0.02~0.11m	-	山茶椀	鎌倉時代
S K82	E 地区	E49	長伴1.8m、短伴1m、深さ0.15m	-	土師器少量・瓶・須恵器要片・山茶椀少量	鎌倉時代

第3表 遺構一覧表(2)

遺構番号	遺構名	規模			柱間寸法		棟方向	面積	時代	地区	備考
		間数	桁行	梁行	桁行	梁行					
201	掘立柱建物	2 × 2	39	33	195等間	1.65等間	東西棟 E 18° N	1287	平安時代	B地区	矩柱建物？
202	掘立柱建物	(3) × 3	(69)	69	24+24+21	24+24+21	東西棟 N 13° W	(4761)	鎌倉時代 (13世紀後半)	B地区	南東隅土坑SK 6
203	掘立柱建物	3 × 2	36	33	12等間	1.65等間	南北棟 N 6° W	1188	平安時代 (9~10世紀)	B地区	倉庫？
204	掘立柱建物	3 × 2	81	42	27等間	2.1等間	南北棟 N 5° E	3402	平安時代 (10世紀)	B地区	S B203より 新しい。
205	掘立柱建物	(2) × (35)	—	195等間	—	南北棟 N 6° W	—	平安時代 (9世紀後半 ~10世紀)	B地区		
206	掘立柱建物	3 × (1)	495	(195)	1.65等間	1.95	東西棟? N 6° W	—	時期不明	B地区	
207	掘立柱建物	(3) × (2)	615	495	2.25+1.65+2.25	2.7+2.25	N 0°	(304425)	鎌倉時代?	C地区	南東隅土坑SK 32 模石を持つ
208	掘立柱建物	5 × 2	87	45	165+165+18+ 18+18 (21)+195 +225+24)	21+24 (21+225+195 +24)	南北棟 N 11° W	3915	時期不明	C地区	東西に庇を持つ (4間分)
209	掘立柱建物	3 × 2	66	45	2.25+2.25+2.1	2.25等間	東西棟 E 12° N	297	平安時代 (10世紀)	C地区	S B208より 新しい。
210	掘立柱建物	3 × 2	45	33	1.65+1.65+1.2	1.65等間	南北棟 N 16° W	1485	平安時代 前半	C地区	
211	掘立柱建物	3 × 2	54	45	1.8等間	2.25等間	南北棟 N 11° W	243	平安時代	C地区	S B208と同 方向
212	掘立柱建物	(2) × 2	(495)	45	2.7+2.25	2.25等間	東西棟 N 5° W	(22275)	鎌倉時代?	C地区	南東隅土坑SK 48 矩柱建物
213	掘立柱建物	(3) × 2	(585)	45	195等間	2.25等間	東西棟 E 3° N	(26325)	平安時代 (9世紀後半)	C地区	S B208より 新しい。
214	掘立柱建物	3 × 2	675	48	2.25等間	2.4等間	東西棟 E 3° N	324	平安時代 (9世紀後半)	C地区	
215	櫛	4	—	—	2.1等間	—	N 15° E	—	平安時代 (9世紀後半から10世紀後半)	D地区	
216	掘立柱建物	(2) × 2	(48)	48	2.4等間	2.4等間	東西棟 E 21° N	(2304)	時期不明	D地区	
217	掘立柱建物	5 × (3)	1145	(43)	2.1+2.65+2.2+2.2	—	東西棟? N 17° W	(49235)	鎌倉時代	F地区	矩柱建物南東 隅に土坑SK 10を有する
218	掘立柱建物	(3) × 2	(63)	39	2.1等間	1.95等間	東西棟 E 16° N	(2457)	平安時代 (9世紀後半から10世紀後半)	D・E地区	
219	掘立柱建物	2 × 2	48	39	2.4等間	2.1+1.8	東西棟 E 2° N	1872	鎌倉時代 (13世紀後半)	E地区	

第5表 掘立柱建物・櫛一覧表(1)

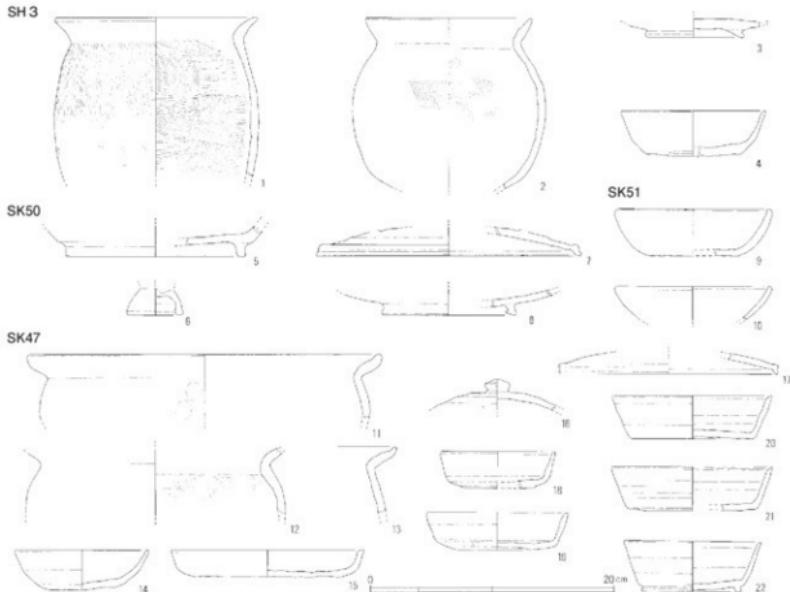
遺構 番号	遺構名	規模			柱間寸法		棟方向	面積	時代	地区	備考
		間数	桁行	梁行	桁行	梁行					
221	掘立柱建物	(2) × 2	(36)	39	18等間	195等間	東西棟 E 15° N	(14.04)	平安時代 前半	E地区	
222	掘立柱建物	3 × 3	7.65	585	2.55等間	21 + 21 + 165	N 0°	44.7525	鎌倉時代	E地区	
223	掘立柱建物	(3) × 2	(63)	48	2.1等間	24等間	東西棟 E 20° N	(30.24)	平安時代前半 (9世紀後半)	E地区	
224	掘立柱建物	5 × 3	7.95	63	1.35 + 1.65 + 1.65 + 1.65 + 1.65	21等間	南北棟 N 3° W	50.085	鎌倉時代 (13世紀後半)	E地区	
225	横	6	-	-	1.6 + 1.95 + 1.8 + 1.65 + 1.65 + 1.8	-	N 2° E	-	鎌倉時代	E地区	
226	横	4	-	-	1.8等間	-	N 1° E	-	鎌倉時代	E地区	
227	掘立柱建物	4 × (1)	8.1	(2.9)	2.3 + 2 + 2.3 + 1.5	19	N 2° E	-	鎌倉時代	C地区	南東隅に土坑 (S K 56) と有する
228	掘立柱建物	3 × 2	5.4	37	1.8等間	1.85等間	南北棟 N 17° E	19.98	平安時代?	F地区	灰陶陶器碗 ロクロ土師器 碗
229	掘立柱建物	(2) × 2	(34)	45	1.7等間	2.2 + 2.3	東西棟 N 13° W	(15.30)	平安時代?	F地区	
230	掘立柱建物	2 × 2	2.6	3	1.3等間	1.5等間	東西棟 N 24° W	7.8	平安時代?	F地区	矩柱建物
231	掘立柱建物	2 × 2	3	34	1.5等間	1.7等間	東西棟 N 24° W	10.2	平安時代?	F地区	矩柱建物
232	掘立柱建物	3 × 2	5.1	38	1.8 + 1.8 + 1.5	2.0 + 1.8	南北棟 N 17° W	19.38	平安時代?	F地区	
233	掘立柱建物	3 × 2	4.1	34	1.25 + 1.25 + 1.6	1.7等間	南北棟 N 0°	13.94	平安時代	F地区	
234	横	5	-	-	1.8 + 1.5 + 1.5 + 1.5 + 1.8	-	N 13° W	-	平安時代	E地区	

第6表 掘立柱建物・柵一覧表 (2)

IV 調査成果（遺物）

遺物は、A～F地区においてコンテナバットにし
て約200箱である。遺物の時期は、おおよそ弥生時
代から室町時代にかけてのものである。ほとんどの
遺物は、平安時代及び鎌倉時代のもので占められて
おり、他の時代のものは、僅かである。弥生時代の
ものは磨製石斧があり、奈良時代のものは須恵器杯
蓋・杯身・土師器壺・杯がある。平安時代のものは
綠釉陶器挽椀・灰釉陶器椀・皿、土師器壺・鎌倉時
代のものは、陶器椀（以下、山茶椀と表記する）、
陶器皿（以下、山皿と表記する）、室町時代は、南
伊勢系土師器鍋などがある。A～E及びF地区の2
つに分け、以下に時代毎に遺構に沿って記述する。
個々の詳細なデータについては遺物観察表（第7表
～第15表）を参照されたい。

1 A～E地区



第59図 出土遺物実測図（1）

①奈良時代

S H 3出土遺物（1～4）

土師器壺（1・2）・杯（3）・須恵器杯身（4）が
ある。1は、口縁を「く」の字に外反させる。底部は欠
損するが、やや細長い体部になろう。カマドの支脚
として利用され、堅穴住居の時期を決める遺物であ
る。2の口縁は、1に比べ緩やかで、球形の体部で
ある。3は、扁平で低い高台を有する。土師質土師
器は混入であろう。4は立ち上がりが強く、底部は
ケズリによって調整される。遺物の時期は土師質土
師器を除いて7世紀末から8世紀初頭とみられる。

S K 47出土遺物（11～22）

土師器壺（11～13）・椀（14）・皿（15）・須恵器
杯蓋（16・17）・杯身（18～22）がある。11・13の
口縁端部は内側にやや肥厚させる。14は、平らな底
部から緩やかに弧を描いて体部へつながる。15は、

体部が直線的に曲がり、端部は平坦な面をつくる。12は口縁部が欠損している。16・17は、共に還元作用に乏しく、色調は赤身がある。接点はないが、同一個体の可能性もある。18～21は高台の付かないもので、底部が平らなものと、斜めからへラ切りを行われたため2段に折れ曲がるものがある。なお、19は、生焼けである。遺物の時期は、8世紀末から9世紀初頭とみられる。

S K50出土遺物（5～8）

土師器皿（5）・台付甕の脚台（6）、須恵器杯蓋（7）・杯身（8）がある。5は高台が太く、高い。

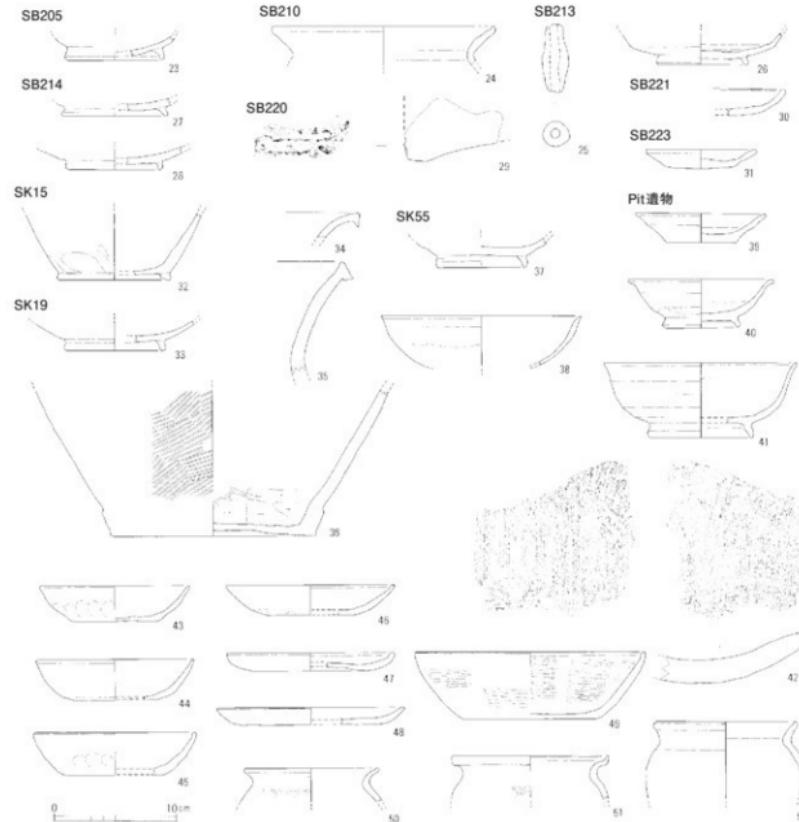
大型の皿である。6は、小型の脚部である。端部をやや肥厚させる。7は、上面に輪状のつまみの取れた痕跡が見られる。8は、大型のものである。遺物の時期は、8世紀末から9世紀初頭とみられる。

S K51出土遺物（9・10）

土師器杯がある。9は、口縁の端部を内側に若干折り曲げる。10は、9と比べるとやや器壁が薄く、浅い形状である。遺物の時期は、8世紀後葉前後であろう。

②平安時代

S B205出土遺物（23）



第60図 出土遺物実測図（2）

灰釉陶器椀がある。高台は「ハ」の字に開く。折戸53号窯併行であろう。遺物の時期は、10世紀前半とみられる。

S B210出土遺物 (24)

土師器甕がある。口縁を大きく「く」の字の外反させる。遺物の時期は、10世紀前後であろうとみられる。

S B213出土遺物 (25・26)

土師質土錘 (25)、綠釉陶器接椀 (26) がある。26は、高台が短く、「ハ」の字に開く。体部は緩やかに折れ曲がる。遺物の時期は、9世紀後半から10世紀前半とみられる。

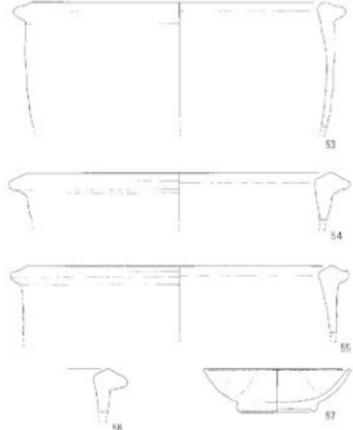
S B214出土遺物 (27・28)

山茶椀 (27)・灰釉陶器椀 (28) がある。27は、高台は短い、大きく開く。混入であろう。28は、高台が短く内側にやや内擣し、三日月状である。遺物の時期は黒瓦90号窯併行とみられ、9世紀後半から10世紀前半とみられる。

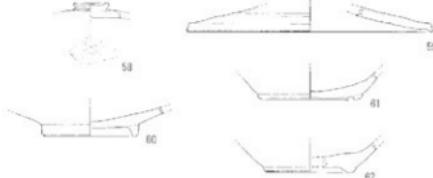
S B220出土遺物 (29)

軒平瓦の瓦当部分の一部であろう。

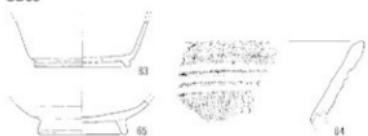
SD10



SD28



SD65



0 20cm

第61図 出土遺物実測図 (3)

S B221出土遺物 (30)

土師器杯がある。杯は、口縁端部をやや肥厚させる。遺物の時期は、9世紀前半とみられる。

S B223出土遺物 (31)

山皿がある。遺物の時期は、13世紀前半とみられる。

S D10出土遺物 (53～57)

清郷型鍋 (53～56)、灰釉陶器小椀 (57) がある。53～56はいずれも底部は欠損する。口縁端部の内側部分に面を持つもの(54～56)と丸くるもの(53)がある。いずれも10世紀後半とみられる。57は、10世紀後半から11世紀初頭にかけてものとみられる。

S D28出土遺物 (58～62)

須恵器杯蓋 (58-59)、灰釉陶器皿 (60)、山茶椀 (61・62) がある。58・59は、混入遺物である。遺物の時期は、8世紀代とみられる。60は、口縁部が欠損した高台部のみである。9世紀後半から10世紀初頭であろう。61・62は、高台部のみである。藤澤良祐氏の編年の6型式とみられ13世紀中葉とみられる。

S D65出土遺物 (63～67)

須恵器杯身（63）・壺（64）、灰釉陶器椀（65）、平瓦（66・67）がある。63は、腰部の屈曲が強い。8世紀中葉以降のものであろう。64は、口縁部の一部分だけである。沈線が3条巡り、波状文が施される。65は、高台部のみである。10世紀後半から11世紀初頭のものである。66・67は、布目痕跡を留める。

S K 19出土遺物（32）

灰釉陶器壺である。壺の底部から高台部にかけて残る。遺物の時期は、10世紀前半とみられる。

S K 19出土遺物（33～36）

灰釉陶器皿（33）、須恵器壺（34～36）がある。33は、高台が「ハ」の字状に開く。34は、大きく外反させ、端部を下方に折り曲げる。35は、緩やかに外反させ、上下に肥厚させる。36は、底部は平らで、体部外面に叩き痕跡を有する。遺物の時期は、灰釉陶器が10世紀前半とみられる。

S K 55出土遺物（37・38）

灰釉陶器椀（37）、黒色土器椀（38）がある。37は、高く内脣する高台を有する。38は、口縁端部を若干

外反させ、内面全面にはススを付着させる。遺物の時期は、38が黒色土器A類で10世紀前半、37が9世紀後半とみられる。

C-12 Pit 1出土遺物（39～41）

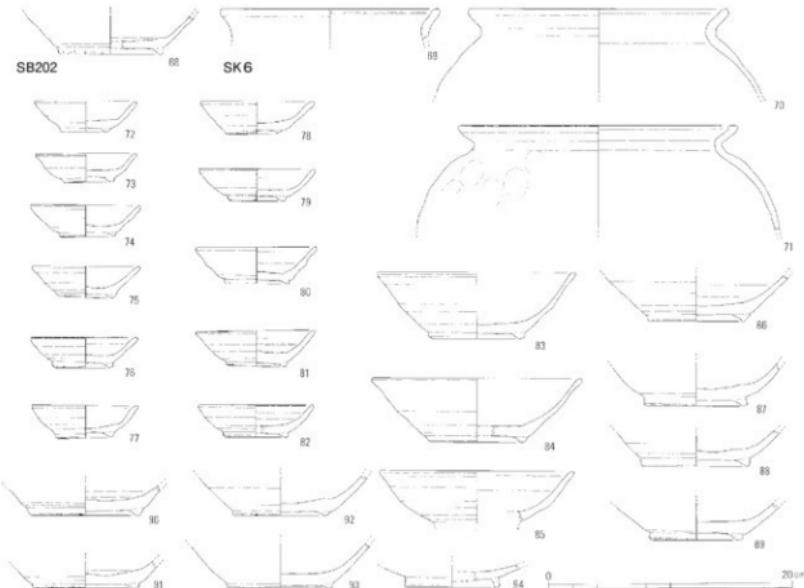
ロクロ土器器小皿（39）、灰釉陶器小椀（40）・椀（41）がある。39は、底部外面に糸切り痕跡が明瞭に残る。平らな底部から体部は直線的に伸びる。40は、「ハ」の字に開くやや高い高台である。体部は緩やかに内脣し端部は外反して、やや肥厚させる。完形品である。41は、体部が大きく内脣し深いものである。遺物の時期は、11世紀前半とみられる。

C-7 Pit 1出土遺物（42）

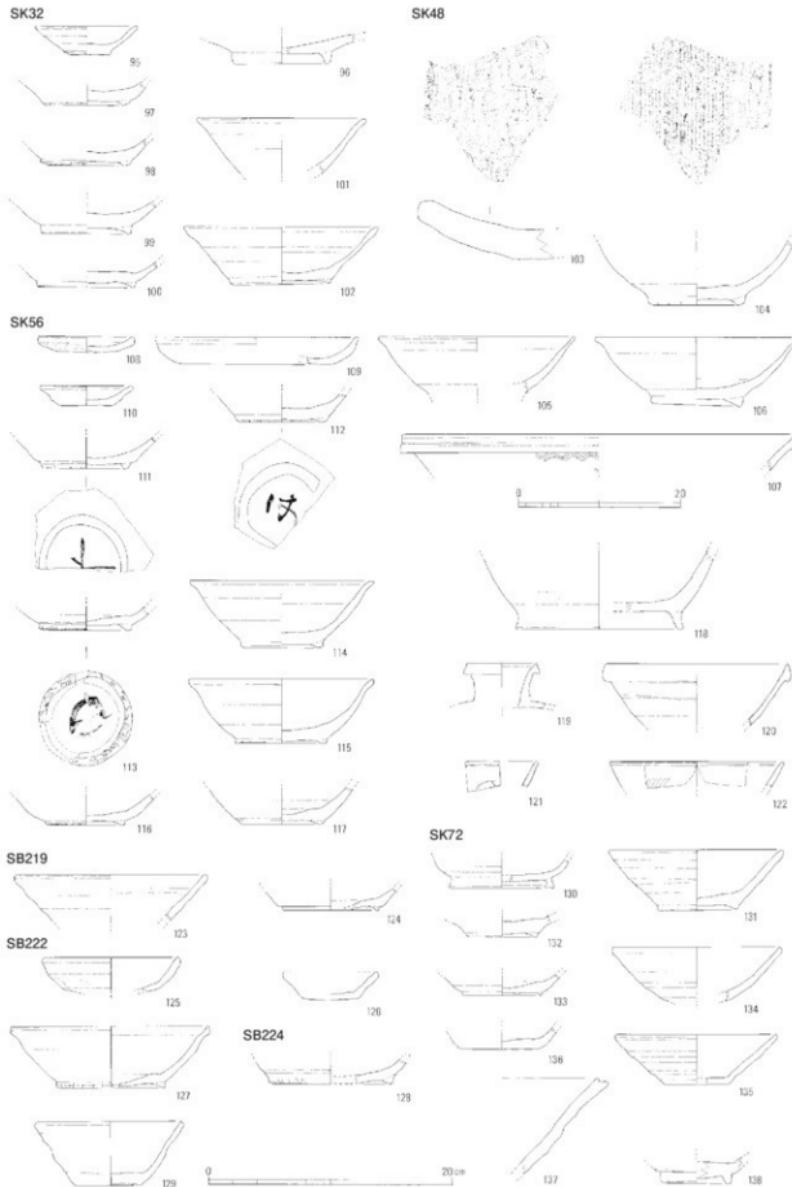
平瓦（42）がある。布目痕跡を留める。

E-43 Pit 1出土遺物（43～52）

土器器椀（43～45）・皿（46～48）、黒色土器椀（49）、土器器壺（50～52）がある。43～45は、体部は直線的に伸びる。口縁端部を内側へ丸める。外面にユビオサエが残る。46～48は、やや深いもの（46）と浅いもの（47・48）がある。49は、底部は



第62図 出土遺物実測図（4）



第63図 出土遺物実測図（5）

平らで、体部は直線的に伸びる。口縁端部を内側に丸める。内面にススを付着させる。51の口縁端部は上方へつまみ上げる。遺物の時期は、9世紀後半から10世紀初頭とみられる。

③鎌倉時代

S B202出土遺物 (68)

山茶椀が出土している。藤澤氏の編年で5型式とみられ、遺物の時期は13世紀前後とみられる。

S K 6 出土遺物 (69 ~ 94)

山茶椀 (83 ~ 93)、山皿 (72 ~ 82)、土師器甕 (69)、鍋 (70・71)、綠釉陶器椀 (94) がある。遺物の時期は、12世紀中葉以降とみられる。

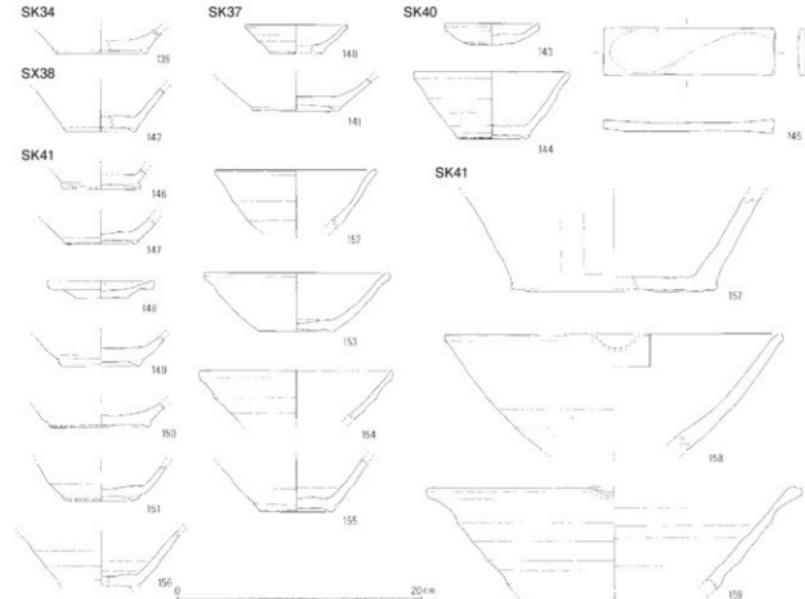
S K 32出土遺物 (95 ~ 102)

山皿 (95)、山茶椀 (96 ~ 102) がある。遺物の時期は、藤澤編年5 ~ 6型式で12世紀後葉とみられる。

S B212出土遺物 (308)

磨製石斧 (308) がある。混入である。遺物の時期は、弥生時代中期とみられる。

S K 48出土遺物 (103 ~ 107)



第64図 出土遺物実測図 (6)

山茶椀 (104 ~ 106)、陶器甕 (107)、平瓦 (103) が出土している。遺物の時期は、12世紀後葉から13世紀初頭とみられる。

S B227出土遺物 (108 ~ 122)

山茶椀 (111 ~ 117)・山皿 (110)、土師器皿 (108・109)、陶器鉢 (118)、須恵器壺 (119)、白磁碗 (120)、青磁碗 (121・122) が出土している。112は、底面に墨書きで「は」が書かれている。山茶椀は藤澤編年で5 ~ 6型式で12世紀後葉から13世紀前葉とみられる。

S B219出土遺物 (123・124)

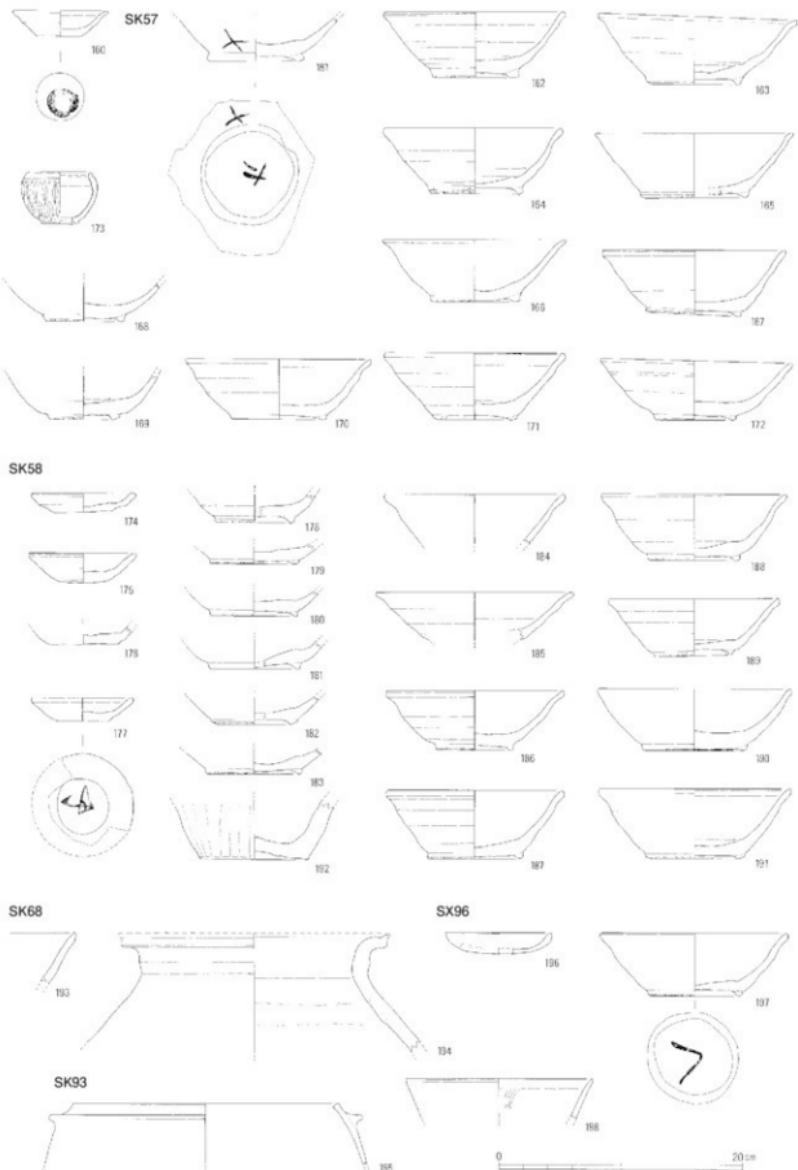
山茶椀 (123・124) がある。遺物の時期は、藤澤氏の編年で5 ~ 6型式で12世紀後葉から13世紀前葉とみられる。

S B222出土遺物 (125 ~ 127)

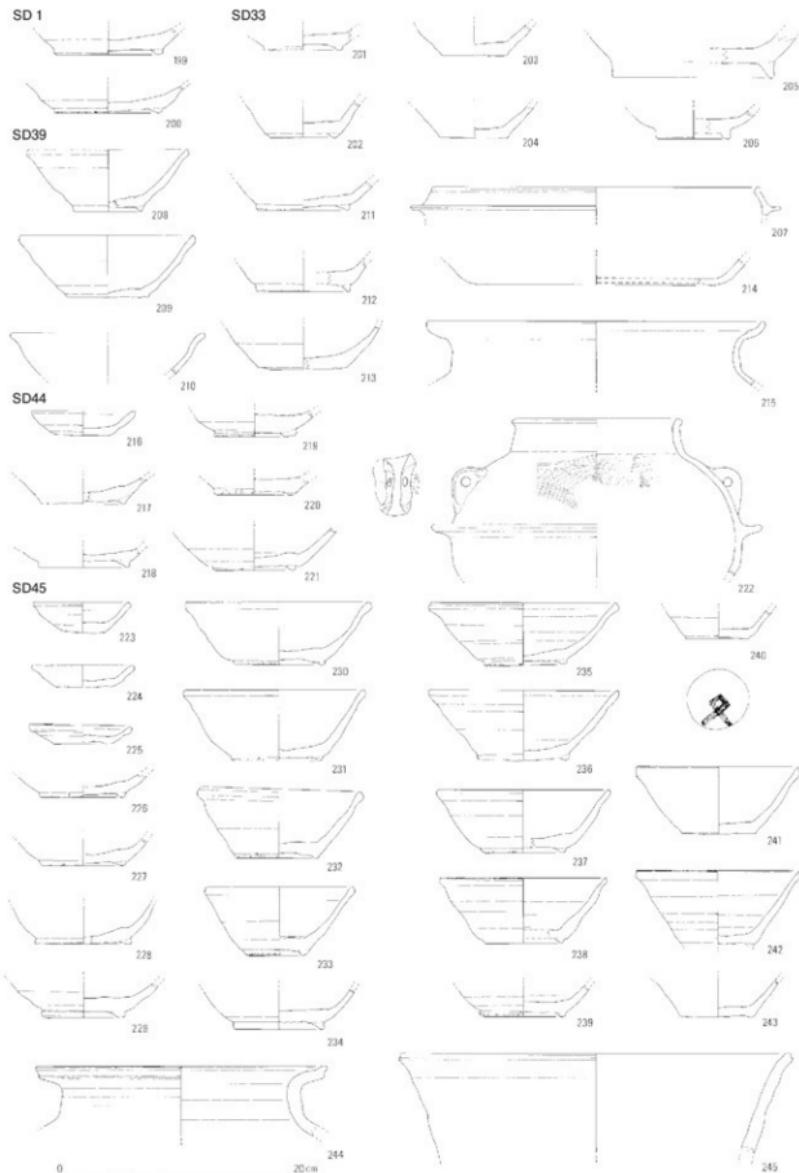
土師器椀 (125)、山皿 (126)、山茶椀 (127) がある。遺物の時期は、藤澤氏の編年で6型式とみられ、13世紀前葉とみられる。

S B224出土遺物 (128・129)

山茶椀 (128・129) がある。遺物の時期は藤澤編

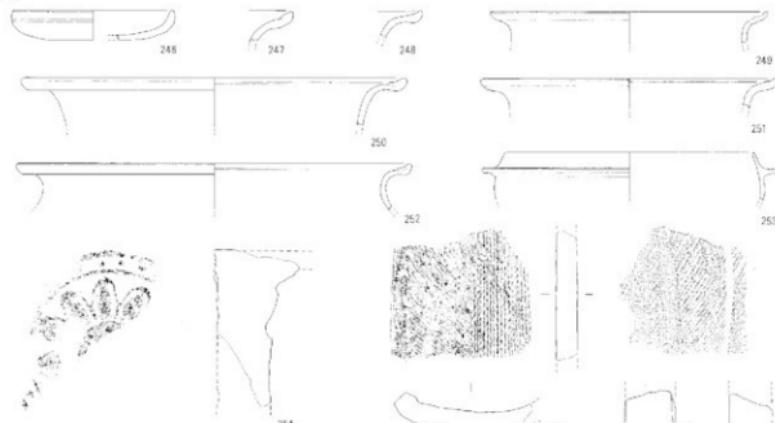


第65図 出土遺物実測図（7）

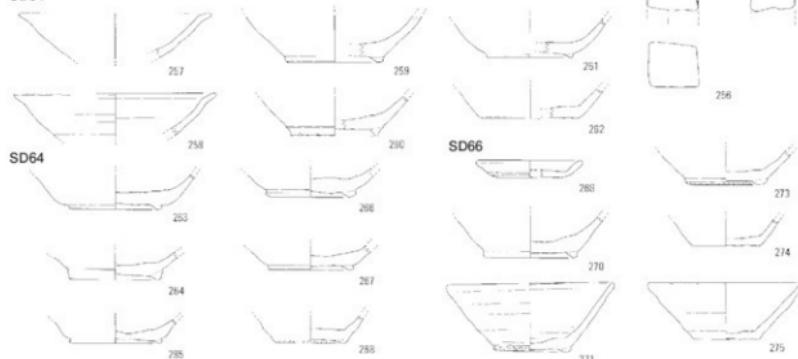


第66図 出土遺物実測図（8）

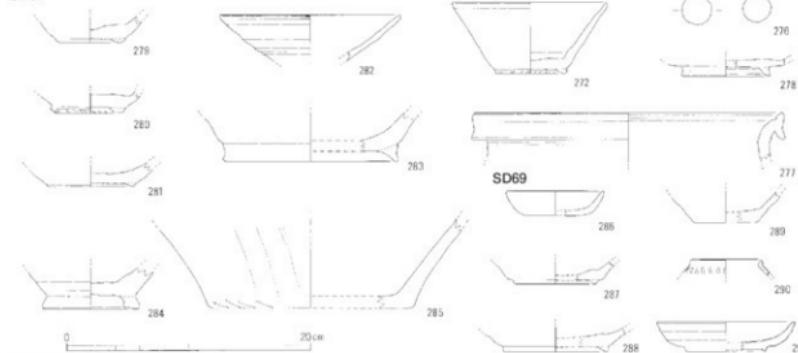
SD45



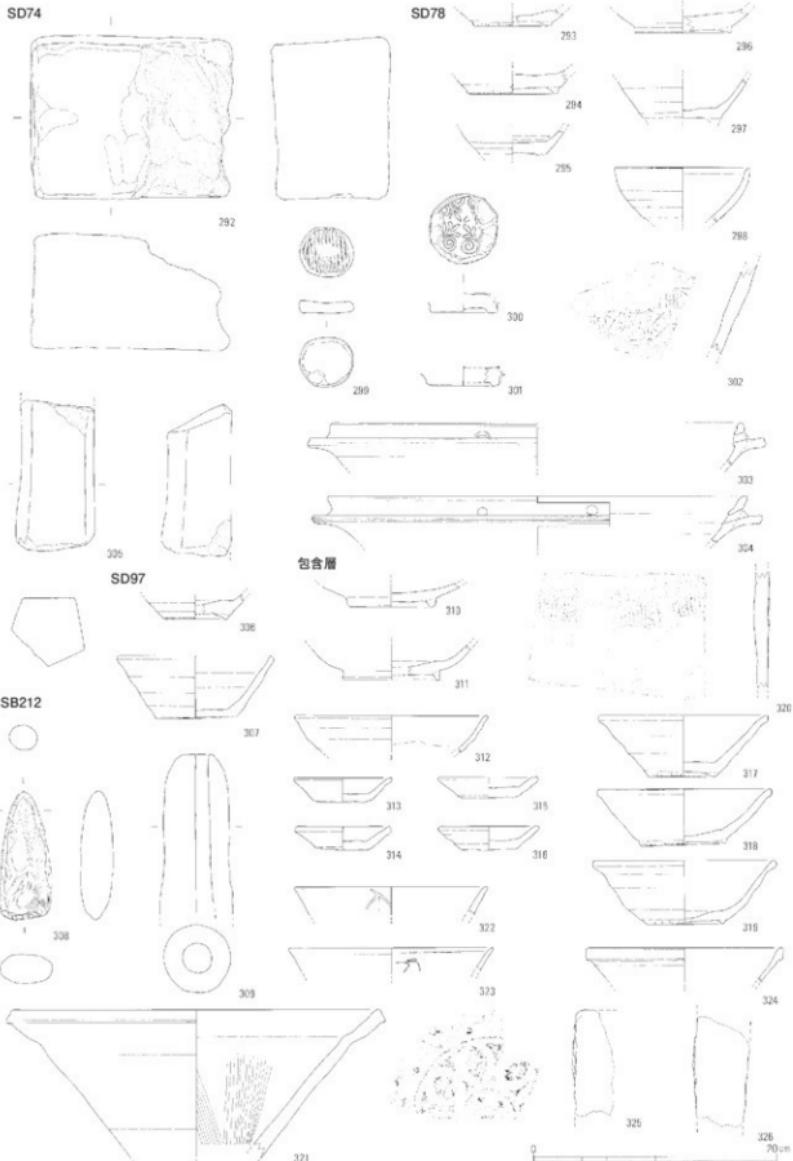
SD54



SD67



第67図 出土遺物実測図（9）



第68図 出土遺物実測図（10）

年で6型式、13世紀前葉とみられる。

S B224内 S K72出土遺物（130～138）

須恵器杯身（130）、山茶椀（131～136）、陶器鉢（137）、青磁椀（138）が出土している。130は高台が接地面においてやや開く、8世紀代であろう。山茶椀は5～6型式であろう、13世紀前葉とみられる。

S K34出土遺物（139）

山茶椀が出土している。底部に粗穀痕跡を残す。藤澤編年の6型式であろう。13世紀前葉に相当しよう。

S K37出土遺物（140～141）

山茶椀（141）、山皿（140）が出土している。藤澤編年5型式に相当しよう。12世紀末葉から13世紀初頭であろう。

S X38出土遺物（142）

山茶椀が出土している。藤澤編年6型式の13世紀中葉であろう。

S K40出土遺物（143～145）

山皿（143）、山茶椀（144）、砥石（145）が出土している。山茶椀及び山皿は、藤澤編年の7型式に相当しよう。13世紀中葉であろう。145は2面が砥面である。

S K41出土遺物（146～159）

山茶椀（146～155）、陶器甕（156）、陶器片口鉢（158・159）が出土している。山茶椀は、藤澤編年の第6～7型式に相当しよう。13世紀前葉から中葉にかけてのものである。

S K57出土遺物（160～173）

山皿（160）、山茶椀（161～172）、青白磁合子（173）が出土している。160の底面には、「○」が描かれている。161の底面及び体部外面には、それぞれ「大」と「×」ないし「+」が墨書きされている。山茶椀は、藤澤編年の第6型式に相当しよう。13世紀前葉であろう。173は、外面に連弁文がある。13世紀中葉前後のものであろう。

S K58出土遺物（174～192）

山皿（174・175・177）、山茶椀（176・178～191）、陶器壺（192）が出土している。177は、底面に「と読めそうな墨書きがある。遺物の時期は、藤澤編年の第6型式に相当するとみられ、13世紀前葉とみられる。

S K68出土遺物（193）

山茶椀が出土している。口縁部だけである。藤澤

編年の第6～7型式に相当しよう。遺物の時期は、13世紀中葉前後とみられる。

S K93出土遺物（194・195）

陶器甕（194）、土師器羽釜（195）が出土している。194は常滑の甕で13世紀中葉、195は南伊勢系の羽釜である。

S X96出土遺物（196～198）

土師器皿（196）、山茶椀（197）、青磁椀（198）が出土している。197は、底面に「へ」と墨書きされている。198は、内面に劃花文がみられる。遺物の時期は、藤澤編年の第6型式とみられ、13世紀前葉とみられる。

S D1出土遺物（199～200）

山茶椀が出土している。藤澤編年の第6型式であろう。遺物の時期は、13世紀前葉とみられる。

S D33出土遺物（201～207）

山茶椀（201～204）、陶器鉢（205）、青磁椀（206）、土師器羽釜（207）がある。山茶椀は、底部を中心に戻り、藤澤編年の第6型式とみられ、13世紀前葉であろう。205は、片口鉢であろうか。206は、高台を中心に戻る。207は、口縁部が残る。

S D39出土遺物（208～215）

山茶椀（208～213）、土師器皿（214）、南伊勢系土師器鍋（215）が出土している。山茶椀は、藤澤編年の第6型式とみられ、13世紀前葉であろうか。214は、僅かであるが接地面から立ち上がる。215は、伊藤裕偉氏の編年（以下、伊藤編年）で第3段階のa型式に相当しよう。時期は、14世紀前葉であろう。

S D44出土遺物（216～222）

山皿（216）、山茶椀（217～221）、土師器茶釜（222）が出土している。山茶椀は、藤澤編年の第6型式であろう、13世紀前葉とみられる。

S D45出土遺物（223～256）

山皿（223～225）、山茶椀（226～243）、陶器甕（244・245）、土師器皿（246）、鍋（247～252）、羽釜（253）、軒平瓦（254）、平瓦（255）、砥石（256）が出土している。山茶椀は、藤澤編年の6～7型式に相当する。13世紀前葉から中葉であろう。土師器鍋は、南伊勢系土師器鍋である。伊藤編年の第2段階c型式から第3段階a型式にかけてのものであろう。14世紀前葉から中葉にかけてとみられる。254は、瓦当部分が僅かに残る。單弁蓮華文で外区254は、

布目痕跡を留める。256の紙面は、4面である。

S D 54出土遺物 (257 ~ 262)

山茶椀 (257 ~ 262) が出土している。藤澤編年の第6型式に相当するとみられ、13世紀前葉であろう。

S D 64出土遺物 (263 ~ 268)

山茶椀 (263 ~ 268) が出土している。藤澤編年の第6型式に相当するとみられ、13世紀前葉とみられる。

S D 66出土遺物 (269 ~ 278)

山皿 (269)、山茶椀 (270 ~ 275)、土玉 (276)、綠釉陶器椀 (278)、陶器壺 (277) がある。山茶椀の時期は、藤澤編年の第6型式とみられ、13世紀前葉とみられる。276は、ほぼ円球である。277は、常滑の壺である。中野編年の5型式にあたるとみられ、13世紀前葉であろう。278は、10世紀後葉とみられる。

S D 67出土遺物 (279 ~ 285)

山茶椀 (279 ~ 282)、陶器鉢 (283)、陶器壺 (284)、陶器壺 (285) が出土している。山茶椀は、藤澤編年第6型式で13世紀前葉とみられる。283は、片口鉢であろうか。284は、壺の高台部が中心に残る。285は、常滑の壺の底部である。

S D 69出土遺物 (286 ~ 291)

土師器椀 (286)、山茶椀 (287 ~ 289)、青白磁合子 (290)、陶器小椀 (291) がある。山茶椀は、藤澤編年第6型式とみられ、13世紀前葉であろう。290は、173と同様のものとみられる。

S D 70出土遺物 (292)

磚 (292) が検出時に出土している。

S D 78出土遺物 (293 ~ 305)

山茶椀 (293 ~ 297)、天目茶碗 (298)、陶器加工円盤 (299)、青磁椀加工円盤 (300)、青磁椀 (301)、陶器壺 (302)、土師器羽釜 (303・304)、砥石 (305) が出土している。山茶椀は、藤澤編年の第6型式に相当する。13世紀前葉とみられる。298は、瀬戸・美濃のもので16世紀前半である。299は、元が陶器擂鉢であるが、円盤状に加工されている。300は、内面に割花文が認められる。また、円盤状に成るよう周辺部を加工している。301は、高台部が僅かに残る。302は、常滑の壺の体部とみられる。中野編年の5型式であろう。13世紀前葉とみられる。303・304は、中北勢系土師器鍋である。305は、砥面が5面である。

S D 97出土遺物 (306 ~ 307)

山茶椀が出土している。藤澤編年の第6 ~ 7型式に相当し、13世紀前葉から中葉にかけてのものであろう。

ビット出土遺物 (308 ~ 309)

磨製石斧 (308)、輪の羽口 (309) がある。磨製石斧は弥生時代とみられ、混入遺物であろう。

包含層出土遺物 (310 ~ 326)

灰釉陶器椀 (310 ~ 312)、山皿 (313 ~ 316)、山茶椀 (317 ~ 319)、陶器壺 (320)、陶器擂鉢 (321)、青磁椀 (322・323)、白磁 (324)、軒丸瓦 (325・326) が出土している。310の高台は、「ハ」の字状に開く。灰釉陶器は、9世紀前半頃と思われる。山茶椀類は、藤澤編年の第6型式に相当するとみられ、13世紀前葉であろう。320は、常滑の壺体部である。中野編年の5型式とみられる。321は、瀬戸・美濃大窯のもので15世紀末から16世紀初頭にかけてのものである。

2 F 地区

①奈良時代

S H 1出土遺物 (327)

327は、瓶か鍋の把手部分である。ソケット状に指し込まれたものであろう。遺物の時期は、8世紀代とみられる。

S H 2出土遺物 (328 ~ 331)

土師器壺 (328・329)、須恵器杯身 (330)、高杯 (331) がある。328と329は、頭部の屈曲の度合いがかなり異なる。330は、全体的に赤味を帯びており丁寧な調整が成されている。331は、高杯脚部片である。遺物の時期は、8世紀後半とみられる。

S K 9出土遺物 (332・333)

土師器壺 (333)・須恵器杯蓋 (332) がある。333は口縁端部が上方に摘み上げられている。332は、天井部がヘラケズリによって丁寧に調整される。遺物の時期は、8世紀後半とみられる。

S H 13出土遺物 (334 ~ 336)

土師器壺 (334)、土師器杯 (335)、須恵器無頭壺 (336) が出土している。334は口縁端部が丸くまとまる。頭部は、やや厚めである。335は、風化著しく調整が不明瞭である。336は、口縁部がやや直立気味に僅かに立ち上がる。遺物の時期は、8世紀後半とみられる。

S K 18出土遺物 (337)

土師器皿が出土している。口縁端部は、丸くまとまる。全体的に残りは良くないほうである。

S D 11出土遺物 (338)

須恵器壺が出土している。底部が僅かに残る。

S D 12出土遺物 (339)

須恵器壺が出土している。底部の高台は、やや高めである。遺物の時期は、8世紀後半とみられる。

包含層出土遺物 (340～343)

土師器甕(340)、土師器杯(342)、須恵器杯蓋(341)、壺蓋(343)がある。342は、底部に製作過程で生じたつなぎ目の痕跡を留める。341は天井部のヘラヶズリによって鋭角な部分を残す。343は、壺の蓋と

みられる。天井部分に本来宝珠つまみがあったとみられるが、欠損していない。遺物の時期は、おおよそ8世紀代とみられる。

②平安時代

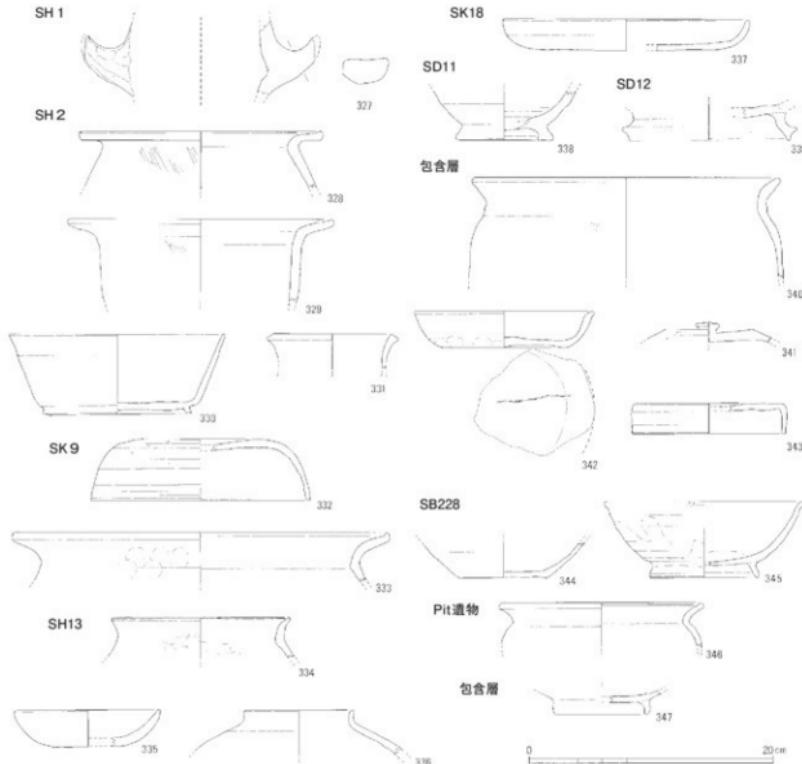
S B 228出土遺物 (344～345)

土師質土師器碗(344)、灰釉陶器碗(345)が出土している。345は、折戸53号窯式併行のものであろう。10世紀前半のものであろう。344は、底部はケズリによって調整されている。

Pit出土遺物 (346)

土師器甕が出土している。口縁部斜め上方に面を持ちように調整されている。

包含層出土遺物 (347)



第69図 出土遺物実測図 (11)

347は、灰釉陶器碗である。高台接地面がやや内擱する。東山72号窯式併行のものであろう。10世紀後葉のものであろう。

③鎌倉時代

S B217出土遺物 (348 ~ 349)

南伊勢系土師器鍋 (348)、土師質土師器碗 (349) が出土している。348は伊藤編年の第1段階のもの、13世紀前葉とみられる。349は、いわゆるロクロ土師器碗である。体部以下は、欠損していない。

S K 6 出土遺物 (350 ~ 353)

土師器鍋 (350)、土師質土師器碗 (351)、山茶碗 (352 ~ 353) が出土している。350は、口縁端部が内面に折り込まれる。12世紀中葉以降のものであろう。351は、いわゆるロクロ土師器の碗とみられる。体部以下は、欠損していない。352・353は、藤澤編年の第6型式であろう。13世紀前葉のものであろう。

S K 10 出土遺物 (354 ~ 355)

山茶碗が出土している。共に藤澤編年の第6型式であろう。13世紀前葉であろう。

S K 15出土遺物 (356 ~ 357)

山茶碗 (356)、陶器壺 (357) が出土している。山茶碗は、藤澤編年の第5型式、12世紀末葉から13世紀初頭にかけてのものである。357は、古瀬戸前期のものであろう。13世紀前葉であろう。

S D 5 出土遺物 (358 ~ 359)

山茶碗が出土している。共に藤澤編年第5 ~ 6型式のものであろう。13世紀前葉とみられる。

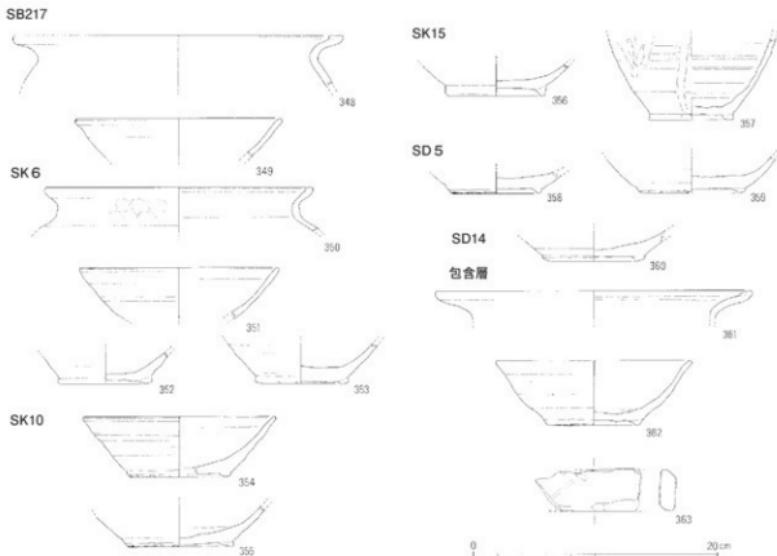
S D 14出土遺物 (360)

山茶碗が出土している。藤澤編年第5 ~ 6型式のものであろう。13世紀前葉であろう。

包含層出土遺物 (361 ~ 363)

南伊勢系土師器鍋 (361)、山茶碗 (362)、砥石 (363) が出土している。361は、口縁端部が丸く伊藤編年の第1段階のものであろう。13世紀前葉であろう。362は藤澤編年第5型式であろう。13世紀前後のものであろう。363は、底面が2面である。

(服部芳人・萩原義彦)



第70図 出土遺物実測図 (12)

〔遺物観察表註〕

報告書に掲載した遺物の観察表は、以下の規則によって作成した。

- 1 観察表左端の番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号をふっていない。したがってこの番号が遺物の全てでない。
- 2 実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの3桁は用紙の番号で、後側の2桁は用紙内の実測した順序の番号である。
- 3 出土遺構は上段に地区番号を表し、下段に遺構番号を示している。地区・遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考にされたい。
- 4 器種については、判明しているものについて記載した。
- 5 計測値について記載した口径・器高・その他は、それぞれ最大値をとっている。また、「-」は、計測できないものと表している。単位は、記載のとおりcmである。さらに遺物によっては、長・幅・厚・重・高台径・底径・つまみ径などを表すこともある。
- 6 調整技法の特徴については、あくまでも成されている調整について記述しており調整順序によるものでない。
- 7 脱土については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。
- 8 焼成については、良・並・不良の3段階に分けて、その中間に位置する場合はややを付記している。
- 9 色調については、『新版 標準土色帖』(小山・竹原編19版 1997年)に基づいて表記した。
- 10 残存については、遺物の残りの割合で表記している。「-」は、表しきれないものである。
- 11 備考は、その遺物における特徴的な事柄を記載しているか、遺物取り上げの際の番号などを表記している。

(遺物 参考文献)

〔須恵器〕

田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ 1966年)

齋藤孝正「狼狽・美濃須衛」『季刊考古学第42号』(雄山閣 1993年)

齋藤孝正・後藤惟一編『須恵器集成図録第3巻東日本編Ⅰ』(雄山閣 1995年)

〔黒色土器〕

大川勝宏「斎宮の黒色土器」『斎宮歴史博物館研究紀要2』(1993年)

〔灰釉陶器・綠釉陶器〕

齋藤孝正「狼投窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナルNo.211』(ニューサイエンス社 1982年)

齋藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」『古代の土器研究-律令の土器様式の西・東 施釉陶器-』古代の土器研究会 1994年)

〔陶器輪・皿(山茶輪・山皿)〕

藤澤良祐「山茶輪研究の現状と課題」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994年)

南伊勢系土器鍋ほか

伊藤裕介「中世前伊勢系の土器に関する一試論」『Mic: history』vol. 1 三重歴史文化研究会 1990年)

倉田直純「下川遺跡」(伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか) 三重県埋蔵文化財センター 1990年)

(まとめ 参考文献)

角正淳子「因分北遺跡発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター 2000年)

山田猛・駒田利治「北堀池遺跡発掘調査報告-第2分冊-」(三重県教育委員会 1992年)

〔墨書き土器〕

山田猛・森川幸雄・岸田早苗「山城遺跡・北瀬古遺跡」(三重県埋蔵文化財センター 1994年)

川崎志乃他「里前遺跡」(三重県埋蔵文化財センター 2002年)

他積裕昌・角正淳子・金子智子「辻子遺跡」(三重県埋蔵文化財センター 2004年)

平川南「墨書き土器の研究」(吉川弘文館 2000年)

村山修一ほか「陰陽道叢書2中世」(名著出版 1993年)

V まとめ

今回の発掘調査を行った国分東遺跡及び沖ノ坂遺跡についての成果を第Ⅱ～Ⅲ章にかけて遺構・遺物ごとに述べてきた。ここでは、これらの成果を踏まえて各時代それぞれのまとめと若干の考察を試みておきたい。

1 奈良時代

① 窪穴住居について

窪穴住居は、平成6年度のA地区及び平成13年度のF地区において総数5棟を検出することができた。窪穴住居の時期は、出土遺物から8世紀代とみられる。それぞれの完掘状況は、竈の痕跡を留めるものや、かなりの削平を受けて被熱痕跡を遺構内に認められるものや、遺構検出面において被熱を受けたとみられる赤化の痕跡が認められるものがある。これらの遺構は非常に浅く、遺存状況は僅かである。

また、窪穴住居の近辺には土坑が確認されている。B地区のSH23には土坑（SK50）があり、F地区においてはSH13のすぐ北側に土坑（SK9）が検出されている。確認できた窪穴住居の規模はそれほど大きいものでなく、両者とも窪穴住居に付随する貯蔵施設であった可能性が高いのでは、なかろうか。さらに、窪穴住居の分布は、調査区全体の残存状況からみると密集しているものでなくかなりの広範囲に散らばっているようにみることができる。やや緩やかに傾斜する地形から国分東遺跡の南側を中心に集落が展開していたと見られ、大規模な集落であった可能性は、否定できない。そのうえ南浦魔寺、伊勢国分寺及び国分尼寺がこの地域に建設ないし建立される源となりうる基盤が存在していたことは疑いの余地のないことである。また、近城に多くの古墳群が造営される点からみても、この丘陵地域全域に集落が展開していたと考えてよいのではないか。付け加えるならば、この地域において基盤を有したとみられる大鹿氏の存在に注意しておくべきであろう。

2 平安時代

① 掘立柱建物の変遷について

掘立柱建物は、調査区全域にわたって22棟を確認することができた。建物の時期は、おおよそ9世紀

前半、9世紀後半、10世紀前半と3時期に大別できそうである。9世紀前半は、SB208・SB210・SB211・SB218・SB221・SA215・SD28のグループである。9世紀後半は、SB213・SB214・SB216・SB220・SB223・SD59・65のグループである。10世紀前半は、SB201・SB203・SB205・SB206・SD9・SD10のグループである。これらの各グループから建物配置をみておきたい。

9世紀前半では、掘立柱建物の方位はおおまかに北で東に11～16度の振りである。このグループは、主屋と想定できそうなSB208を含めてSB210・SB211・SB218・SB221・SA215・SD28がある。SB208は、両面庇の建物である。庇は、建物自体の身舎の間数と異なり、他の建物と役割が異なっていると想定される。このグループの中で主屋と考えられよう。この掘立柱建物の重要性を指し示している可能性があろう。他のSB211・SB221は、SB208と比較して狭小であるため、倉といった可能性が高い。SB218は、調査区外に伸びるため断言できないが主屋か副屋と考えられよう。SA215・SD28は、区画する施設とみられる。SA215とSB218の間は160尺、SB208とSD28の間は20尺である一定の規格によって地割が行わされていたとみられる。

9世紀後半では、おおよそ掘立柱建物の方位は北で東に0～7度の振りである。このグループは、主屋、副屋、倉庫、区画溝とみられるSB213・SB214・SB216・SB220・SB223・SD59・65によって構成される。これらのなかでSB220及びSB223は、現状で他の建物に比較して大きく主屋の要素をもっている可能性が高い。SB213・214・216は、副屋であろうか。調査区内で倉と判断できそうなものは確認できていない。SD65は、区画溝とみられるがSB223との間は40尺、SD59とSB214及びSB213の間はそれぞれ40尺と60尺、またSB213・214とSB220・223との間は5尺でありここでも一定の規格によって建物配置がなされていたと考えられる。

10世紀前半では、おおよそ掘立柱建物の方位は北で東に20度の振りである。最後のこのグループは、



第71図 挖立柱建物変遷図 (1/800)



第72図 挖立柱建物変遷図 (1/800)



第73図 挖立柱建物変遷図（1/800）

S B201・S B203・S B205・S B206・S D9・S D10によって構成される。このグループの中で主屋と判断できそうなものは、ない。ここで確認されたものは、倉ないし副屋と判断できそうなものばかりである。S B201は、倉とみて間違いないであろう。

S B201は、S D9とほぼ併行して建てられているだけなくS D9自体がS B201から30尺の地点で直角に屈曲している。また、規格配置はS B205・S B206との間に30尺であり、ここでも一定の建物配置がなされていたと考えられる。

おおまかに建物配置について3時期に区分してその状況についてみてみた。1番目のグループは、調査区のほぼ北側に、2番目のグループは調査区の中程に、最後のグループについては、ほぼ南側に偏って集中している。時期的な要素でみると台地の南にいくほど新しい集落と考えられそうである。しかしながら、平成11・15年度において発掘調査が行われた国分北遺跡では、10世紀前半の掘立柱建物が確認されており、時期的に新しいものも台地の北側にも展開している。こういった点からこの台地では、9世紀後半から10世紀前半にかけてかなり広範囲に展開していたと考えられ、当遺跡含めた周辺部は、伊勢國分寺・國分尼寺などに関わる官人層の集落跡と考えられよう。また、出土遺物からみても縁軸陶器が出土しており、この時代における身分的において高い階級層の集落と考えられそうである。さらに国分北遺跡では道路跡とみられる遺構が確認されており、東海道に関わる遺跡の可能性が高い。

3 鍾倉時代

① 遺構について

調査区のほぼ全域にわたって検出することができた。建物の規模が大きく、1つの建物全てを検出することは、調査区の幅員から不可能に近いが、南東隅に土坑を有するとみられる建物も確認できた。S B202・S B207・S B212・S B222・S B224・S B227・S A225がこの時期とみられる。S B222とS B224は、一部において重複しており2時期にわたくて集落が存在した可能性が高いとみられる。遺物からみるとS B222は13世紀前葉、S B224は13世紀中葉と考えられる。

また、調査区の幅員上、発掘調査の成果が望めな

い部分が多いにもかかわらず、区画溝・掘立柱建物によって構成される屋敷地と判断できる。この集落が集村化した一因には、平安時代からの多くの掘立柱建物群などの集落を出発点として大規模になったと考えられそうである。

② 遺物について

調査によって出土した遺物のなかには、墨書きをする陶器碗（山茶碗）が含まれている。とりわけ掘立柱建物に付随するとみられる土坑からのものが多い。今回の場合は、ほとんどが山茶碗の外面底部に墨書きが施されている。ここで成されている墨書きの文字（記号）の種類は、「大」「×」「へ」「は」「○」及び「中」？と読めるようなものがある。これらの文字（記号）の種類についてみると他の遺跡の数多い出土例とあまり違いはないようである。

墨書きの文字（記号）については、さまざまな見解があるが、出土例のなかで共通の文字（記号）が認められており、文字（記号）そのものに対して共通した意味を認識したうえで書かれているとみられる。また、発掘調査の成果によるだけの問題性もあるが出土する遺跡と全く出土しない遺跡があることを考慮するならば、所有的意識や管理的意識をもつて墨書きされたと考えることに疑問を感じざるをえない。むしろ、一文字で書かれていることには、簡略化された祭祀的ないし呪術的要素のもの可能性のほうが高いのではないかろうか。

古代から続けられてきた祭祀・呪術に関わる儀式は貴族ないし官人階級層において行われてきたが、この時期においては庶民階級の一部に及んで行われるようになってきたのは、なかろうか。また、それは集村化に伴う集落規模の拡大によるものであろう。

最後に本報告書を作成するにあたって多くの方々から助言や支援を受けた。なかでも平成6年度に現地調査を担当された服部芳人氏の図版作成等の多大な努力によるものである。その結果、本書の刊行に漕ぎ着けることができた。ここで多くの支援・助言いただいた方々に対して感謝の念をもって記しておきたい。また、本書の内容において欠けることについては、最終担当者である萩原の責である。

（萩原義彦）

写 真 図 版

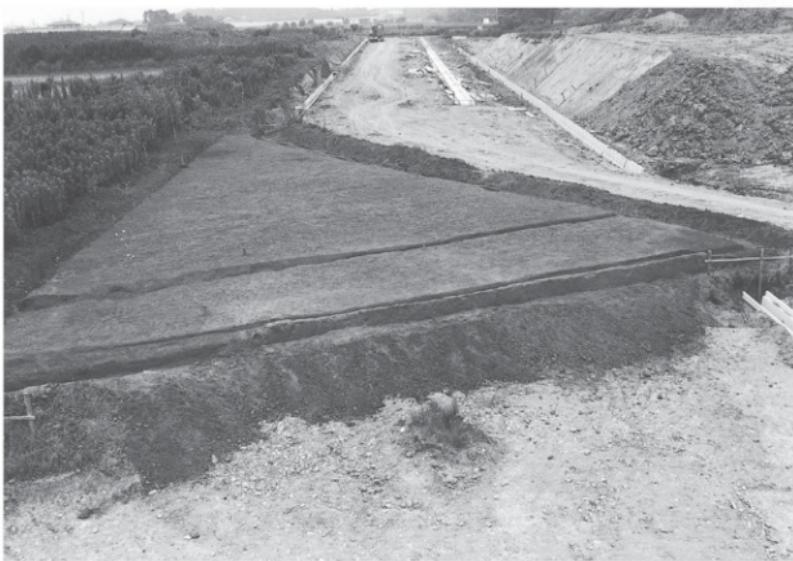
図版 1



A地区完掘状況（南から）



A地区完掘状況（北から）



沖ノ坂遺跡調査区完掘状況（南から）



沖ノ坂遺跡調査区完掘状況（北から）

図版3



A地区SH3遺物出土状況（東から）



A地区SH3遺物出土状況（北東から）



A 地区 SH 3 完掘状況（東から）

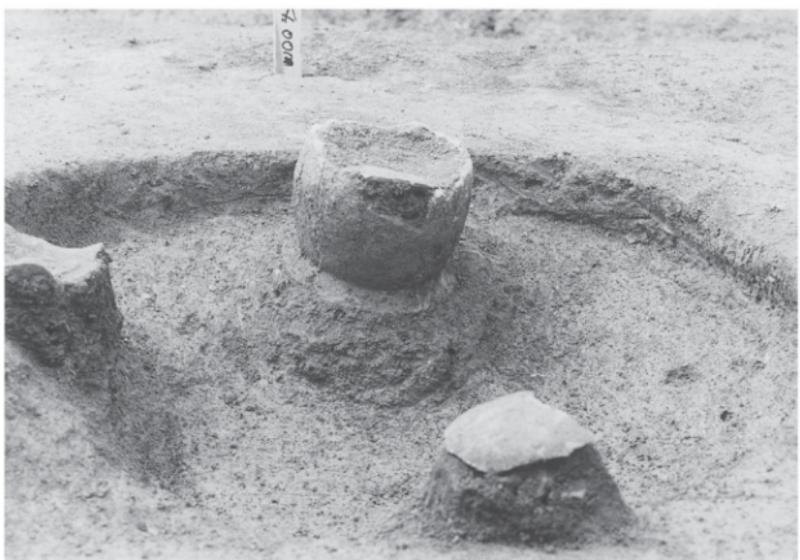


A 地区 SH 3 完掘状況（北東から）

图版5



A地区SH 3竈遺物出土状況（北から）



A地区SH 3竈遺物出土状況（北から）



SB201完掘状況（北から）



SB203完掘状況（東から）

図版7



B地区SD 1完掘状況（東から）



B地区C 7 Pit 1遺物出土状況（東から）



B地区SK 15遺物出土状況（北から）



B地区SK 6遺物出土状況（南から）



S B 204完掘状況（南から）

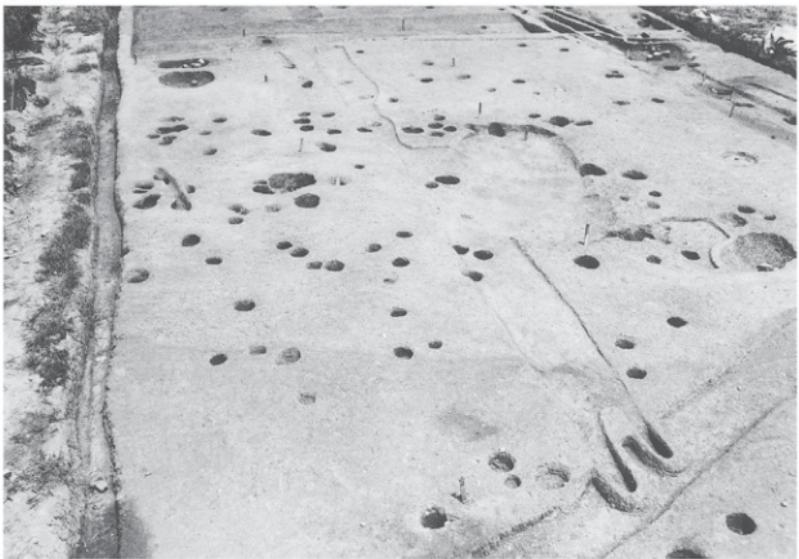


B 地区 C 12 Pit 1 遺物出土状況（南から）



B 地区 S K 19 遺物出土状況（南から）

図版9



B地区SB 202完掘状況（南から）



B地区完掘状況（北から）



B地区完掘状況（南から）



C地区完掘状況（北から）

图版11



C地区 S B 208・209・210完掘状況（北から）



C地区 S K 32完掘状況（南から）



C地区 S K 57遺物出土状況（北から）



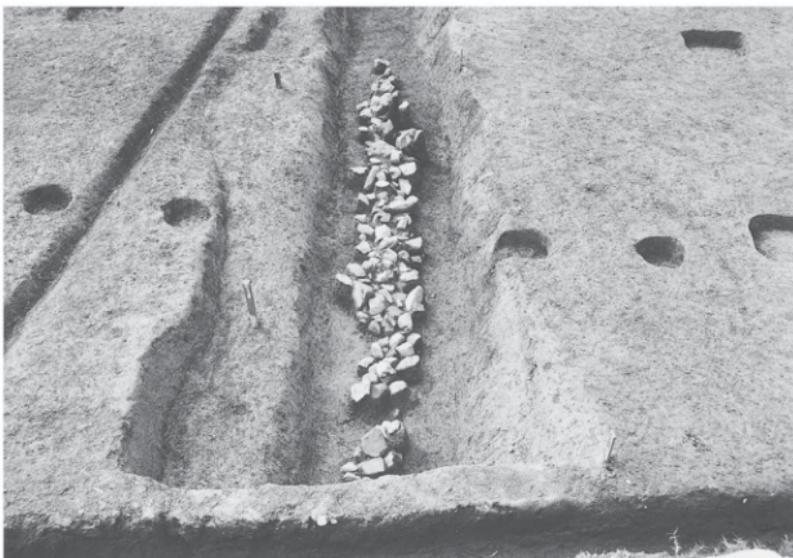
C地区 S K 41完掘状況（南から）



C地区 D 25 Pit 1 遺物出土状況（南から）



C地区 S K50遺物出土状況（南から）



D地区 S D65完掘状況（東から）

図版13



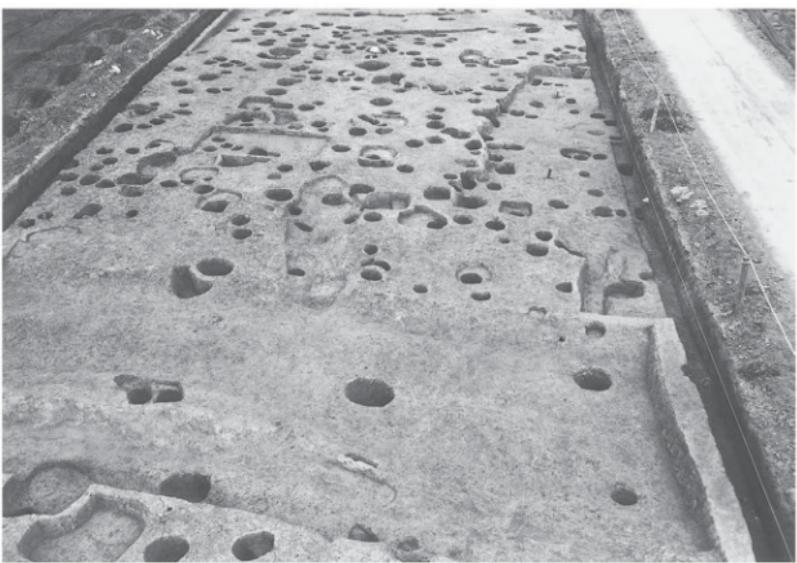
D地区 SB 216完掘状況（南から）



D地区完掘状況（南から）

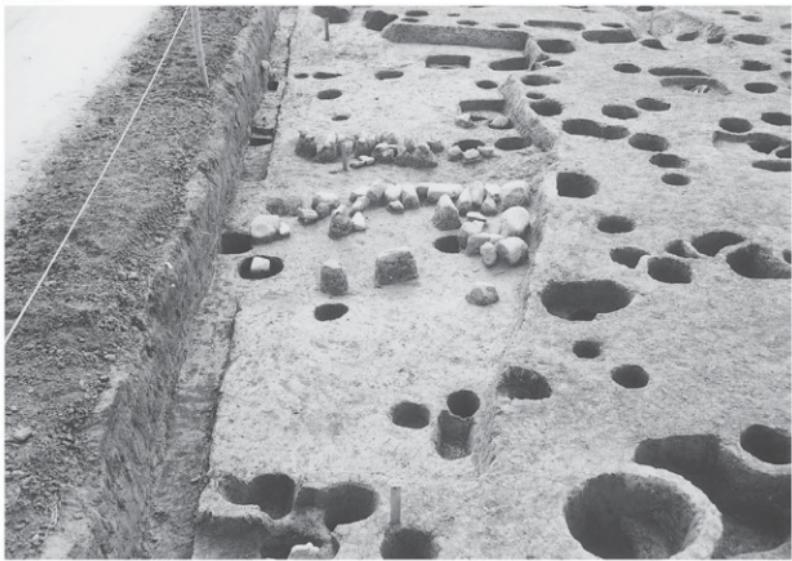


E地区 S B218完掘状況（南から）



E地区 S B221 ~ 224完掘状況（南から）

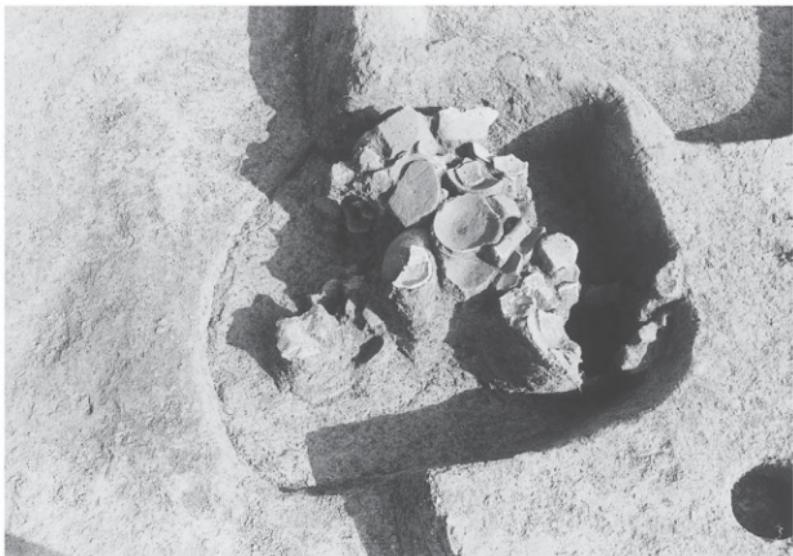
図版15



E地区 SB214完掘状況（南から）



E地区 SB214内 S K56完掘状況（東から）



E地区 E43 Pit 2 遺物出土状況（西から）



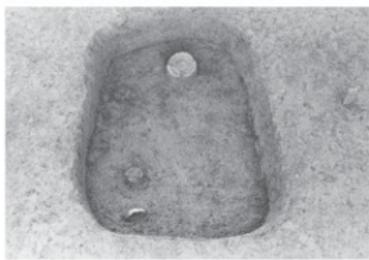
C地区 S K56 土層断面（南から）



E地区 S D78 土層断面（東から）

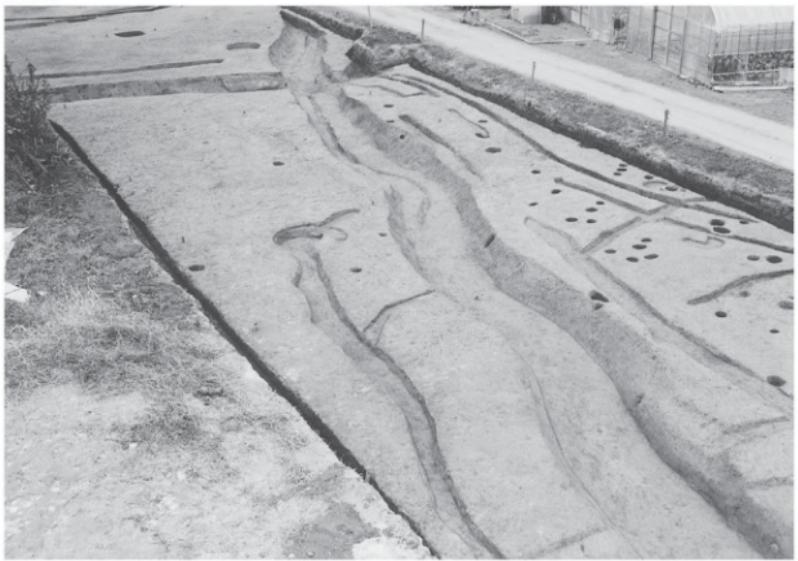


D地区 S D67 完掘状況（東から）



E地区 S X96 遺物出土状況（西から）

図版17



E地区完掘状況（南西から）



E地区完掘状況（北から）



F 地区完掘状況（北から）

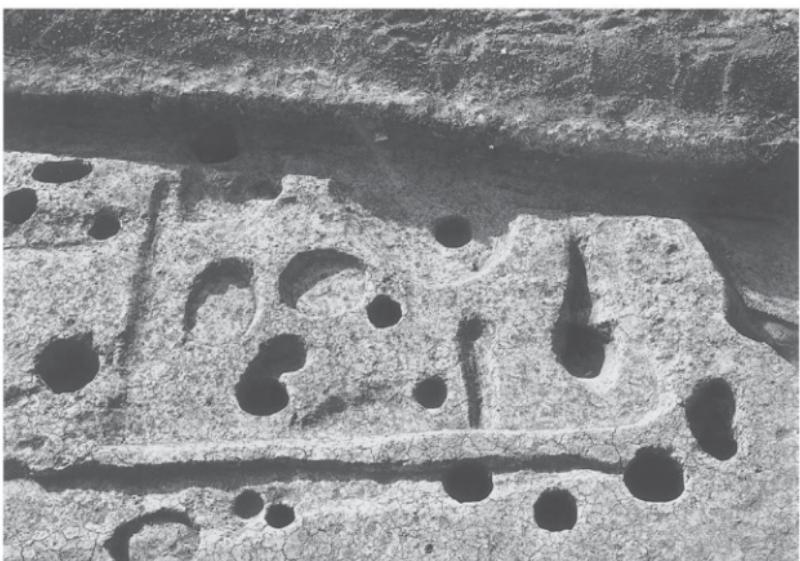


F 地区完掘状況（南から）

図版19



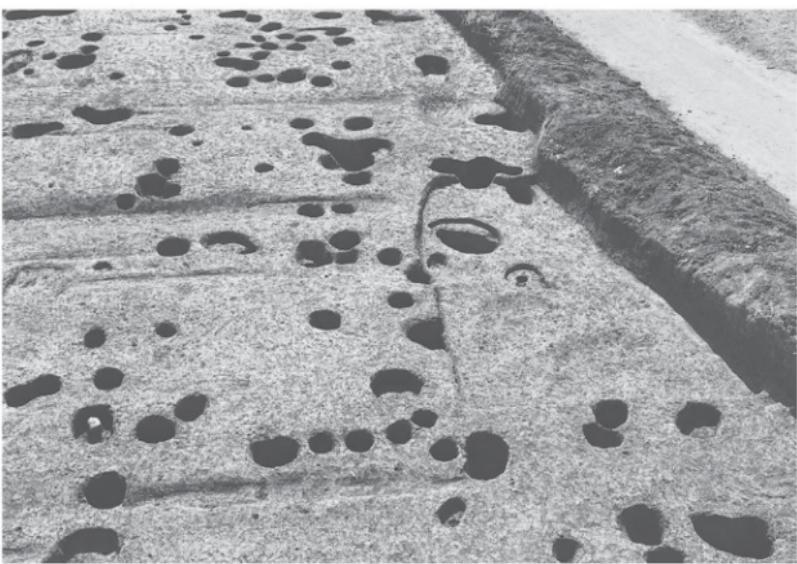
F地区SH 1完掘状況（南から）



F地区SH 13完掘状況（東から）



F地区 S H 2 完掘状況（西から）

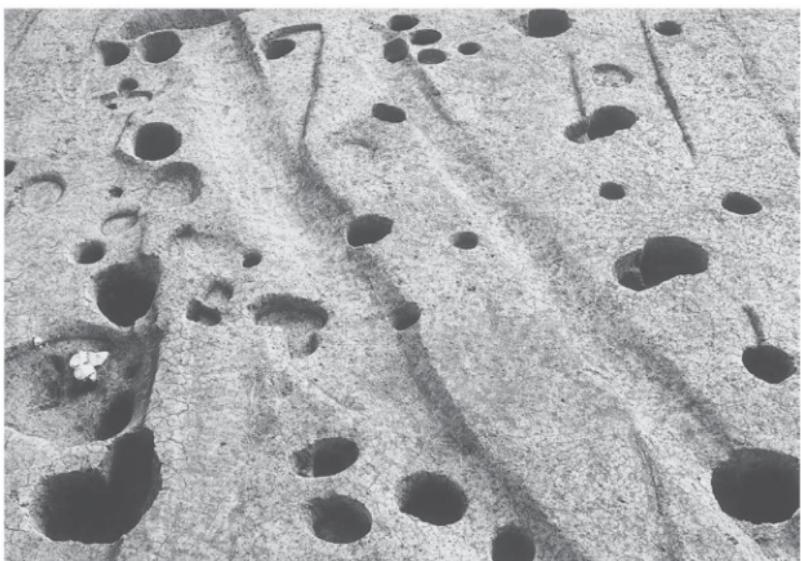


F地区 S B 232 完掘状況（北から）

図版21



F地区SB 228完掘状況（北西から）



F地区SB 228完掘状況（南から）

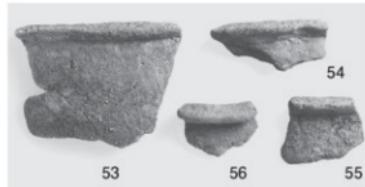


F地区 S B217完掘状況（東から）

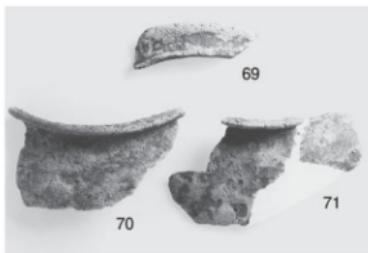


F地区 S K15遺物出土状況（南西から）

図版23



図版24



図版25

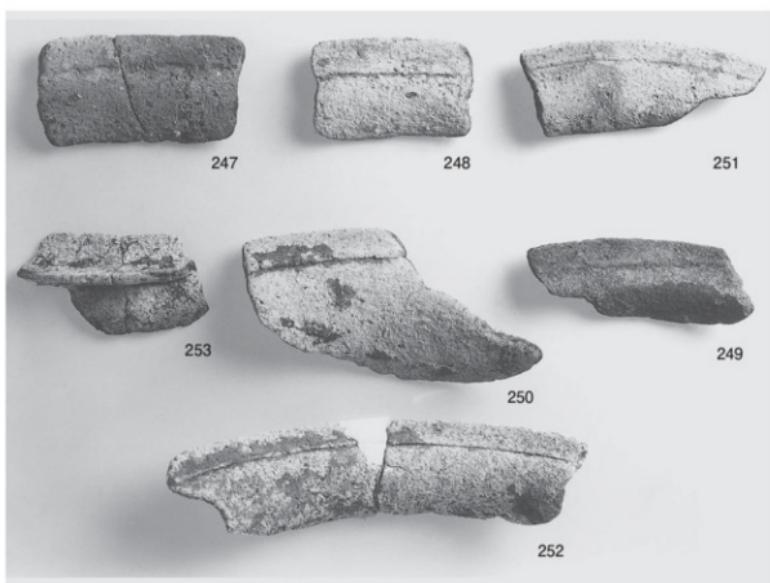


174

図版26



図版27



図版28



272



271



305



307



94

278

26



308

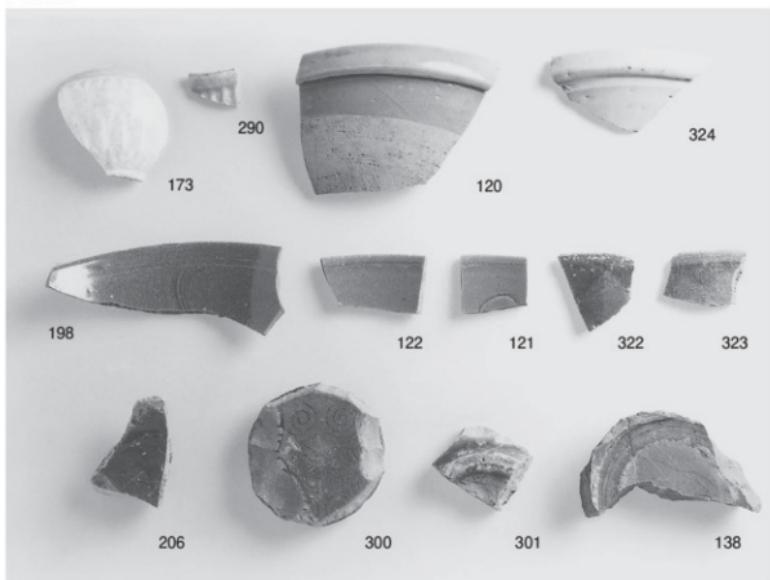


276



309

図版29



報告書抄録

三重県埋蔵文化財調査報告 255
国分東遺跡(第1・3次)・沖ノ坂遺跡
発掘調査報告

2005.3

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 文化印刷

国分東遺跡遺構平面図 (1/400)

